

岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第82集

川内遺跡発掘調査報告書

気仙川地区かんがい排水事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
岩 手 県 農 政 部

川内遺跡発掘調査報告書

気仙川地区かんがい排水事業関連遺跡発掘調査

序

より豊かな生活の実現を目的とした地域開発事業の促進は、本県にとって重要な課題であり、農業基盤整備の事業もその一つであるといえます。一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、貴重な文化財の保存もまた県民の責務であります。

現代生活を豊かにするという開発指向と貴重な文化財の保護という両者の均衡を保つことは、このような趨勢の中で、大きな課題となってきております。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、県教育委員会事務局文化課の指導と調整のもとに、開発によってやむ得ず消滅する遺跡について発掘調査をし、その記録を残す措置をとって参りました。

本報告書は、陸前高田市市内における気仙川地区かんがい排水事業に関連して発掘調査した川内遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査範囲はかんがい排水路工事という性格上細長く、面積も小さいものですが、縄文時代竪穴住居跡、土壇、溝、礎石立建物跡などが発見され、縄文時代中期から平安時代までの土器や石器など多数が出土しております。この地方は貝塚をはじめ遺跡の多いところですが、それらの資料とあわせ、本調査結果が先人たちの歴史解明の資料となるものと考えます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財理解の一助となることを期待しております。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力をいただいた陸前高田市教育委員会、大船渡農林事務所をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和59年10月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター
理事長 金子 彰 吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	金子彰吉	(県教育長)
副理事長	尾沢重遠	(県教育次長)
常務理事	熊谷正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田良和	(県農政部次長)
〃	高橋健之	(県林業水産部次長)
〃	穂積昭慈	(県土木部次長)
〃	板橋源	(県立博物館長)
〃	草間俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小形信夫	(元常務理事)
監事	佐藤公志	(県教委総務課長)
〃	小野寺英二	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷正男	専門調査員	栃平	沢井	満郎
副所長	宮吉田	〃	中村	井村	進一
所長	付吉田	〃	田村	村良	一久
〔総務課〕		〃	岩光	岩光	文英
総務課長	菊池勉	〃	玉川	川英	長喜
庶務係長	阿部詔夫	〃	石川	川謙	一門
主任	戸草内幸加	〃	三浦	浦与右衛門	介文
技能力員	佐藤春	〃	高橋	橋義清	
〔調査課〕		〃	高佐	々々	
調査課長	近藤宗光	〔資料課〕			
主任専門調査員	昆野生	資料課長	名須川	川溢	男和
〃	国生方	専門調査員	菊池	池利	重宗
専門調査員	片沼	〃	工藤	藤川	
〃	大原	〃	中酒	井	
〃	渡辺	〃			
〃	田鎖				
〃	佐々木嘉				

例 言

遺跡名	川内 ^{かわうち} 遺跡
遺跡所在地	陸前高田市米崎町字川内
事業名	気仙川地区 県営灌漑排水事業
事業主体者	岩手県 大船渡農林事務所
調整機関	岩手県教育委員会 文化課
調査機関	財団法人 岩手県埋蔵文化財センター
発掘期間	昭和 58 年 5 月 30 日～7 月 7 日
調査担当者	主任専門調査員 国生尚 専門調査員 石川長喜
調査記号	KU83
協力機関	陸前高田市教育委員会 陸前高田市立博物館
助言・協力者	佐藤正彦 陸前高田市立博物館学芸員

目 次

序	(7) C 4—1 // 29
例 言	(8) C 8—1 // 29
目 次	(9) C 8—2 // 33
I 調査に至る経過..... 1	(10) C 8—3 // 33
	(11) C 8—4 // 33
II 位置と環境..... 1	(12) C 9—1 // 33
1. 位置と現状..... 1	(13) C 9—2 // 35
2. 地 形..... 2	(14) C 9—3 // 35
3. 周辺の遺跡..... 4	(15) C 9—4 // 35
	(16) C 9—5 // 35
III 調査の経過..... 10	(17) C 9—6 // 35
	(18) C 9—7 // 37
IV 基本土層..... 13	(19) C 9—8 // 37
	(20) C10—1 // 37
V 遺構と遺物..... 13	(21) C10—3 // 37
1. 礎石建物跡..... 13	(22) C10—4 // 37
2. 竪穴住居跡..... 15	(23) C10—5 // 38
(1) C 8 竪穴住居跡 15	(24) C10—6 // 38
(2) C10 竪穴住居跡 23	(25) C10—7 // 39
3. 焼土遺構..... 24	(26) C10—8 // 39
(1) B 4 焼土遺構 24	(27) C11—1 // 39
(2) C10 // 24	(28) C11—2 // 39
(3) C11 // 24	(29) C11—3 // 39
4. 埋設土器..... 24	(30) C11—5 // 39
(1) C 7 埋設土器 24	(31) C11—7 // 41
(2) C 9 // 25	(32) C11—8 // 41
(3) C10 // 26	
5. 土壇..... 27	6. 土壇墓..... 41
(1) B 4—1 土壇 27	7. 遺物包含層..... 42
(2) B 4—2 // 27	(1) 土器..... 42
(3) B 5—1 // 27	(2) 石器・石製品..... 43
(4) B16—1 // 29	(3) 土偶・土製品..... 64
(5) C 3—1 // 29	(4) その他の遺物..... 70
(6) C 3—2 // 29	VI まとめ..... 74

図 版 目 次

<p>図版 1…………… 5 位置図</p> <p>図版 2…………… 6 地形図</p> <p>図版 3…………… 7 地形分類図</p> <p>図版 4…………… 8 周辺の遺跡分布</p> <p>図版 5…………… 11 調査範囲図</p> <p>図版 6…………… 12 地区割図</p> <p>図版 7…………… 14 遺構配置図</p> <p>図版 8…………… 16 B4礎石建物跡</p> <p>図版 9…………… 18 C8竪穴住居跡</p> <p>図版 10…………… 19 C8竪穴住居跡出土遺物(1)</p> <p>図版 11…………… 20 C8竪穴住居跡出土遺物(2)</p> <p>図版 12…………… 21 C8竪穴住居跡出土遺物(3)</p> <p>図版 13…………… 22 C10竪穴住居跡</p> <p>図版 14…………… 24 焼土遺構</p> <p>図版 15…………… 25 C7埋設土器</p> <p>図版 16…………… 25 C9埋設土器</p>	<p>図版 17…………… 26 C10埋設土器</p> <p>図版 18…………… 28 土 壙(1)</p> <p>図版 19…………… 30 土壙出土遺物(1)</p> <p>図版 20…………… 31 土壙出土遺物(2)</p> <p>図版 21…………… 32 土壙出土遺物(3)</p> <p>図版 22…………… 33 C9-2土壙出土遺物</p> <p>図版 23…………… 34 土 壙(2)</p> <p>図版 24…………… 36 土壙出土遺物(4)</p> <p>図版 25…………… 38 土壙出土遺物(5)</p> <p>図版 26…………… 40 土壙墓</p> <p>図版 27…………… 44 土器 (第1、2群)</p> <p>図版 28…………… 44 〃 (第2群)</p> <p>図版 29…………… 45 〃 〃</p> <p>図版 30…………… 45 〃 〃</p> <p>図版 31…………… 46 〃 (第3、4群)</p> <p>図版 32…………… 46 〃 (第5群)</p>
--	---

図版 33	47
" "	
図版 34	47
" "	
図版 35	48
" "	
図版 36	48
" "	
図版 37	49
" (第6群)	
図版 38	49
" "	
図版 39	50
" "	
図版 40	50
" "	
図版 41	51
石鏃(1)	
図版 42	51
" (2)	
図版 43	52
" (3)	
図版 44	53
石錐	
図版 45	53
搔器類(1)	
図版 46	54
" (2)	
図版 47	55

打製石斧	
図版 48	56
磨製石斧	
図版 49	57
片刃、両刃石器	
図版 50	58
磨石(1)	
図版 51	58
" (2)	
図版 52	59
" (3)凹石	
図版 53	60
石皿、砥石	
図版 54	61
石棒	
図版 55	62
石剣	
図版 56	63
その他の石製品	
図版 57	67
土偶	
図版 58	68
土製品	
図版 59	69
円盤状土製品	
図版 60	70
鉄製品	
図版 61	72
骨製品、自然遺物	

写真図版目次

写真図版 1	75	写真図版 17	91
調査区全景(1)		土器 (第1、2群)	
写真図版 2	76	写真図版 18	92
" (2)		" (第2群)	
写真図版 3	77	写真図版 19	93
B4礎石建物跡		" (第2群)	
写真図版 4	78	写真図版 20	94
C8竪穴住居跡		" (第2群)	
写真図版 5	79	写真図版 21	95
" 出土遺物		" (第3、4群)	
写真図版 6	80	写真図版 22	96
C10竪穴住居跡		" (第5群)	
写真図版 7	81	写真図版 23	97
埋設土器		" (第5、6群)	
写真図版 8	82	写真図版 24	98
埋設土器、土壙墓出土遺物		" (第5群)	
写真図版 9	83	写真図版 25	99
土壙(1)		" (第5群)	
写真図版 10	84	写真図版 26	100
土壙(2)		" (第6群)	
写真図版 11	85	写真図版 27	101
土壙(3)		" (第6群)	
写真図版 12	86	写真図版 28	102
土壙出土遺物(1)		石鏃(1)	
写真図版 13	87	写真図版 29	103
" (2)		" (2)	
写真図版 14	88	写真図版 30	104
" (3)		" (3)、石錐	
写真図版 15	89	写真図版 31	105
" (4)		搔器類(1)	
写真図版 16	90	写真図版 32	106
土壙墓		" (2)	

写真図版 33	107	写真図版 41	115
磨製石斧		〃 (2)、土製品	
写真図版 34	108	写真図版 42	116
打製石斧、片刃、両刃石器		円盤状土製品(1)	
写真図版 35	109	写真図版 43	116
磨石(1)		〃 (2)	
写真図版 36	110	写真図版 44	117
〃 (2)、凹石		その他の遺物	
写真図版 37	111	写真図版 45	117
石棒		剥片(1)	
写真図版 38	112	写真図版 46	118
石剣		〃 (2)	
写真図版 39	113	写真図版 47	118
その他の石器、石製品		〃 (3)接合資料	
写真図版 40	114		
土偶(1)			

I 調査に至る経過

岩手県農政部によって、計画が進められてきた気仙川地区「県営かんがい排水事業」に関連して、事業計画地区に数多くの埋蔵文化財包蔵地の存在が予測され、その所在確認と取扱いについて、県教育委員会と県農政部及び関係機関との間で早くから協議がもたれた。県教育委員会は、昭和53年、54年度に当該事業地区15kmを対象に、遺跡所在の概況把握を目的とした分布調査を実施した。その結果にもとづき県教育委員会と県農政部との間で更に協議し、調整が図られた。

そのうち、計画地区に存在する川内遺跡の滅失をさけられない部分について、県農政部長と県教育委員会教育長とによる「農業基盤整備事業と埋蔵文化財保護との調整に関する覚書」にもとづき、昭和58年度に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなったので、県農政部からの委託により、当岩手県埋蔵文化財センターが調査を担当することとなったものである。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と現状

位置 川内遺跡は国鉄大船渡線の陸前高田駅から東(80°)方向に約3.6km、脇の沢駅からは北北東(32°)方向に約1.5kmの位置にあって、陸前高田市米崎町字川内に所在する。

陸前高田市は岩手県の南東部に位置し、海岸線の南端地域一帯を行政区画としている。宮城県と境を接し、気仙郡に属している。

陸前高田市は昭和30年1月1日に、町村合併促進法にもとづいて、高田、気仙、広田の3町と小友、米崎、矢作、竹駒、横田の5ヶ村とが合併して誕生した。遺跡は旧町村でいうならば米崎村に位置することになる。

川内地区は陸前高田市の東部に位置し、浜田川流域の中央部にあたり、最も近い海岸線まで南(180°)方向に約1.4kmほど離れている。

位置の詳細を測地的に示すと次のようになる。

球面座標においては、北緯39°00'54" 東経141°40'15"

平面直角座標(第10系)においては X -108.8~109.1km Y +72.45~72.7km

標高は 39~31m

遺跡は又、次の図上に位置している。

5 万分之 1 地形 NJ-54-14-6 「盛」さかり

2 万 5 千分之 1 地形図 NJ-54-14-6-2 「大船渡」おおふなと

現状 遺跡の所在する米崎町川内地区は、北に氷上山をあおぎ、南に広田湾を見おろし、東、西を山にはさまれた景勝の地である。

浜田川やその支流に沿った平地は主として水田として利用され、丘陵、扇状地など多少比高の高い土地は果樹園、畑地や宅地として利用されることが多い。特に果樹園はさかんで、リンゴ、ナシ、ブドウなどが作られている。

遺跡の所在地は、北から南方向に傾斜し、少し広めの台地状になっている。台地の南東斜面下には浜田川が北東から南西に流れ、台地の北東には佐野川が北西から南東に流れ浜田川と合流している。

この台地には宅地、道路の他に水田や畑地があり、多くは畑地と果樹園になっている。表土下には厚い礫層があるので表土の薄い所ではすぐ耕作中に礫層に当たってしまうために、土地の境界にはこれらの礫が集められて土手状になっている。

礫層の構成礫は大きなもので 2～3 m もあり、大小さまざまの角礫で充填物はほとんどなく空間ができています。空間の大きいものは空洞化しトンネル状になっているものもある。たまにこれらの空洞部分の天井が崩れて、地表面に穴ができることがあり、地域内にも数ヶ所にこうした穴が見られる。

2. 地形の概観

川内遺跡の立地する本地域は、北上山地の南東部にあたり、山地が広く分布し、南は太平洋に面している。

最高峰氷上山(874.7m)を中心とする氷上山山地の東西両端は盛川、気仙川の二河川に限られており、気仙川沿いに気仙川低地が広がっている。

低地と山地の間にはさまれた地域には南北に帯状に連なる主として海岸段丘起源の陸前高田丘陵地帯があり、広く、耕作地として利用されている。

河川は気仙川が代表河川であるが、この他に、広田湾に直接注ぐ浜田川がある。

広田湾に面する高田松原は砂洲上の景勝地として天然記念物に指定されている。

北上山地は、かつて準平原化が行われ広大な侵食平坦面が形成された後隆起し、侵食の復活によって開析され、解体しつつある地形であるとされている。山頂の高度は、北上山系の縁辺部ということもあって、800m以下と概して低い。盛川と気仙川にはさまれた山地は、大部分が氷上山型花崗内緑岩からなっていて、最高峰氷上山は、この山塊のほぼ中央に位置している。

気仙川左岸の氷上山山地山麓に南北に長い丘陵地帯が連なる。この陸前高田丘陵は標高200m

以下で、海岸段丘の開折された緩斜面が広く分布する地域である。この海岸段丘起源の地形は、堆積物の厚さも10m内外のところもあるが、一般に開折が非常に進んでおり、平坦な原面は非常に少ない。侵食の後現在残っている尾根の部分は、うねるような緩斜面をなしている。これらは地形発達史的にみると段丘に分類される地形であるが、平坦度が低いので丘陵に入れた。また、この地域では、谷底の広い緩傾斜の谷が多く、丘陵と谷底との間に明瞭な傾斜変換点をもたない。谷中はいたるところに花崗岩巨礫が点在しており、枝沢からの合流点では水田の下に角礫層が見られるが、これらの地形は、崖錐性扇状地として区分されてある。

丘陵と丘陵とにはさまれた山麓緩斜面がある。これは高田町背後に大きなものが数ヶ所あり、赤木祥彦(1964)の言うペディメント状緩斜面であり、花崗岩地帯特有のもので、一般には侵食面と考えられている。

段丘は、海岸段丘起源の平坦面と河川沿いの河岸段丘がある。海岸段丘は標高100～から10mまで、細分すれば5段階に分類されるが、面の保存は悪い。ここでは、比較的平坦な面だけを砂礫段丘Iとして、その中での面区分は行なわなかった。露頭観察によると、基盤岩に5～10mの礫層が堆積し、構成礫は最大1m、平均15～20mの垂円礫～円礫であり充填物により固化している。

高田町では海岸平野的性格をおび、広田湾の前面に広がる当面最大の低地となる。自然堤防も見られ、その上には陸前高田市の主要な市街地がのっている。古川沿は高田松原と気仙川デルタとの間に生じた瀉湖と考えられており、付近は湿地帯になっている。沼の付近の水田では、泥の交った細砂層の堆積が見られ、三角州性の低地であることが分かる。

扇状地と平面形態は類似しているが、扇面の傾斜がよりきつく、側方斜面からの自然落下により物質供給を受けている地形は崖錐性扇状地として分類されてある。

遺跡の直接立地する地形は、浜田川の流域に属し、浜田川と支流佐野川との合流点、両河川の左岸に位置している。

遺跡は浜田川沿いの谷底平地に面し、丘陵と丘陵とにはさまれた扇状地上に立地している。この扇状地の北に隣接した上方には山麓緩斜面に区分されたペディメント緩斜面があつて、侵食面と考えられており、扇状地形成の供給源である可能性がある。さらに、この緩斜面の北に隣接して崖錐性扇状地が形成されている。これらの一連の地形形成には浜田川の支流佐野川がその役割をはたしているものと考えられる。

地形は次の文献を引用しまとめた。

1975 岩手県 北上山系開発地域分類基本調査「盛」

3. 周辺の遺跡

周辺の遺跡 川内遺跡周辺の遺跡分布を概観するときに、まず第一にとりあげなければならないのは貝塚の分布であろう。岩手県の海岸線はリアス式海岸であるが本地域はこの南端部に位置する。このことと関連があると思われるが、岩手県における貝塚は広田湾周辺に多数分布している。

主な貝塚をあげると、牧田、二日市、堂の前、矢の浦、瀬沢、大陽台、中沢浜、門前、細浦、大船渡、蛸の浦、清水などがある。この内広田湾側が7ヶ所、大野湾側1ヶ所、大船渡湾側3ヶ所であり、史跡に指定されているものは、中沢浜、蛸の浦、下船渡の貝塚である。なお、この他に、多少不確定要素があるが陸前高田市内においては、袖野、大陽、岩倉、貝畑などが貝塚として知られている。

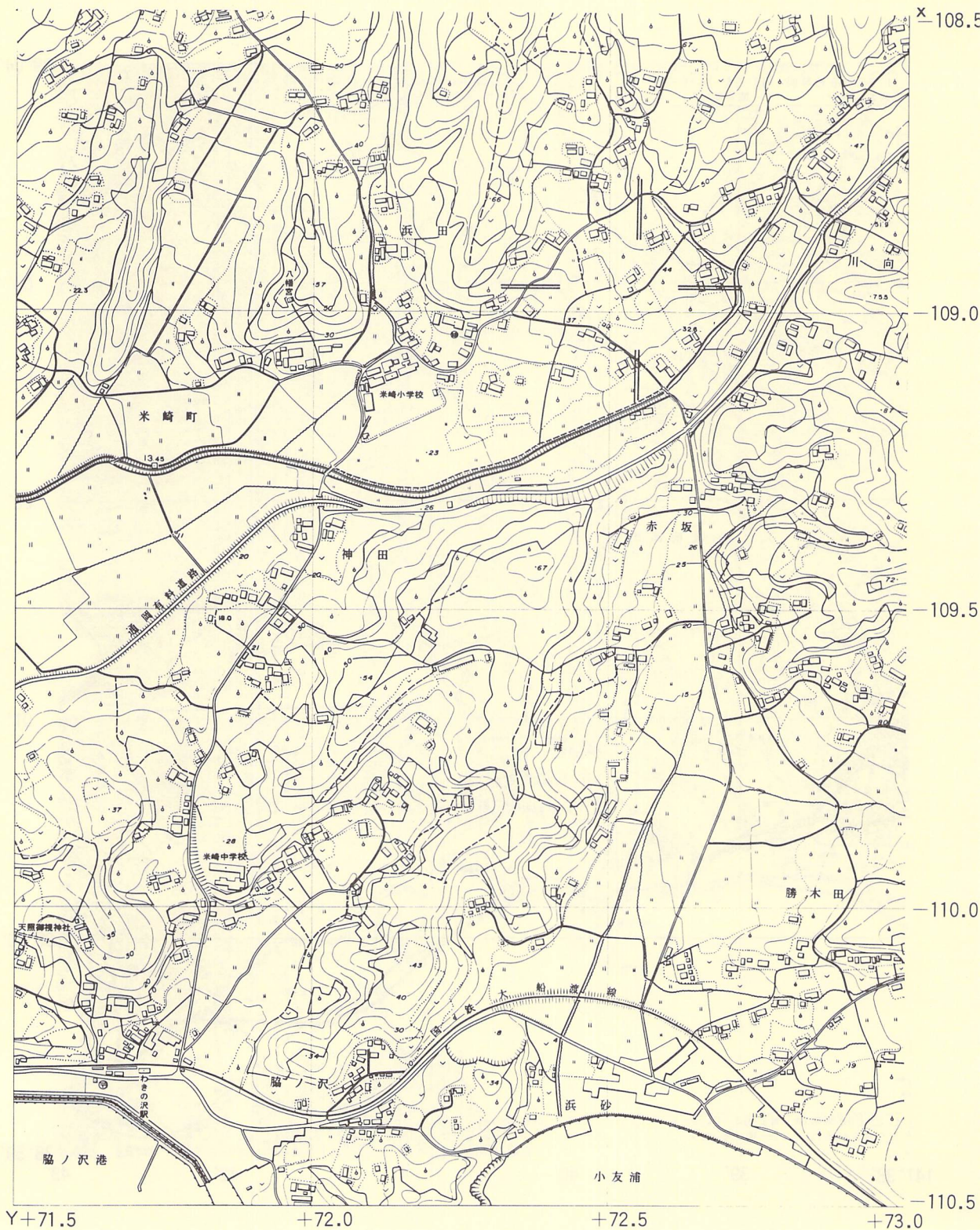
縄文時代の遺跡は貝塚ばかりではなく、広田湾をかこむように、広田半島や浜田川、気仙川、矢作川などの各河川に沿った丘陵上や山地のきわなどに多数の遺跡が分布している。川内遺跡は浜田川流域における遺跡の一つであるが、比較的近い範囲について遺跡の分布状況を第4図に示した。

川内遺跡 周辺の遺跡分布を見ると、この川内遺跡が浜田川流域の中でも比較的規模の大きい遺跡であることがわかる。

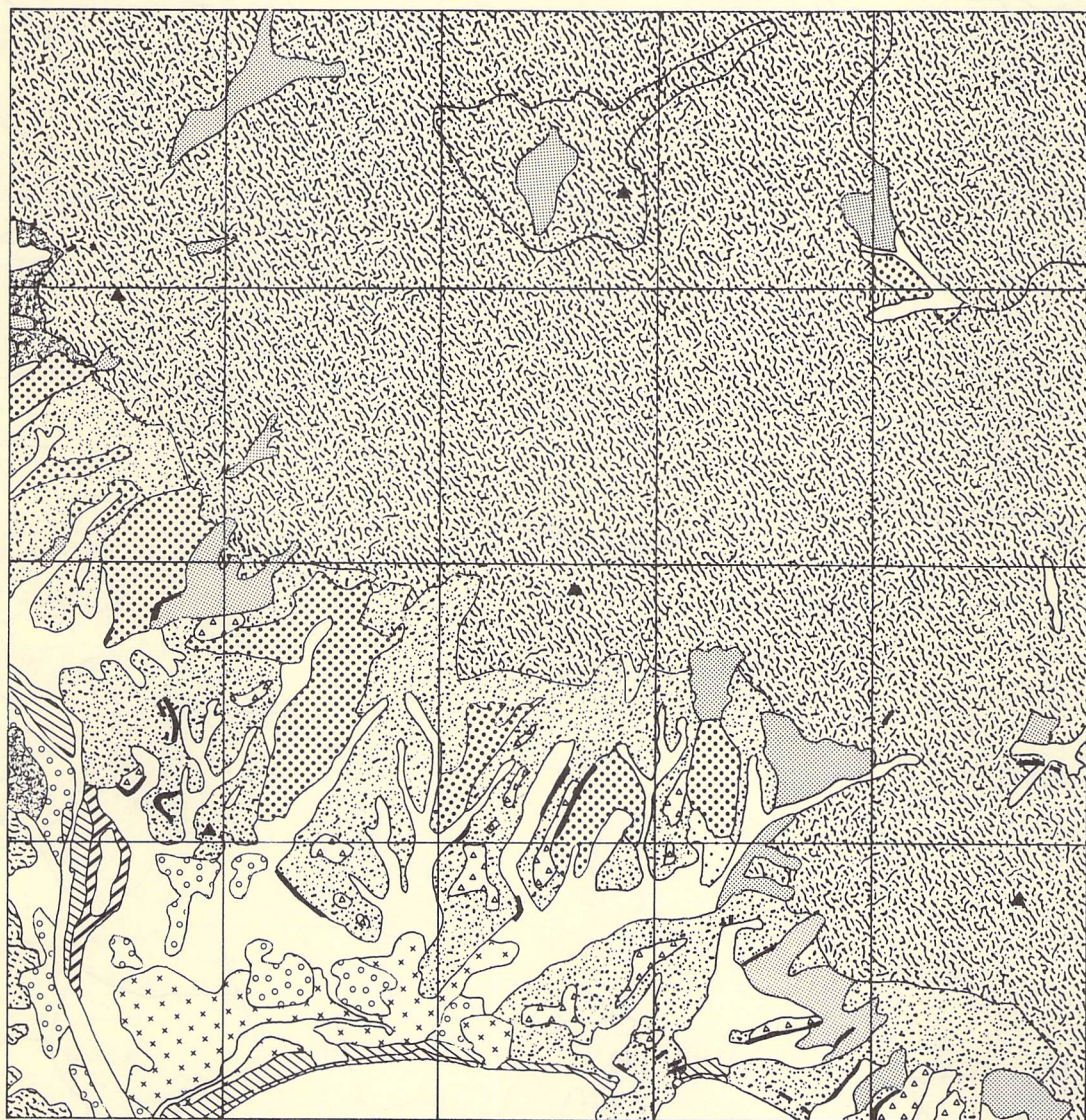
遺跡は北東から南西の方向に傾斜する台地上に立地し、この台地の頂部から、南斜面、東斜面にかけて土器や石器が散布しているので、およそ、この散布範囲が遺跡の範囲と推測される。表面採集による遺物は、縄文時代後期、晩期の土器片、フレイク、石棒の破片、磨石などの石器などが見られる。この他に、耕作時に出土した遺物として注目されるのは石棒である。これは熊谷マス子氏の畑から完形に近い縄文式の深鉢などとともに出土したもので、現在市立博物館に展示されている。(9頁の写真参照)



第1図 位置図



第2図 地形図



山地



緩斜面



丘陵地 I
(起伏量
200~100m)



丘陵地 II
(起伏量100m
未滿)



砂礫段丘 I



扇状地



崖錐性扇状地



谷底平野



海岸平野



自然堤防



旧河道



浜
砂嘴砂州

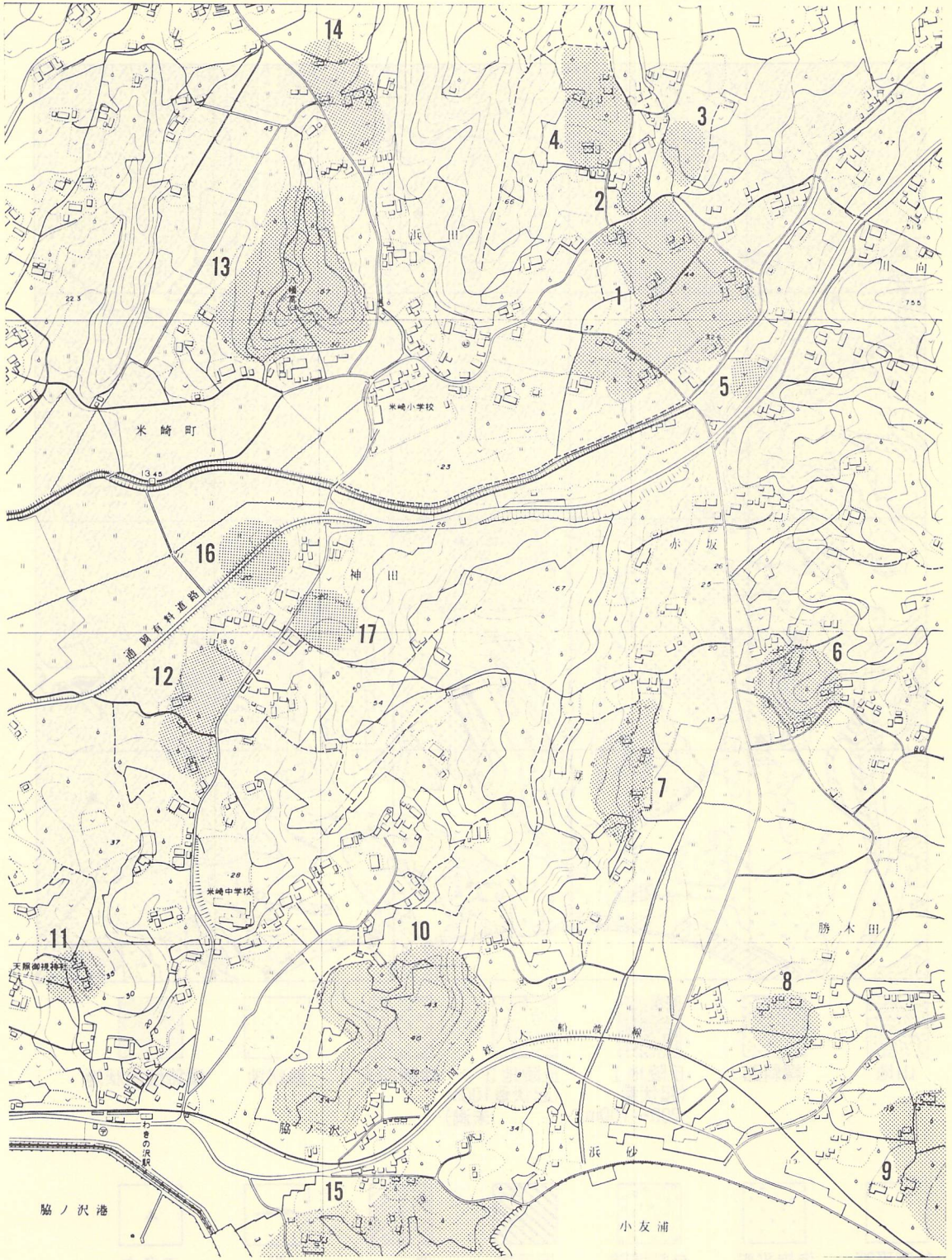


崖



三角点

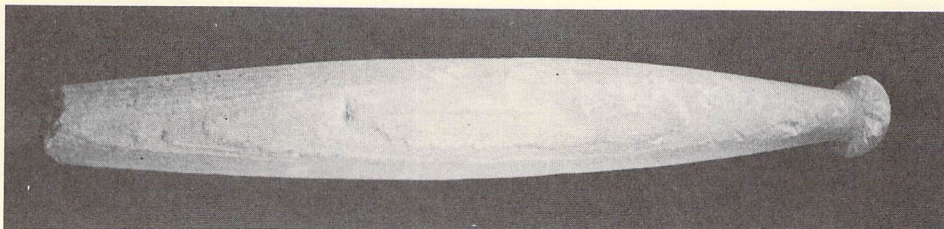
第 3 図 地形分類図



第4図 遺跡分布図

番号	名称	出土遺物	全国遺跡地図 (岩手県)	備考
1	川内遺跡	縄文(後)(晩) 土師器	43-183 184	
2	?	縄文		
3	?	縄文		
4	高畑IV遺跡	縄文	43-182	
5	川向IV遺跡	縄文(晩) 土偶 石斧		
6	中島II遺跡	?	43-188	
7	川西II遺跡	縄文	43-189	
8	?	土師器		
9	堂の前貝塚	縄文(後) 骨角器 石器	43-192	
10	?			館跡
11	松峰貝塚	貝層(カキ)	43-190	中世?
12	中島I遺跡	?	43-187	
13	西の沢館跡		43-176	中世 中山館(金氏)
14	野沢III遺跡	?	43-175	
15	米崎館跡		43-191	中世 (千葉氏)
16	神田I遺跡	?	43-185	
17	神田II遺跡	?	43-186	

この分布図は1989 文化庁文化財保護部 全国遺跡地図「岩手県」をもととし、陸前高田市立博物館学芸員佐藤正彦氏の資料を加えて製作したものである。



川内遺跡出土の石棒 (全長1m)

III 調査の経過

調査計画 当初計画においては遺跡の範囲と推定される区間における灌漑水路部分長さ約300m、巾3mについて発掘調査を実施するというもので、期間は、昭和58年5月27日から6月30日までであった。しかし雨天が多く期間中に終了できず、調査期間は7月7日まで延長された。

実施にあたり調査範囲は中心杭によってNo235+12からNo249+14までの282mであることを確認した。又、土地の境界に礫が土手状に集められていて、ここを水路が横断あるいは縦断するので、礫を用地外に排除するため、バックホーとダンプカーを利用することになった。

調査範囲と地区割 調査の範囲は遺跡の範囲内における水路部分であるが、現地での確認によって、中心杭のNo235+12より以前の地区は水田に造成されていること、No249+14以後については浜田川の対岸に渡ってしまうこと、などの状況があつて、遺跡の範囲が現在の推定より広くなったとしても、発掘調査の範囲に変化のないことが確認された。

地区割は水路設計図によれば、No235+12からNo249+14までの間は4本の直線によって設計されているので、この直線区間をそのまま調査地区A、B、C、Dに区分した。次に、各地区毎に、中心杭番号の早い方から順に、3m巾の長さ5mのグリッドによって区切り、このグリッドをつなぐようにして地区割をおこなった。

A地区はNo235+12からNo238+2.24までの50.24mをA1～A10グリッドに、B地区はNo238+2.24からNo242までの77.76mをB1～B16グリッドに、C地区はNo242からNo245までの60mをC1～C12グリッドに、D地区はNo245からNo249+14までの94mをD1～D19グリッドである。

なお、中心杭については平面直角座標値が出ていないので正確な位置の復原はできないが、1千分の1の地形図上で測定した座標値を参考までに示しておく。

2 MS82A-09 001頁 (590928)

中心杭のNo	X	Y
No235+12	-108 946m	+72 499m
No238+2.24	-108 918	+72 541
No242	-108 983	+72 584
No245	-108 037	+72 612
No249+14	-109 000	+72 699

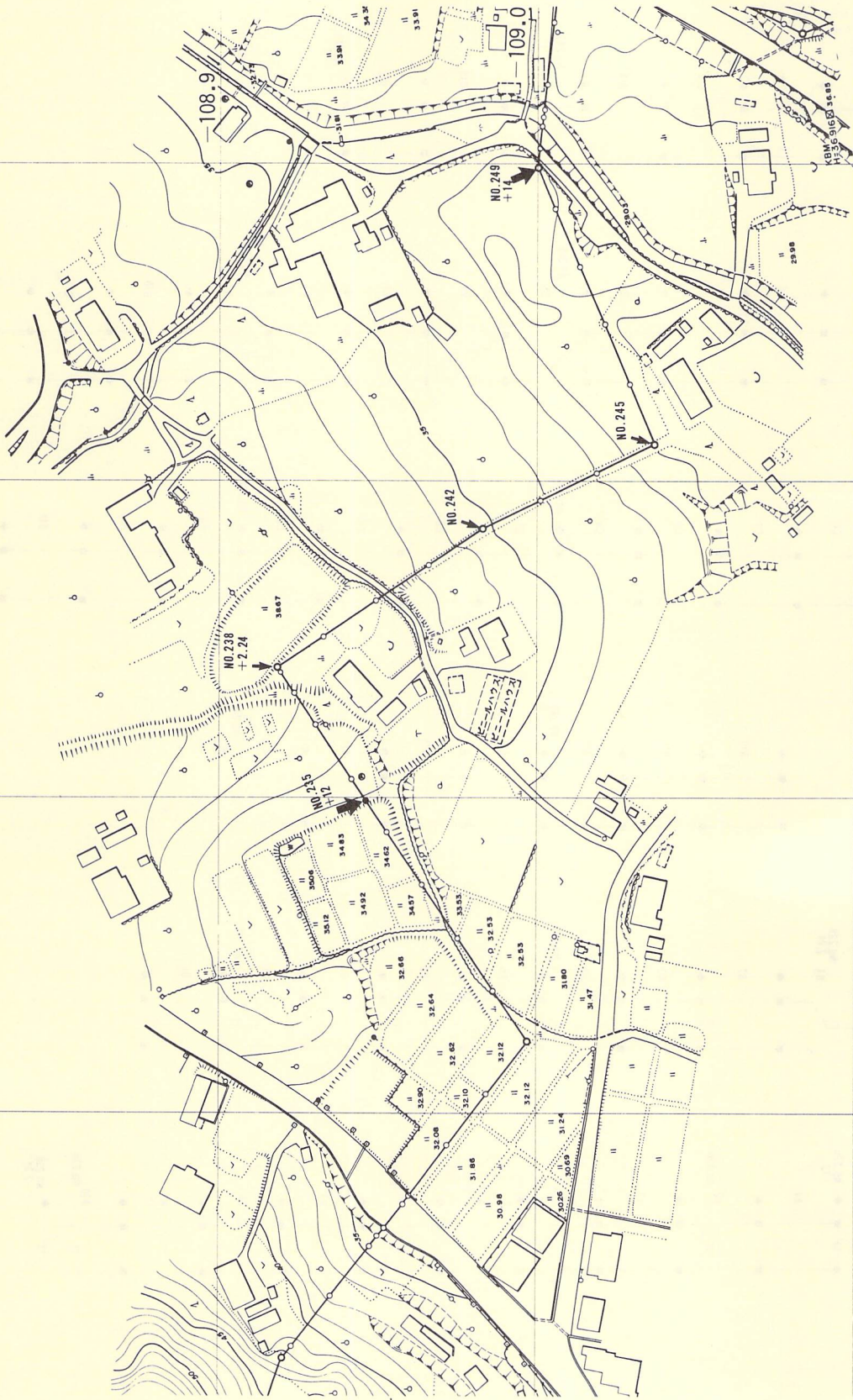
X-108.8

+72.7

+72.6

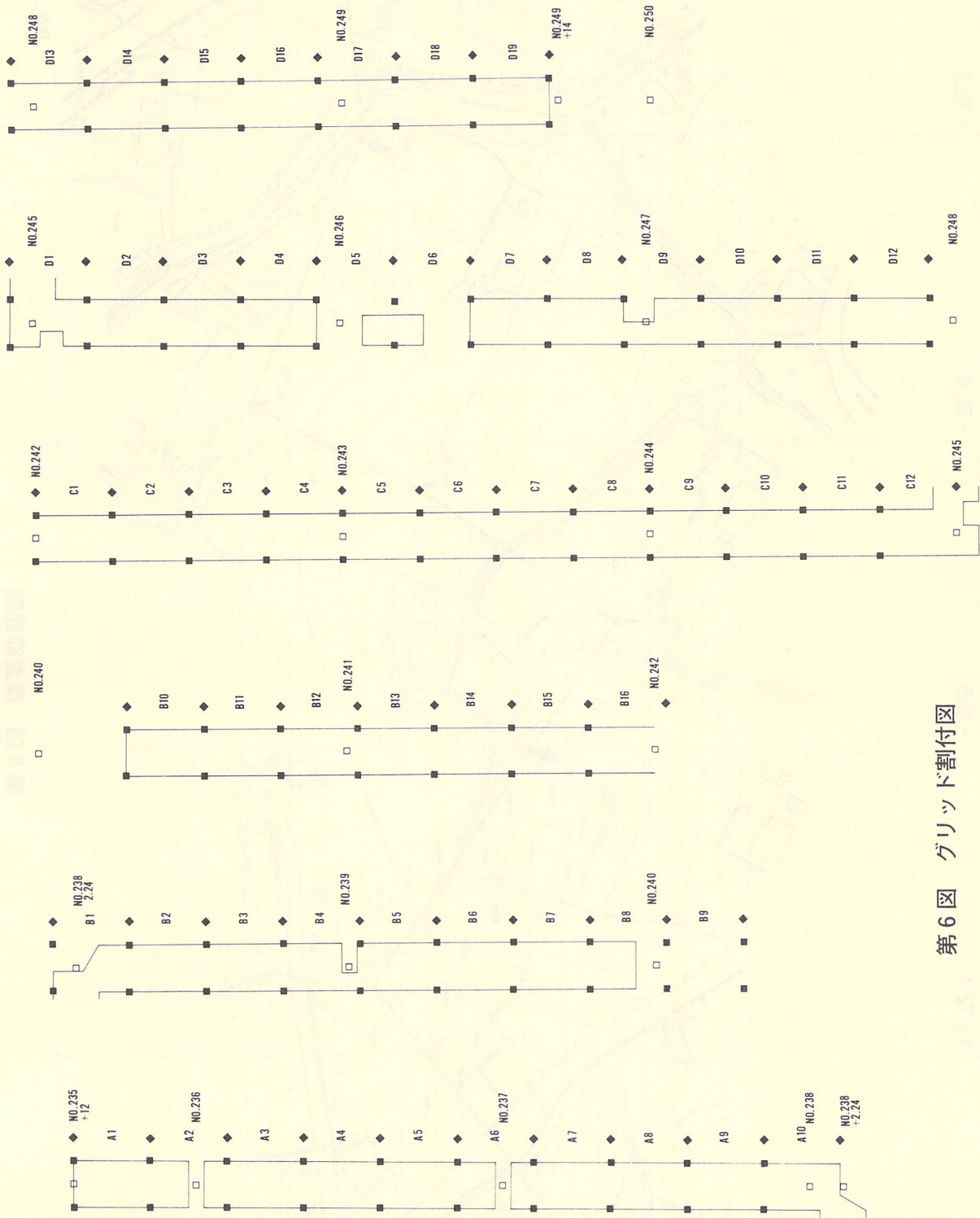
+72.5

Y+72.4



-109.1

第5図 調査範囲図



第6図 グリッド割付図

IV 基本土層

今回の調査区域は台地上を横断するように東西方向に約200mと長いこともあって、各地区毎に層序の変化が多少見られるが、おおよそ次の層を識別することができる。

I-1 黒褐色砂質シルト層 耕作土で遺物を含む。 I-2 黒褐～極暗褐色砂質シルト層 表土で遺物を含む。 II 黒褐～暗褐色砂質シルト層 遺物を含む。 III 黒褐～暗褐色砂質シルトと黄褐～黄橙色砂礫の互層 浜田川の氾濫堆積層 遺物を含む。 IV 礫層 扇状地堆積層。 IV-2 褐～黄褐色砂礫層 扇状地堆積層。

なお、I-1、I-2、IIの各層は場所によっては識別できないこともある。

各地点における層序は次のとおりである。

A地区 (A7グリッド) I-2 (0.1～0.2m) IV-1 (1.2～1.5m)

B地区 (B16グリッド) I-1 (0～0.2m) I-2 (0.7～0.9m) II (0.4～0.8m)

IV-2

C地区 (C10グリッド) I-2 (0.5～0.7m) II (0.5m) 遺物を多量に含む IV-2

D地区 (D5グリッド) I-2 (0.3～0.5m) III

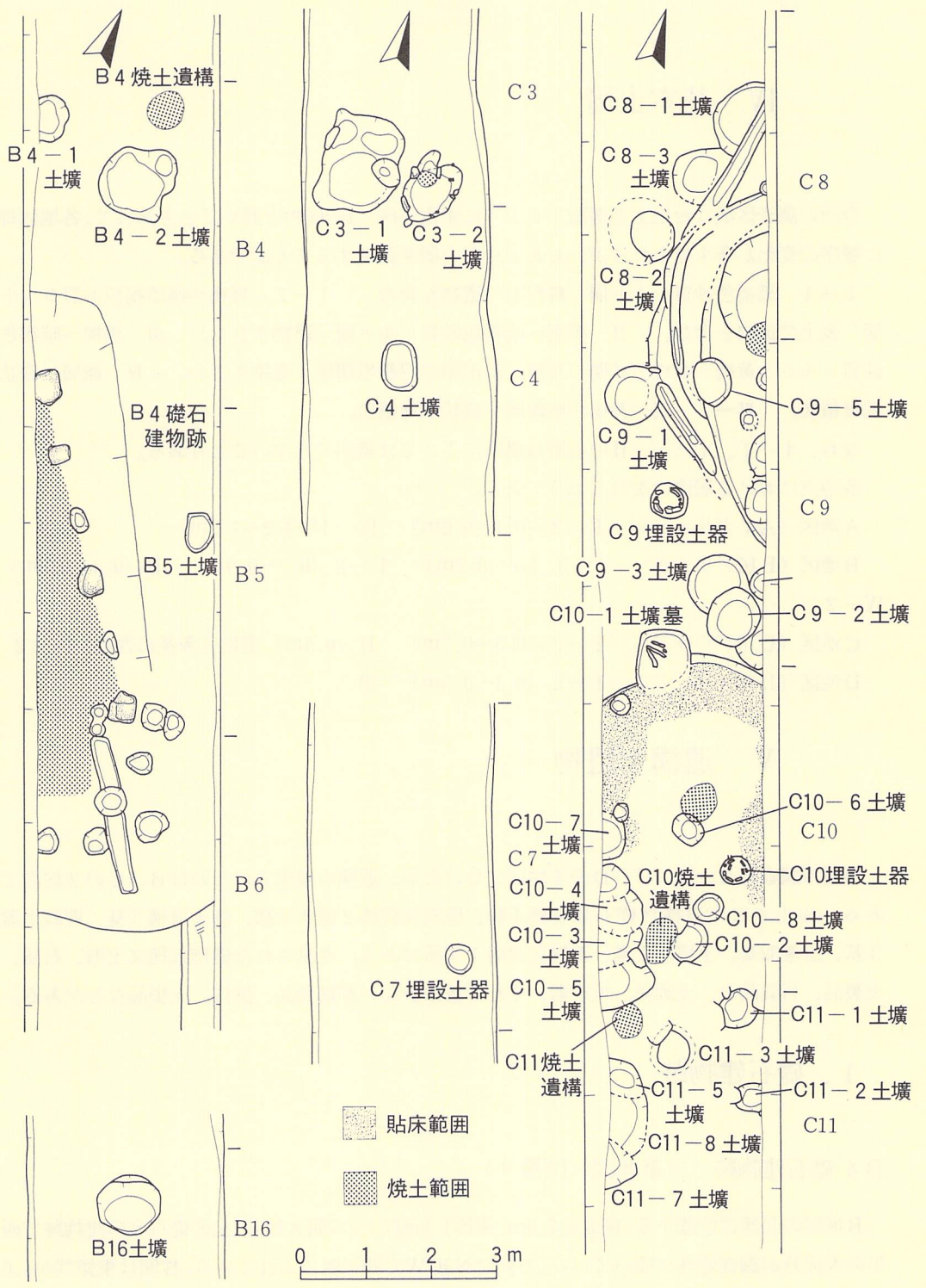
V 遺構と遺物

今回の調査はA、B、C、Dの4地区に分けたが、遺構の検出されたのはB、Cの2地区である。検出された遺構は礎石建物跡1棟、竪穴住居跡2箇所4棟、焼土遺構3基、埋設土器3基、土壇32基、土壇墓1基、遺物包含層1箇所である。発見された遺物は縄文土器、石器、土製品、石製品と、土師器、須恵器、それに数は少ないが鉄製品、鉄滓、土製品などがある。

1. 礎石建物跡

B4 礎石建物跡 (第8図、図版3)

B地区の北部に位置する。南北約7.0m、東西1.8m以上の7間×2間以上の礎石立の建物跡で西半の大部分が調査地外に続いている。方向はN40°Wで若干西にふれている。柱間は東側列が1.0m(約3.3尺)の等間、南側列が0.9m(約3尺)の等間である。礎石が4個残存し、他の6個は抜き取られている。礎石は扁平な礫を用い、上面が標高37.9mに保たれている。抜き取り穴は底



第7図 遺構配置図

面が鍋底状をなす浅いもので、下には小礫を伴うものも見られる。

礎石、抜き取り穴には直径50cm前後のやや大きいものと、40～30cmほどのひとまわり小さなものがある。大きいものは北東、南東の両隅と、南から2間目、4間目に認められ、小さいものはその中間にあっている。なお、礎石間をつなぐ内側では焼土が層をなして確認されており、焼失家屋の可能性はある。

以上の他には南半部に重複する形で柱穴6個と溝が検出されている。柱穴は直径27～45cmの円形あるいは方形で、深さが15～52cmである。埋土は黒褐色土を主体とする。溝は幅25cm、深さ10cmの小さなものである。長さは2.4mである。

2. 竪穴住居跡

(1) C 8 竪穴住居跡 (第9～12図、図版4.5)

当住居跡は周溝等によって3棟の建て替えが確認されたもので、新しいものからC 8-1、C 8-2、C 8-3 竪穴住居跡として記述する。全体的に北に拡張されている。

〈保存状況〉 斜面高位の保存状況は良好であるが、斜面下位の壁は遺存しない、1、2住居跡にあっては床面も削平されている。

〈位置〉 C地区中央部の東辺に扁在し、東半の大部分が調査区外に続いている。

〈重複〉 C 8-1・3・4、C 9-1・5・7・8 土壇の7土壇と重複している。いずれも当住居跡が切っている。

C 8-1 竪穴住居跡

〈平面形・規模〉 長径が6.7m、短径は1.8m以上である。かなり大型な円形か長円形を呈すると推定される。

〈埋土〉 埋土はほとんど炭化物、焼土を含む暗褐色土からなり、壁際に僅か黄色土がブロック状に混入している。

〈床面、壁〉 床面はほぼ水平で、平坦である。壁は急激に立ち上がり、壁高は北端部で45cmである。

〈柱穴〉 柱穴はP 1を確認したのみである。壁の内側約0.5mにあっている。直径20cmの円形で深さが38cmである。埋土は黒褐色混土の単層である。

〈周溝〉 幅30cm、深さ10cmほどの周溝が、南部の一部を除いてほぼ全周している。

C 8-2 竪穴住居跡

C 8-1 竪穴住居跡の南約1.5mに位置し、同住居跡の床面下約15cmにあたる。

〈平面形、規模〉確認された長径は約4m、短径は約1.5m以上である。平面形は遺存する周溝等から4.5m前後の円形と推測される。

〈埋土〉埋土は黒褐色土の単層である。下位に炭化物を多く含んでいる。

〈床面、壁〉床面は若干凹凸をもつが、ほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は西壁で67cmである。

〈柱穴〉P1を確認したのみである。壁の西側約1.2mに位置している。直径35cmの円形で、深さが50cmである。埋土は暗褐色混土で炭化物、焼土を含んでいる。

〈周溝〉幅15cm、深さ15cmほどの周溝を西壁の一部で検出している。

C8-3 竪穴住居跡

C8-2住居跡の南約0.3mに位置し、同住居跡の床面下約20cmにあたっている。

〈平面形、規模〉確認された長径は約5m、短径が僅か1mである。平面形は、残存部から円形か長円形と考えられる。

〈埋土〉埋土は黒褐色混土の単層である。下位に焼土層が形成されており、その上には炭化物が層を形成している。焼失家屋の可能性はある。

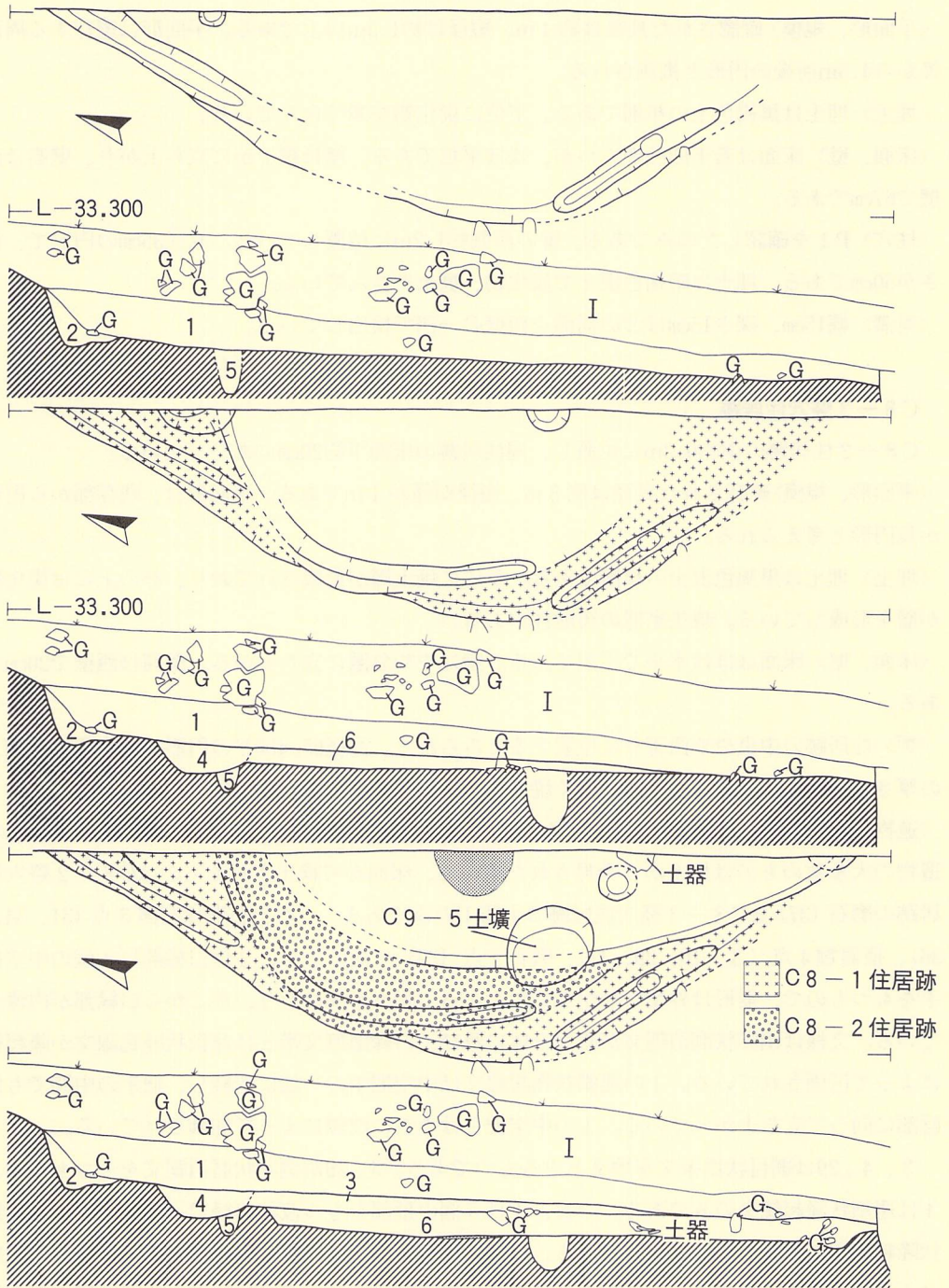
〈床面、壁〉床面はほぼ水平で平坦である。壁はやや急激に立ち上がる。壁高は西壁で20cmである。

〈炉〉住居跡の中央やや西寄りに位置するとみられる。直径65cmほどの円形の地床炉で、焼土の厚さは3～4cmである。上面は堅く焼けているが、下半は焼土混土状である。

〈遺物〉遺物は縄文土器平箱3箱ほどと石器8点、それに円盤状土製品11点(60～70)である。遺物の大多数のものは埋土から発見されたもので、床面から検出されたものはC8-2竪穴住居跡の磨石(37)とC8-3竪穴住居跡の土器(1)のみである。なお、石器は石鏃3点(31、34、36)、搔器類4点(3、10、39、41)、磨石1点(37)である。1、2は口縁部に4個の中空把手をもつもので、器形は外反しながら立ち上がって胴上半部に至り、そこから口縁部が内彎している。文様は倒卵状磨消縄文が器面全体に及び、口縁部無文帯とは連鎖状隆起線文か隆起線によって区画されている。1の連鎖状隆起線文は中空把手の一部に連続し、把手の間でも口唇部に向って立ち上がっている。1の中空把手はさらに沈線によって加飾されている。

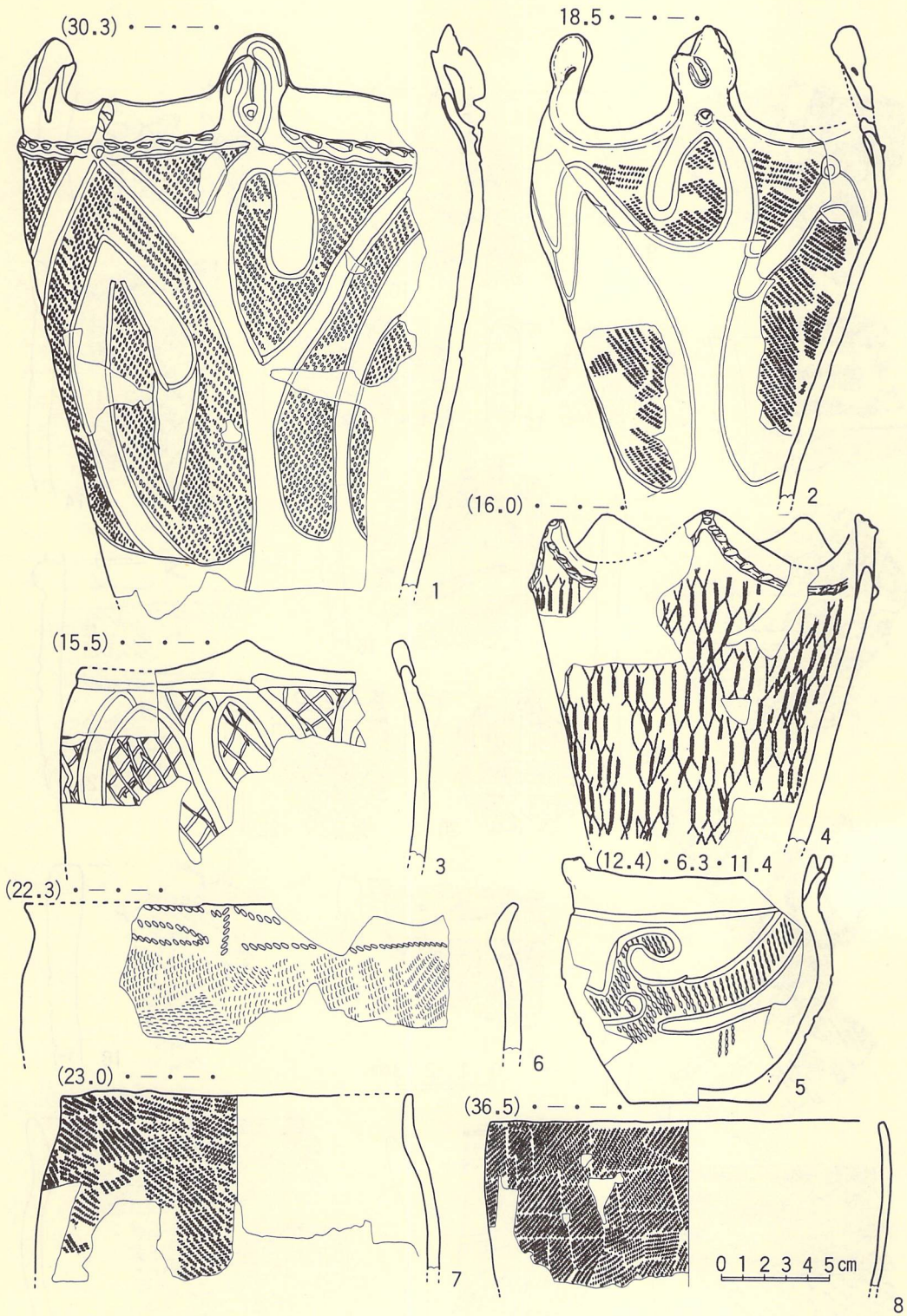
3、4、29は網目状捺糸文を地文とするものである。3、29が倒卵状磨消縄文をもつもので、4は連鎖状隆起線文のみである。なお、4は5個の頂部をもつ波状口縁で、頂部先端には連鎖状隆起線文から続く刺突文がみられる。5は口径と器高がほぼ等しい鉢形土器である。口唇部に小孔を有する小突起をもち、頸部には1条の沈線がめぐり、下半には波とう状の磨消捺糸文が大きく展開している。

6～8、23～26は粗製深鉢形土器である。6は口縁部が「く」の字状に屈折するもので、外反する口縁部には捺糸圧痕文が施されている。7は口縁部がやや小さくなるもので、8は最大



- I 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、巨礫、礫を含む、表土、上半黒色が強い。
 1 10YR3/3 暗褐色、炭化物、焼土を含む。
 2 10YR3/4 暗褐色混土、黄色土がブロック状に混入する、多少粘性あり。
 3 10YR2/2 黒褐色、粘性あり、下位黒色が強い、炭化物を含む。
 4 10YR3/4 暗褐色混土、黄色土がブロック状に混入する。
 5 10YR2/3 黒褐色混土、粘性あり、下位に炭化物、焼土が層状に見られる。
 6 10YR2/3 黒褐色、

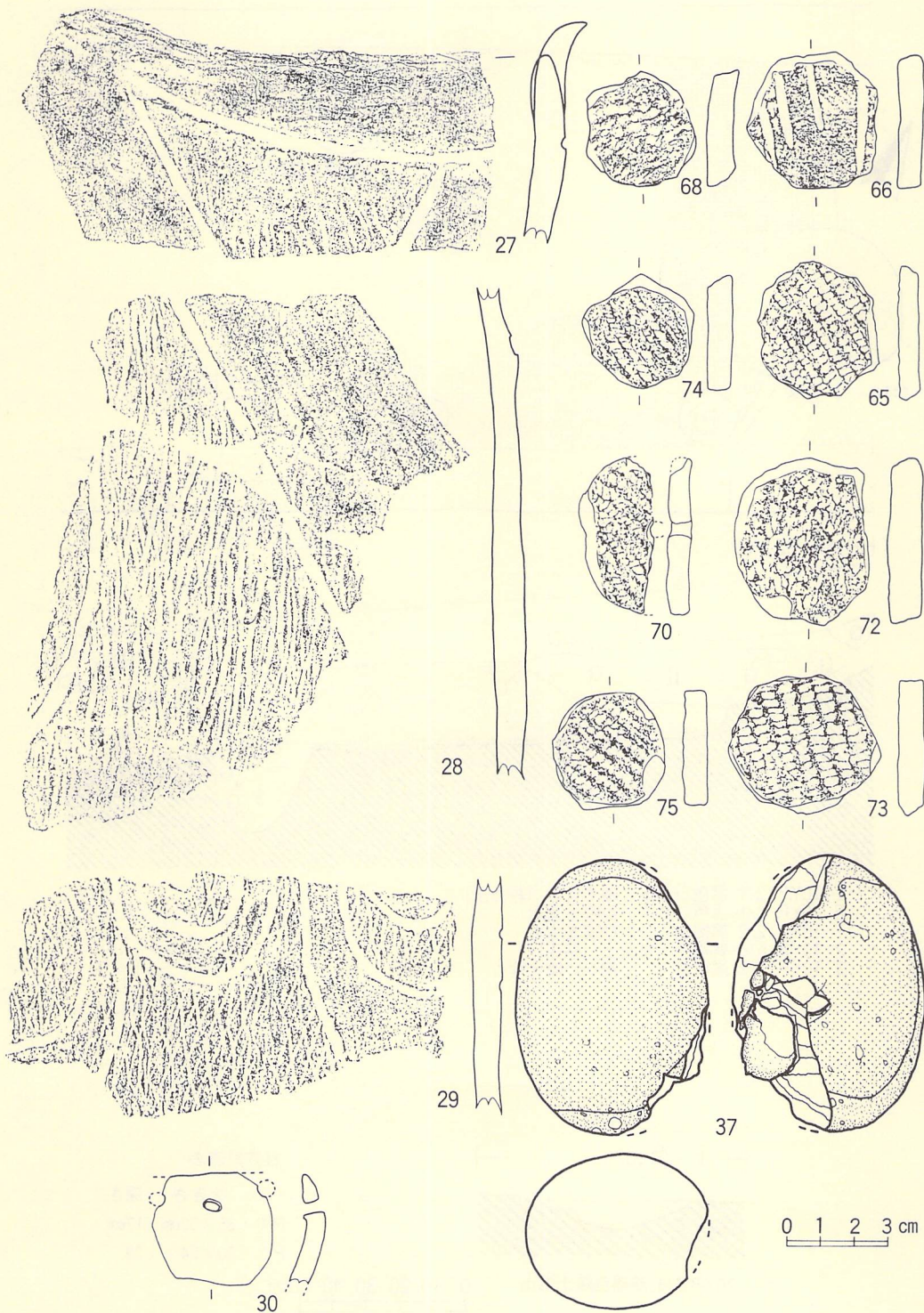
第9図 C8 竖穴住居跡



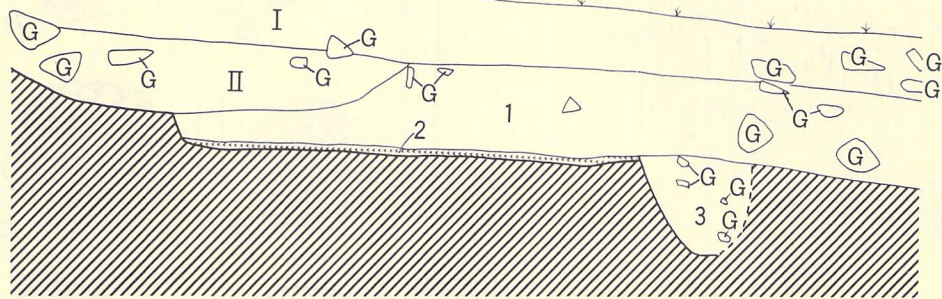
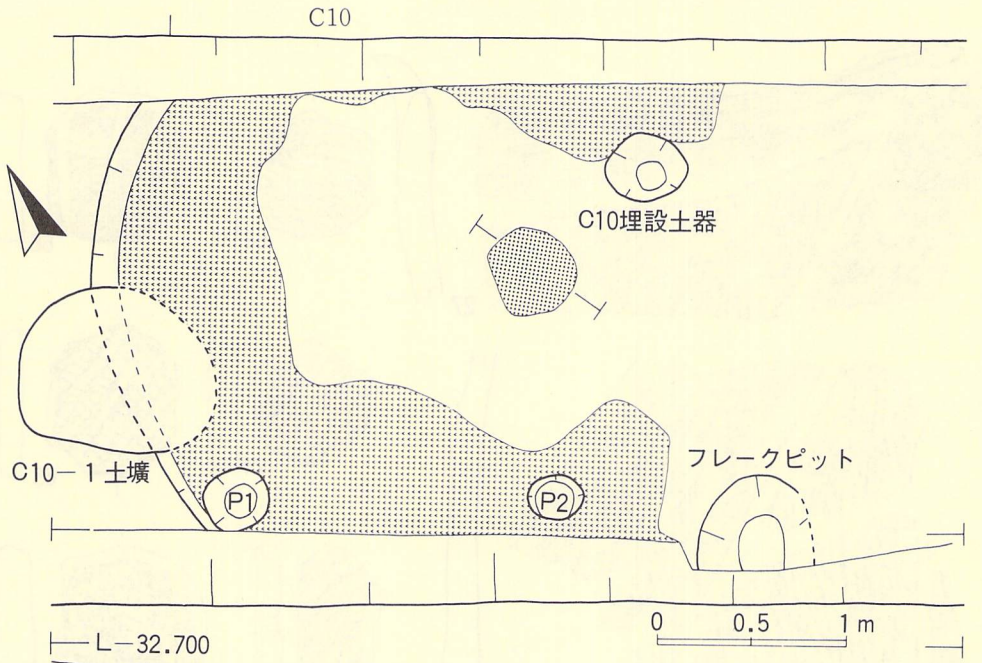
第10图 C8 豎穴住居跡出土遺物(1)



第11图 C8 竖穴住居跡出土遺物(2)



第12図 C8 豎穴住居跡出土遺物(3)



- I 10YR 2/1 黒色シルト、礫を含む (耕作土)
- II 10YR 2/1 黒色シルト、巨礫を含む
- 1 10YR 2/2 黒褐色、砂礫を含む
- 2 10YR 6/8 黄褐色、粘質土 (貼床)
- 3 10YR 2/2 黒褐色、細かい礫を含む



柱穴計測表

	大きさ	深さ
P 1	35×32cm	17cm
P 2	30×24	29

第13図 C10竪穴住居跡

径を口縁部から若干下がった所にもつもので、C10埋設土器に類似している。23～26は口縁部に無文帯をもつもので、23、24は1条の沈線あるいは撚糸圧痕文がめぐっている。

9～11は刺突文をもつもので、9は連鎖状隆起線文、10は隆起線の左上に刺突されている。11は若干肥厚する無文地にやや長めの刺突文が施され、口唇部にも同様の刻みが施文されている。12～15は沈線を多用する磨消縄文である。いずれも波状口縁をなし、15には沈線端部に刺突文を伴っている。

16～18、20は口縁端部が肥厚するものである。17は突起先端部を折り返して肥厚させたもので、その両側にも同様のものが貼付されている。18、20の突起先端部に刻みが施されている。文様は17～19が比較的幅の狭い磨消縄文からなっており、20、21は篋状工具による刻みをもつものである。19も工具の幅が広いが、同様の手法によるものである。27、28は同一個体である。30は無文の袖珍土器で、口縁部に添って外側から小孔が穿たれている。

〈年代〉発見された土器から縄文時代後期初頭と推定される。

(2) C10竪穴住居跡 (第13図、図版6)

当住居跡は遺物包含層の下から検出されたもので、貼床面の検証によって住居跡として確認したものである。壁の崩落等が著しく、保存状況はあまり良好であるとはいえない。斜面下位においては壁はおろか貼床等も削平されている。

〈位置〉C地区南部に位置し、東西両端が調査区外に続いている。ちょうど住居跡の中央部を調査したことになる。

〈重複〉北端部がC10-1土壇墓、南部の貼床面がC10埋設土器によって切られ、南西部のC10-7土壇、中央部のC10-6土壇を切っている。また、C10-4、C10-8の両土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉遺存する北壁によると、形状は円形か長円形と推定される。規模は貼床の範囲では3mほどであるが、剥片貯蔵穴を含めると4m前後となる。

〈埋土〉埋土は、黒褐色混土の単層である。礫を大量に含んでいる。

〈床面・壁〉床面はほぼ水平で平坦である。住居跡の周縁部には厚さ3cmほど黄褐色土が貼床されている。壁は急激に立ち上がるようである。壁高は15cmである。

〈柱穴〉確認した柱穴はP1、P2の2柱穴である。直径30～35cmの円形で、深さが17cm～29cmである。

〈炉〉住居跡の中央部に位置しているとみられる。直径45cmの不整な円形を呈し、焼土の厚さは8cmである。焼土は暗褐色焼土混土でボソボソしている。

〈剥片貯蔵〉住居跡の南西部にあたる。西半は調査区外に続いている。平面形、規模は調査の手違いによって掘り上げてしまい不明である。中から剥片57点が折り重なった状態で発見されている。埋土は暗褐色混土である。

〈遺物〉床面出土遺物は認められなかった。埋土遺物は調査の進行に伴って包含層遺物と一括

している。石鏃2点(3、38)、搔器類4点(8、12、15、32)が含まれている。

<年代>縄文時代晩期大洞B~C期とみられる土壌墓によって切られており、それより先行するものである。

3. 焼土遺構

(1) B4 焼土遺構 (第14図)

B地区北部に位置し、B4-2 土壌の北0.5mにあたる。平面形は63×56cmの円形で、焼土の厚さは3cmである。焼土は現地性焼土で上面が堅く焼けている。

(2) C10 焼土遺構 (第14図)

C地区南部に位置する。C10-2 土壌の上であり、土壌より新しいものである。平面形は73×48cmの不整な長円形である。断面図は記録しなかったが、褐色の焼土混土で、黄褐色砂質土が焼土化したものである。

(3) C11 焼土遺構 (第14図)

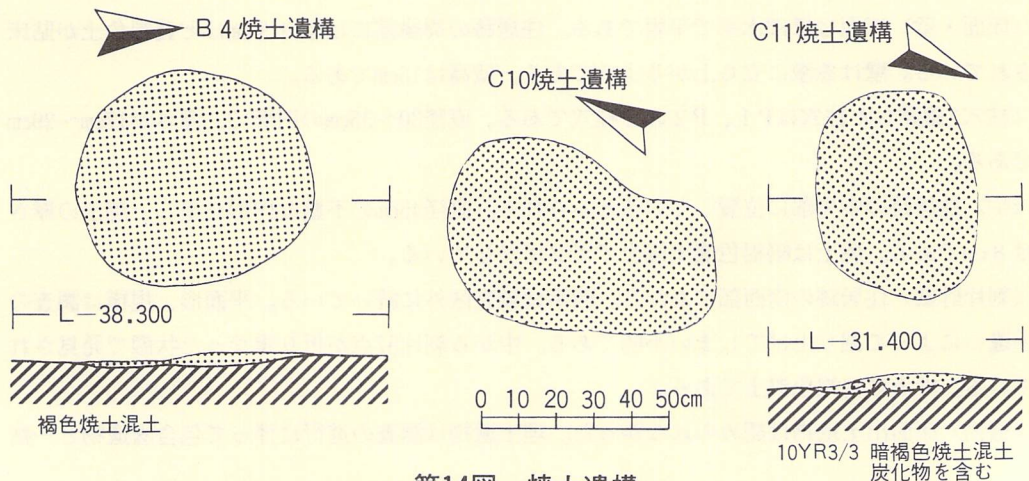
C地区南端部に位置する。C10-5 土壌に隣接しているが新旧関係は不明である。55×43cmの長円形を呈し、焼土の厚さは4cmである。焼土は炭化物を含む暗褐色焼土混土である。

4. 埋設土器

(1) C7 埋設土器 (第15図、図版7.8)

C地区中央部に位置する。直径40cm、深さ32cmの土壌に直立に設置されている。底部は土壌底面に密着させている。埋土は黒褐色シルトの単層で、土器内も同様のシルトが充満していた。

土器は口径34.0cm、器高38.3cmの大型な粗製深鉢形土器である。器形は底部から直線的に立ち上がるもので、最大径を口縁部にもつ。器表面にはLR単節斜行縄文をほぼ全面に横回転させ

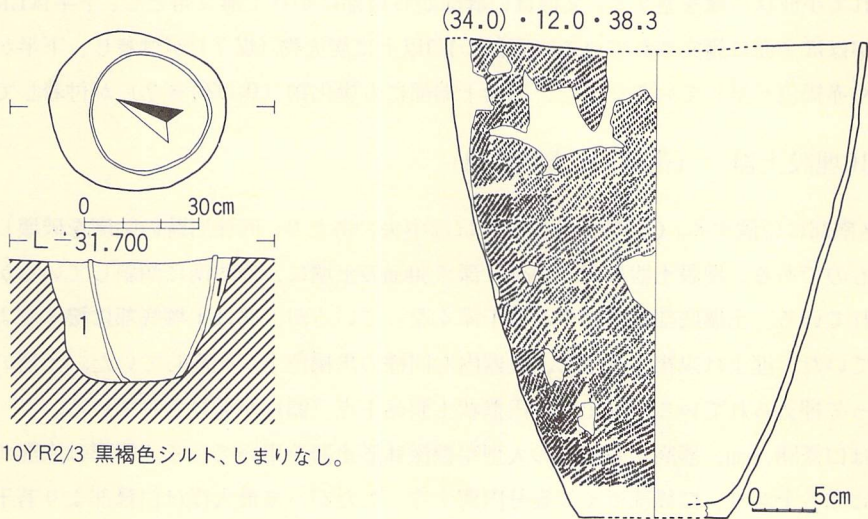


第14図 焼土遺構

ている。体部上半に炭火物（煤？）が付着しており、下半が二次火熱のため赤褐色を呈し脆くなっている。また、内面下半にも炭火物（焦付き？）が付着している。なお、底部は欠損している。

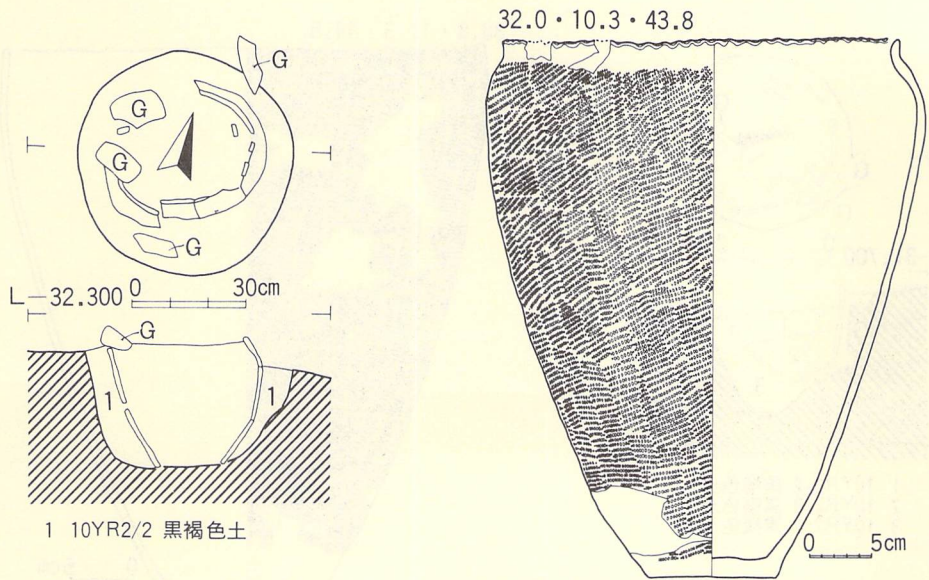
(2) C9埋設土器 (第16図、図版7.8)

C地区南部に位置する。C8 竪穴住居跡の南西約0.5mにあたっている。土器は直径55cm、深さ



1 10YR2/3 黒褐色シルト、しまりなし。

第15図 C7埋設土器



1 10YR2/2 黒褐色土

第16図 C9埋設土器

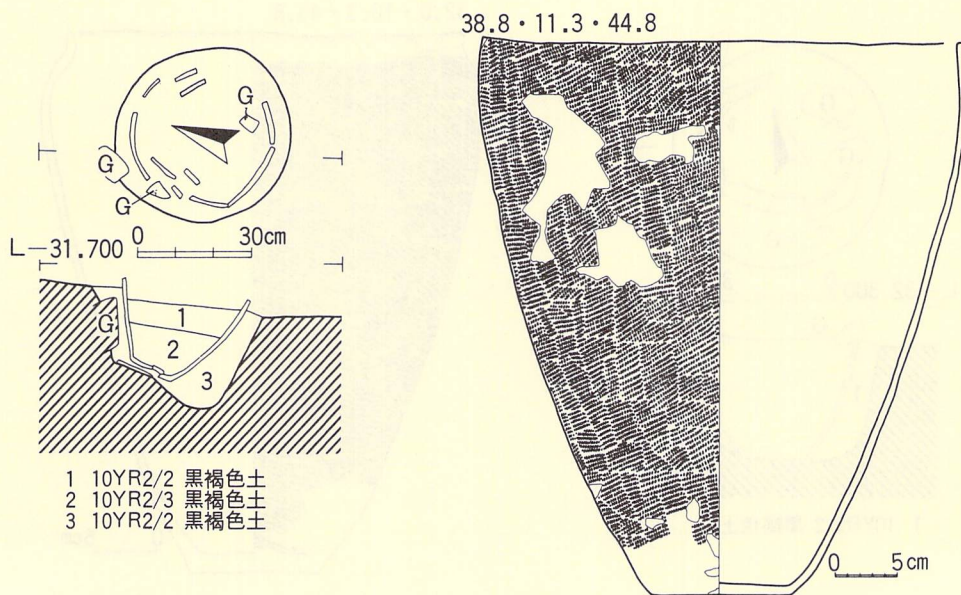
33cmの土壌に直立に設置されている。底は土壌底部に密着させており、土器底部は土器の横に立て掛けてあった。埋土は黒褐色混土の単層で、縄文土器8片が混入していた。晩期に属すとみられる細片である。なお、土器の上面には扁平な礫が載っており、あるいは蓋石としたものかもしれない。

土器は口径32.0cm、器高43.8cmの大型な粗製深鉢形土器である。器形は底部から直線的に立ち上がり、肩部で内彎し、さらに口縁部が外反する形をなす。口唇部には削り取りによる刻みが施されて小波状口縁を呈する。文様は口縁部から肩部にかけて無文帯とし、下半はLR単節斜行縄文がほぼ全面に施文されている。胴部の1/3以上に炭火物(煤?)が付着し、下半が二次火熱のため赤褐色を呈している。また、内面下端部にも炭化物(焦げ付き?)が付着している。

(3) C10埋設土器 (第17図、図版7.8)

C地区南部に位置する。C10竪穴住居跡のほぼ中央にあたり、同住居跡の貼床を破壊して構築されたものである。埋設土器は直径45cm、深さ30cmの土壌に、やや南に傾斜しているが直立に設置されている。土壌底部は南半分が若干深くなっているが、底は土壌底部に接するように埋設されていた。埋土は黒褐色混土で、土器内も同様の黒褐色土が充満していた。土器の周囲は礫によって押えられている。埋土から円盤状土製品1点(95)が発見されている。

土器は口径38.8cm、器高が44.8cmの大型粗製深鉢形土器を用いている。器形は底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部近くで幾分内彎する。したがって最大径は口縁部より若干下がった所に位置する。器面にはLR単節斜行縄文が施文されている。胴部の1/3以上には炭化物(煤?)が付着し、下半は二次火熱のため赤褐色化している。



第17図 C10埋設土器

5. 土壇

(1) B4-1 土壇 (第18.19図、図版9.12)

B地区北部に位置する。西半が調査区外に続いているが、直径70cmほどの円形であると推定される。深さは23cmで、鍋底状を呈する。埋土は褐色～暗褐色混土の単層である。埋土から土師器13片、須恵器17片が発見されている。

土師器は高台付坏1点、坏9点、甕3点である。1は、体部が緩やかに立ち上がるもので、高台が高く裾広がりとなっている。内面は黒色処理後、ヘラミガキ調整されている。2は回転糸切底をもつ坏の底部破片である。内面が二次火熱のためか赤褐色～青灰色を呈している。以上の他には赤焼き土器の細片がある。また、甕には外面ヘラケズリ、内面ナデ調整の体部破片と、ロクロ成形された小型甕の体部破片がある。

須恵器は壺2個体、甕2個体である。5は壺の肩部破片で、外面が平行線状の叩き目文を消すように、ロクロ調整されている。5～7は縦位の平行線状の叩き目文をもつ甕の破片である。器壁が1.0～1.3cmと厚く、大甕になると推定される。5は肩部破片で、口縁部が「く」の字状に屈折している。7は幾分叩き目が浅くなっている。

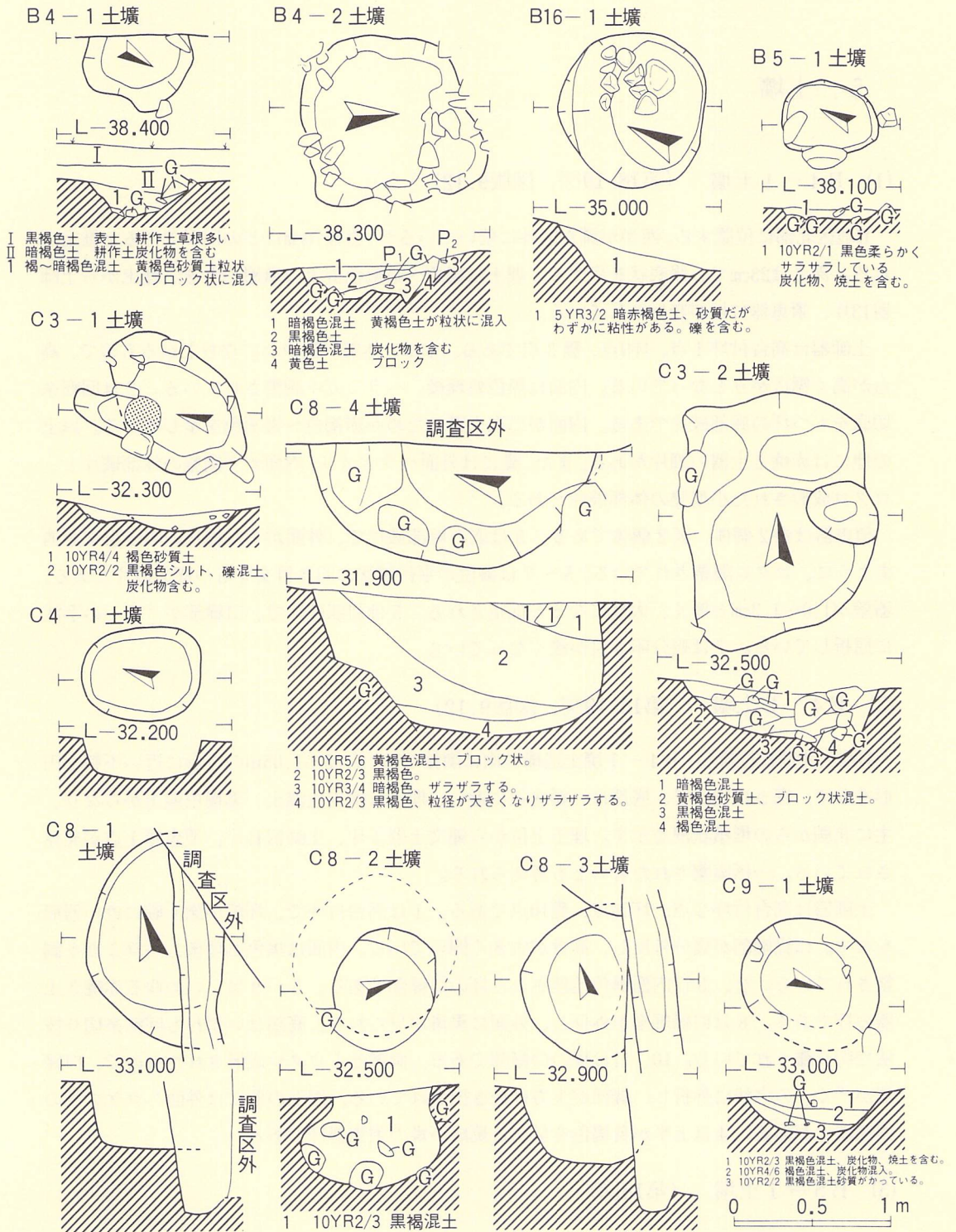
(2) B4-2 土壇 (第18.19図、図版9.12)

B地区北部に位置し、B4-1 焼土遺構の南に隣接する。1.05×1.05mの方形に近い不整な円形をなす。深さは18cmで、底部は、鍋底状に近い。埋土は暗褐色混土、黒褐色混土からなり、主に北側からの堆積状況を示す。埋土上位から縄文土器4片、土師器41片、須恵器1点が発見されている。一括廃棄されたものとも考えられる。

土師器は高台付坏2点、坏29点、甕10点である。1は高台付坏で、坏部が深く碗に近い器形をなす。口縁端部が幾分外反し、高台が大きく開いている。内面は黒色処理後、ヘラミガキ調整されている。2、3は内面黒色処理された坏の口縁部である。5～9は、いわゆる赤焼き土器の坏である。8は口縁端部が外反し、外面に黒斑が見られる。底部はいずれも回転糸切り技法で切り離されている。10、11は甕の口縁部である。両者ともロクロ成形されたもので、口縁部が「く」の字状に外折し、端部が上方に挽き出されている。以上の他には外面ヘラケズリの体部破片がある。4は上半が黄褐色を呈する焼成不良の須恵器坏である。

(3) B5-1 土壇 (第18図)

B地区北部に位置する。B4 礎石立建物跡の東方1.5mにあたる。平面形は60cm×50cmの長円形で、深さが僅か7cmで皿状を呈する。埋土は黒色土の単層で、炭化物、焼土を含んでいる。



第18図 土壤(1)

(4) B16—1 土壇 (第18.20図、図版9.13)

B地区最南端に位置する。直径約1.0mの円形である。深さは24cmで、底部は平坦である。壁が斜め上方に立ち上がって舟底状を呈する。埋土は暗赤褐色土の単層で、埋土中位に礫がまとまって存在する。埋土から縄文土器18片が発見されている。

1は口縁部で、山形口縁である。文様は器面全面に及ぶもので、沈線を多用している。口縁直下には突起部で途切れる深い沈線がめぐる。突起部の下には半円が付され、それから縦線が垂下している。他の部分は縦長の円文等が描出されている。捺糸文を地文とし、磨消されている。2は磨消縄文をもつ体部破片である。文様は縦に展開するようである。

(5) C3—1 土壇 (第18.20図、図版13)

C地区北部に位置する。1.08×0.7mの長円形である。深さは10cmで鍋底状を呈する。底面の一部が焼土化している。埋土は褐色砂質土の単層で、埋土から縄文土器57片が発見されている。

発見された土器の数は多いが、いずれも細片で、磨滅しているものがほとんどである。1は山形口縁をもつもので、隆帯で囲まれた部分に刺突文が充填されている。2は口縁部に無文帯をもつ磨消縄文である。3～5は捺糸文を地文とする磨消縄文で、4、5は縦位に磨消されており、3は磨消帯が横走している。

(6) C3—2 土壇 (第18図)

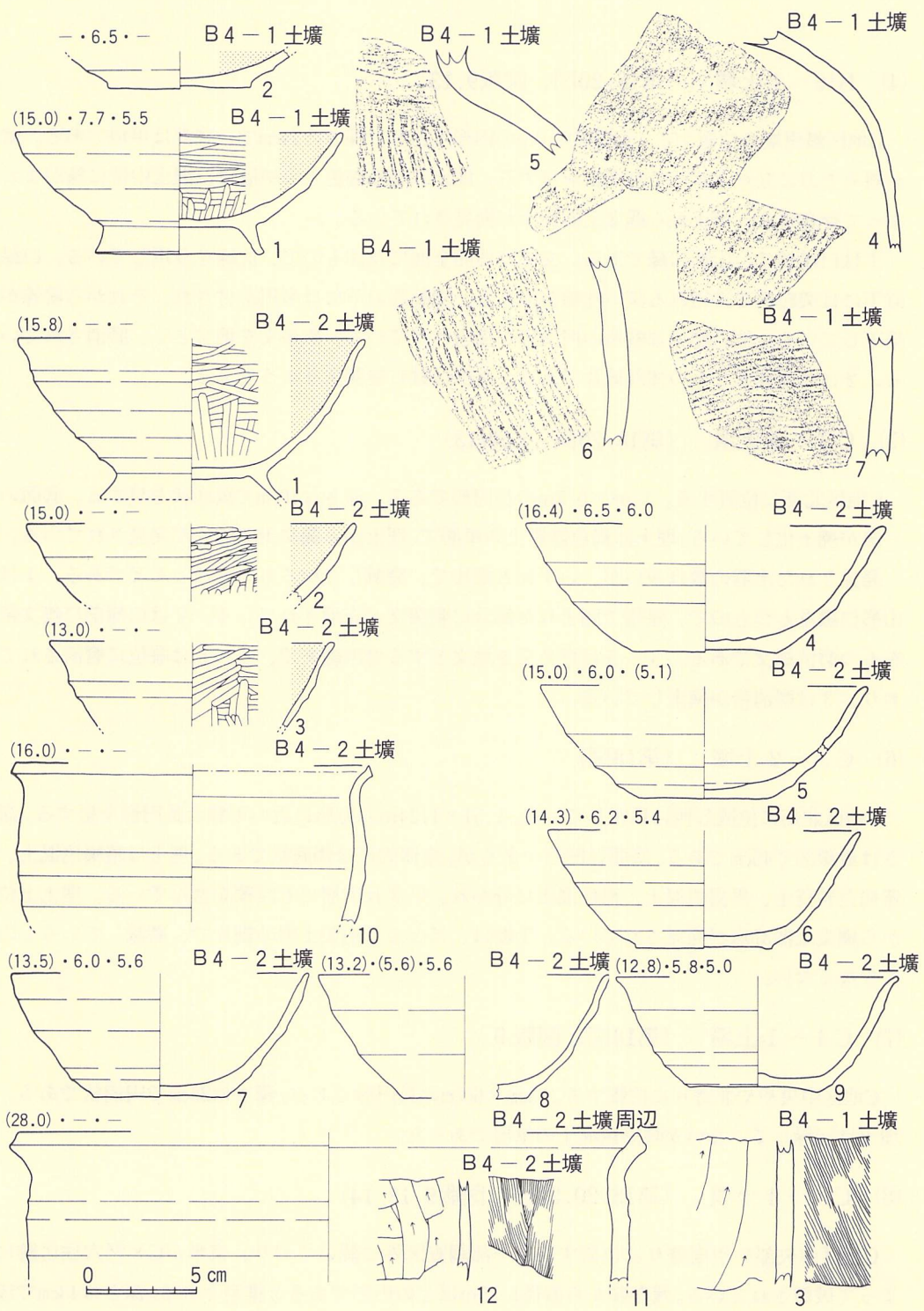
C地区北部に位置し西に扁在している。1.51×1.24mの方形に近い不整な長円形を呈する。深さは最深部で45cmである。底面は凹凸があるが、全体的には鍋底状である。埋土は暗褐色混土、黄褐色砂質土、黒褐色混土、褐色混土に分かれ、いずれの層にも巨礫を含んでいる。埋土上位から縄文土器37点が発見されている。土器は、ほとんど粗製土器の細片で、磨滅しているものも少なくない。

(7) C4—1 土壇 (第18図、図版9)

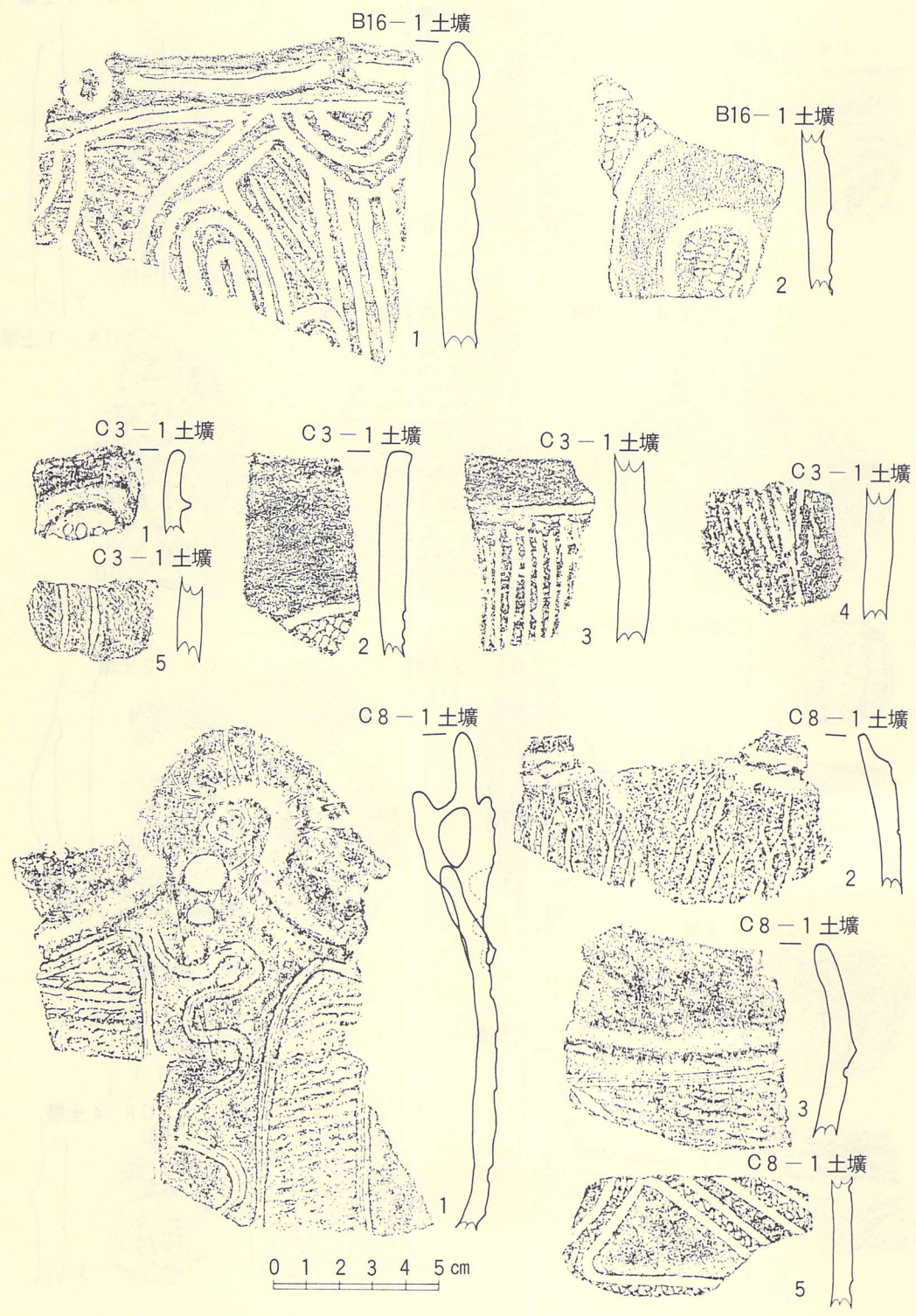
C地区中央やや北寄りに位置する。75cm×60cmの長円形である。深さは25cmで円筒状である。埋土は記録していないが暗褐色混土の単層であった。

(8) C8—1 土壇 (第18.20.21図、図版9.13.14)

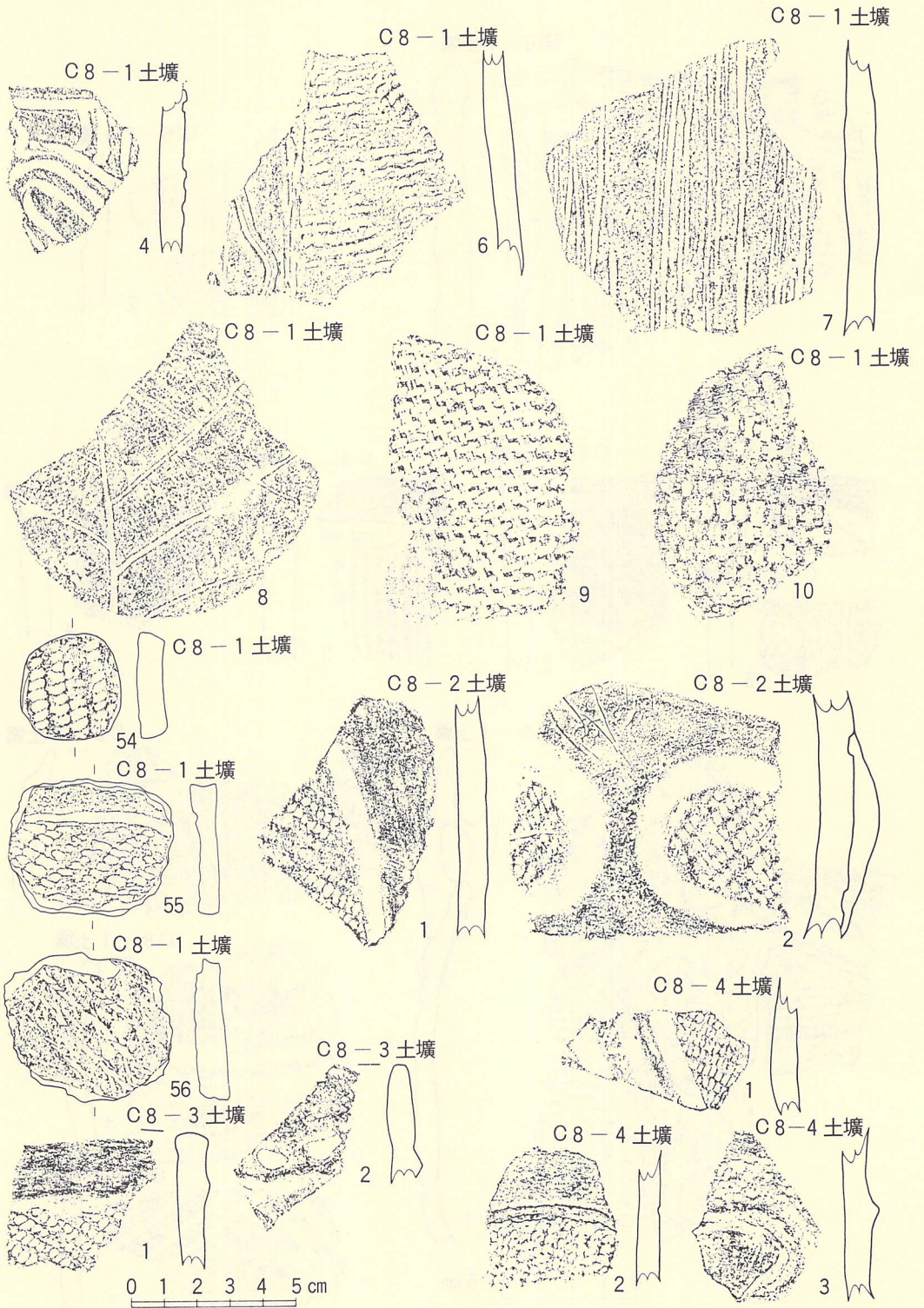
C地区中央部やや南寄りに位置する。一部調査区外に続いており、東半がC8 竪穴住居跡によって破壊されている。残存部から直径1.35mほどの円形であると推定される。深さは43cmで浅い円筒形を呈する。埋土は記録していない。埋土から縄文土器183点、石鏃1点(42) 搔器類1点(5) 円盤状土製品3点(50、51、52)が発見されている。



第19図 土壤出土遺物(1)



第20図 土壤出土遺物(2)



第21图 土壤出土遺物(3)

1～3はいずれも波状口縁のようである。文様は隆起線によって口縁部の無文帯と胴部文様帯とに分けられている。2の隆起線には原体圧痕による刻み目が入っている。1は耳状の中空把手をもつもので、その下には貫通しない円形刺突文を3個もち、下半が磨消縄文からなり、蛇行懸垂文が描かれている。4～6は磨消縄文で、4が沈線を多用し、5は三角形文を中心としている。7はくし目状の沈刻線による粗製土器である。8が木葉底、9、10が網代底である。

(9) C8—2 土壇 (第18.21図、図版9.10.14)

C地区中央部のやや南寄りに位置する。開口部が直径70cmの円形で、底部は約1mほどの袋状土壇である。深さは60cmで、埋土は黒褐色混土の単層である。下位に巨礫を含んでいる。埋土から縄文土器25点が発見されている。1、2は磨消縄文で、2は無文帯の一部が隆起している。

(10) C8—3 土壇 (第18.21図、図版14)

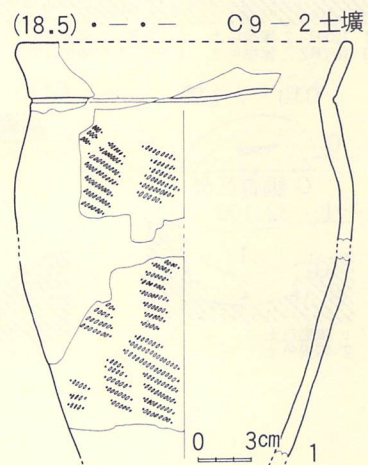
C地区中央部のやや南寄りに位置する。C8—1土壇の南に隣接し、東半はC8 竪穴住居跡によって破壊されている。残存部から長径1.0mの長円形であると推定される。深さは45cmである。底面は平坦で壁が開きながら立ち上がり播鉢状を呈する。埋土は記録しないでしまった。埋土から縄文土器36点が出土している。1、2は口縁部破片で隆起線による区画文をもつ。口縁部付近が無文研磨されている。2は隆起線の上に上方から押捺された刺突文をもつ。3は隆起線に囲まれた部分が磨消されている。

(11) C8—4 土壇 (第18.21図、図版10.14)

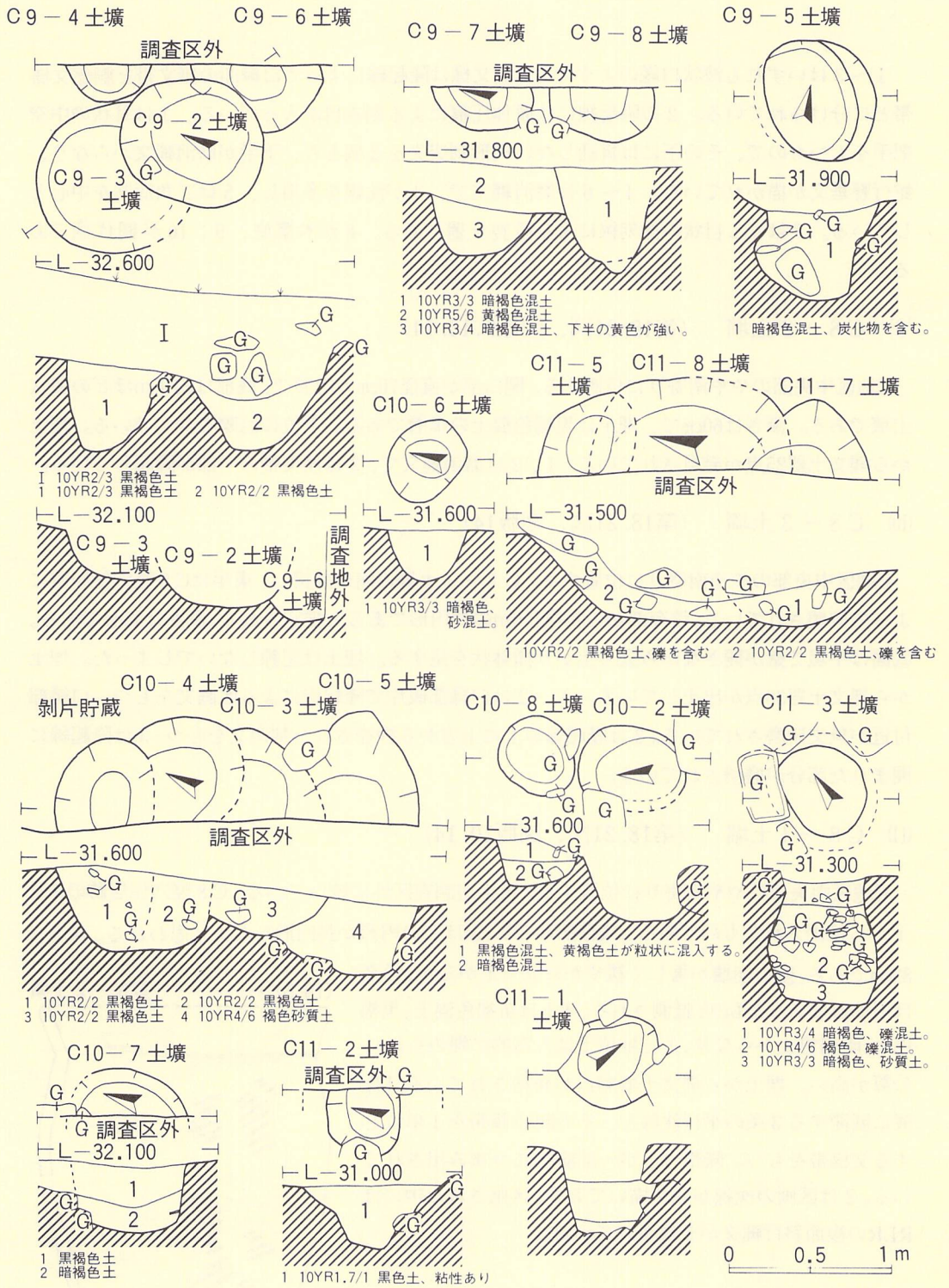
C地区中央部のやや南寄りに位置する。東半が調査区外に続いている。C8 竪穴住居跡の床面下から検出されたものである。残存部から1.8mほどの円形か長円形をなすと思われる。深さは83cmである。壁の崩壊が著しく緩やかに立ち上がるが、元来は円筒形であったものと推測される。埋土は黄褐色混土、黒褐色土、暗褐色土からなり、上位堆積土は人為的に埋められた公算が高い。埋土から縄文土器33点が発見されている。1は縦に展開する3条の平行沈線と、その間の隆帯を1単位とする文様帯をもつ。隆帯の上が一部瘤状につまみ出されている。2は区画の沈線が弧を描いており、区画された中にはRLRの複節斜行縄文が充填されている。

(12) C9—1 土壇 (第18図、図版10)

C地区南部に位置する。C8 竪穴住居跡の西に隣接して



第22図 C9—2 土壇出土遺物



第23図 土壤(2)

いる。90×80cmの円形で、深さが26cmである。底部は鍋底状を呈する。埋土は黒褐色混土、褐色混土からなり、上位には炭化物、焼土粒を含んでいる。埋土から縄文土器26片が発見されている。発見されたの土器はいずれも細片であるが、中には網目状撚糸文をもつもの、薄手の無文土器等が含まれている。

(13) C9-2 土壇 (第22, 23, 24図、図版10, 14)

C地区南部に位置する。東辺近くに偏在しており、C9-3土壇、C9-6土壇を切っている。平面形は直径80cmの円形で深さは45cmほどと推定される。底部は鍋底状をなす。埋土については記録しないでしまったが暗褐色混土の単層であった。床面近くから深鉢形土器1点と埋土から土器片4点が発見されている。1は口縁部が「く」の字状に外反するもので、1条の沈線によって口縁部無文帯と胴部地文帯とに区画されている。下半はLR単節斜行縄文が縦回転されている。2は磨消縄文が縦に展開するものである。

(14) C9-3 土壇 (第23, 24図、図版14)

C9-2土壇の北西に隣接し、一部破壊されている。平面形は90cmの円形をなすと推定される。深さは26cmで、底部は鍋底状をなす。埋土は暗褐色混土の単層である。埋土から縄文土器2点が発見されている。1は、口縁部無文帯と胴部の地文帯が沈線で区画されている。

(15) C9-4 土壇 (第23図)

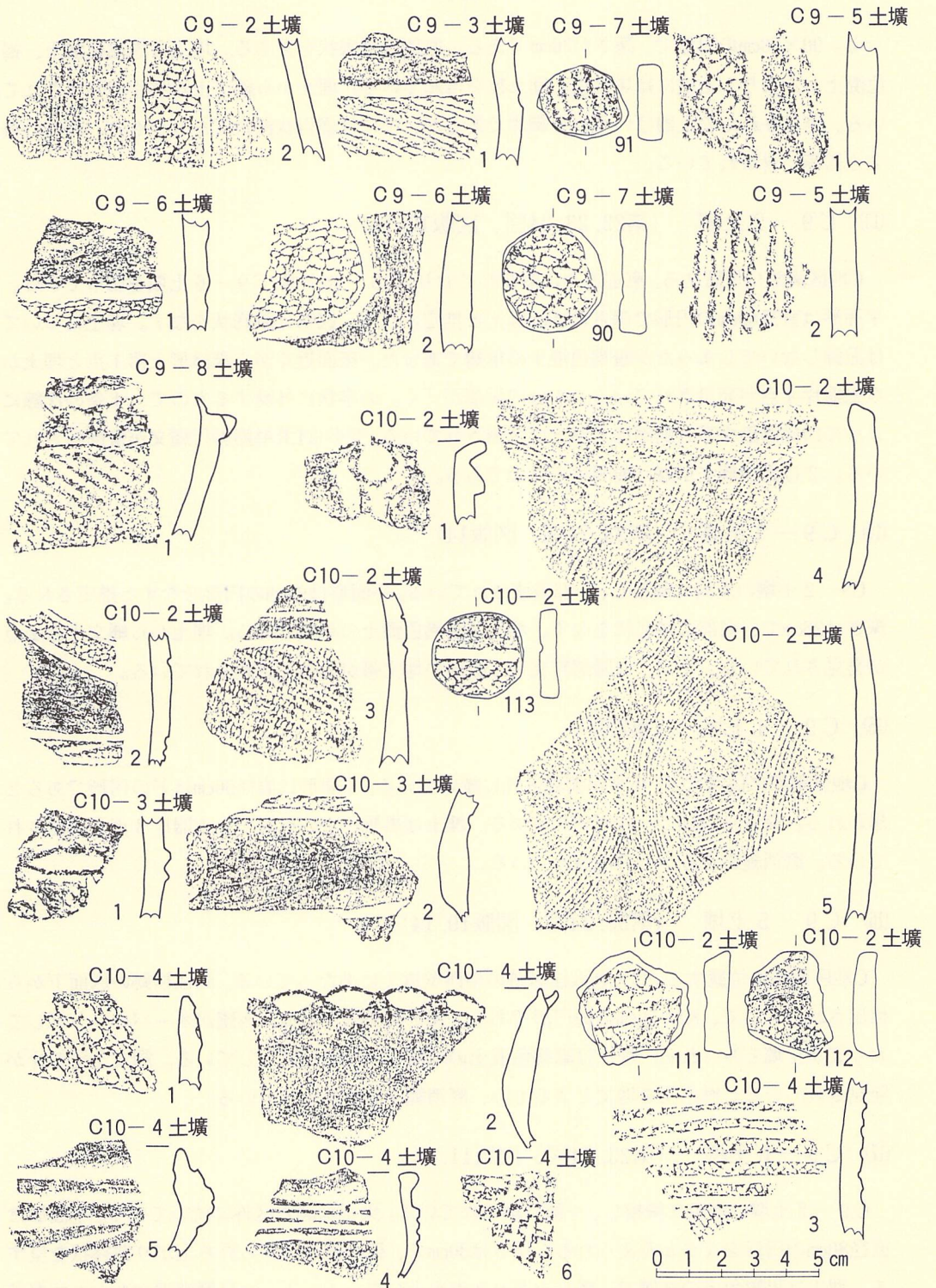
C地区南部に位置する。東半が調査区外に続いている。平面形は直径50cmほどの円形であると思われる。深さは54cmで、柱穴状を呈する。埋土は黒褐色土の単層で、土器片3点が発見されている。磨消縄文をもつものを含んでいる。

(16) C9-5 土壇 (第23, 24図、図版10, 14)

C地区南部に位置する。C8 竪穴住居跡の南西壁近くにあたっている。同住居跡の床面下から検出されたもので、80×70cmの長円形であり、深さは60cmである。西壁がオーバーハングしており袋状土壇とみられる。埋土は暗褐色混土の単層で、巨礫が混入している。縄文土器5片が発見されている。撚糸文を地文とするもの、磨消縄文等が含まれている。

(17) C9-6 土壇 (第23, 24図、図版11, 14)

C9-2土壇の南東に隣接し、一部破壊されている。東半は調査区外に続いている。平面形は直径80cmの円形をなすと考えられる。深さは30cmで、壁が開きながら立ち上がり擂鉢状を呈する。埋土は黒褐色土の単層で、縄文土器が8点出土している。1、2は磨消縄文をもつ体部破片である。1は無文帯が若干厚くなっており、2は沈線の区画内にRL単節斜行縄文をもつ。



第24图 土壤出土遺物(4)

(18) C9—7 土壙 (第23.24図)

C地区南部に位置し、C8 竪穴住居跡の南部にある。同住居跡の床面下から検出されたもので、住居跡に先行するものである。また、東半は調査区外に続いている。平面形は長径70cmほどの長円形と推定される。深さは32cmで柱穴状である。埋土は暗褐色土の単層で、円盤状土製品2点(85、86)が発見されている。

(19) C9—8 土壙 (第23.24図、図版14)

C9—7 土壙の南に隣接し、C8 竪穴住居跡の南部にあたっている。住居跡の床面下から検出されたもので、東半は調査区外に続いている。平面形は65cmほどの長円形と推定される。深さは床面下から57cmで、柱穴状である。埋土は暗褐色混土の単層で、縄文土器3点が発見されている。

1は口唇部に小さな刻み目をもち体部上位の沈線間が隆帯状に盛り上がり、さらに瘤状の突起が削り出されている。

(20) C10—2 土壙 (第23.24図、図版11.15)

C地区南部に位置する。北にC10—8 土壙が隣接し、C10 竪穴住居跡の南部にあたっている。平面形は65×50cmの長円形である。深さは37cmで、円筒状を呈する。埋土は記録しないでしまったが埋土から縄文土器45点、円盤状土製品3点(101、107、108)が発見されている。

1は口縁端部にボタン状の貼付文をもち、隆起線が垂下する。2、3は磨消縄文で、前者は磨消部分が幅広くなっている。4、5は同一個体で、器表面にくし目による曲線文が施されている。

(21) C10—3 土壙 (第23.24図、図版15)

C地区南部に位置する。西半が調査区外に続いている。C10—4 土壙に切られ、C10—5 土壙を切っている。平面形は直径1mほどの円形であると推定される。深さは28cmで、底部が鍋底状を呈する。埋土は黒褐色土の単層で、縄文土器16片が発見されている。1は隆起線と磨消縄文からなる胴部破片で、隆起線は中央に沈線が入っており、連鎖状文となるものかもしれない。2は隆起線を横に展開する磨消帯からなる。

(22) C10—4 土壙 (第23.24図、図版11.15)

C10—3 土壙の北に隣接し切っている。北にはC8 竪穴住居跡の剝片貯蔵穴が重複しており切られている。また、西半が調査区外に続いている。平面形は残存部から長径80cmほどの長円形であるとみられる。深さは47cmで、断面形は円筒状となる。埋土は黒褐色土で、剝片貯蔵穴と

は識別困難である。埋土から縄文土器が23片発見されている。

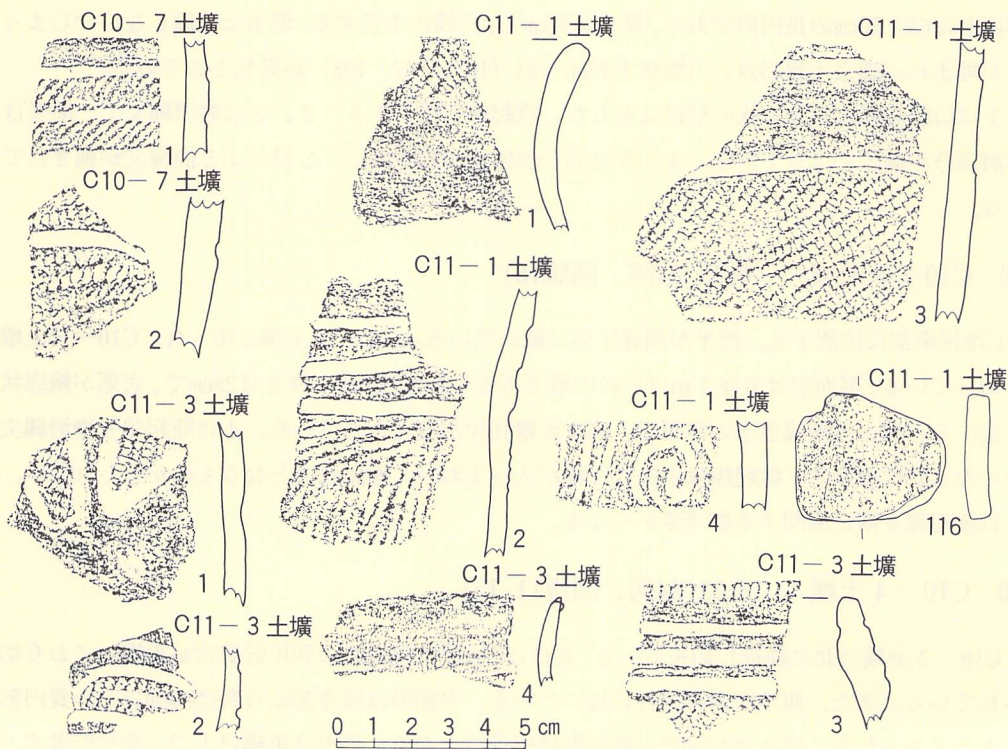
1はLR単節斜行縄文の上に下方から突き刺した竹管文をもつ。2は口唇部が指頭による押捺によって小波状口縁となっている。3は幅の狭い磨消縄文が横に展開している。4、5は沈線を主体とするもので、前者には口唇部に瘤状突起をもつ。後者は変形工字文をもつものである。両者とも内面にも1条の沈線がめぐっている。6は網代底である。

(23) C10-5 土壇 (第23図、図版11)

C10-3 土壇の南に重複し、切られている。また、西半が調査区外に続いている。平面形は直径80cmの円形であると推測される。深さが45cmで、円筒形に近い。埋土は褐色砂質土で縄文土器が僅か混入する程度である(縄文土器7点)。ほとんど粗製土器の細片で、磨消縄文を含んでいる。

(24) C10-6 土壇 (第23図)

C8 竪穴住居跡の炉跡に隣接している。炉跡が載っており先行するものである。平面形は54cm×42cmの長円形であり、深さが31cmの柱穴状の土壇である。埋土は暗褐色砂質土の単層である。



第25図 土壇出土遺物(5)

(25) C10— 7 土壌 (第23. 25図、図版15)

C 8 竪穴住居跡の西部に位置し、貼床下から検出されたものである。西半は調査区外に続いている。平面形は長径75cmの長円形であると推定される。深さは40cmで断面形が円筒状を呈する。埋土は黒褐色混土、暗褐色混土からなり、下位に礫を大量に含んでいる。縄文土器25点が発見されている。いずれも細片で磨滅が著しいが、帯縄文をもつものが含まれている。

(26) C10— 8 土壌 (第23図)

C地区南部に位置する。C8竪穴住居跡の南部にあたり、C10— 2 土壌の北に隣接している。平面形は50cmほどの円形であり、深さは30cmである。小さな円筒状を呈する土壌である。埋土は黒褐色混土、暗褐色混土からなる。

(27) C11— 1 土壌 (第23. 25図、図版11. 15)

C地区南部に位置する。東辺に偏在している。平面形は直径60cmの円形で、断面形は円筒状を呈する。深さは55cmで、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色混土、暗褐色混土からなり、水平堆積を示す。自然堆積とみられる。埋土から縄文土器71片、円盤状土器製品1点(111)が発見されている。1は口縁端部にLR単節斜行縄文が横走し、下半は無文研磨されている。2、3が横に展開する磨消縄文で、4は渦巻文をもつ。

(28) C11— 2 土壌 (第23図、図版11)

C地区南端部に位置する。東半が調査区外に続いている。平面形は80cmの円形をなすと推定されるが、上半を削平してしまい、はっきりしない。断面形は上半が大きく開く播鉢状を呈する。埋土は黒褐色混土の単層である。

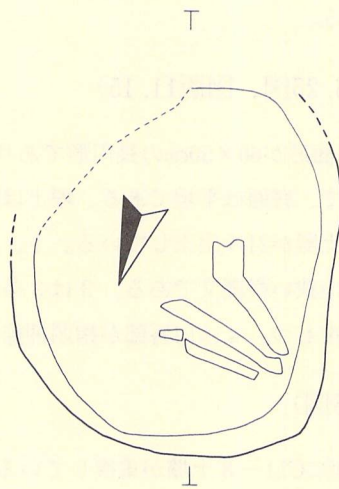
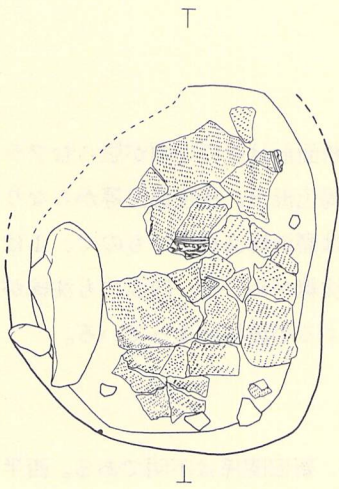
(29) C11— 3 土壌 (第23. 25図、図版11. 15)

C地区南端部に位置する。平面形が60×50cmの長円形であり、断面形は壁の中頃が脹らむフラスコ状を呈する。深さは80cmで、底面は平坦である。埋土は暗褐色混土、褐色混土等からなり礫を大量に含んでいる。縄文土器が21片出土している。1、2は磨消縄文をもつもので、1は文様帯が縦に展開し、2は幅の狭い帯縄文である。3は3条の沈線がめぐり、内面にも沈線がめぐって、口唇部には刻み目をもつ。4は口唇部が指頭押捺による小波状になっている。

(30) C11— 5 土壌 (第23図)

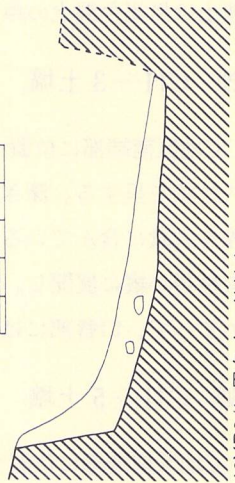
C地区南端部に位置する。南にC11— 8 土壌が重複しているが、新旧関係は不明である。西半は調査区外に続いている。平面形は70×50cmほどの長円形であると推定される。断面形は深さ

(1.05) × 0.85 × 0.92 × 0.75 × 0.3



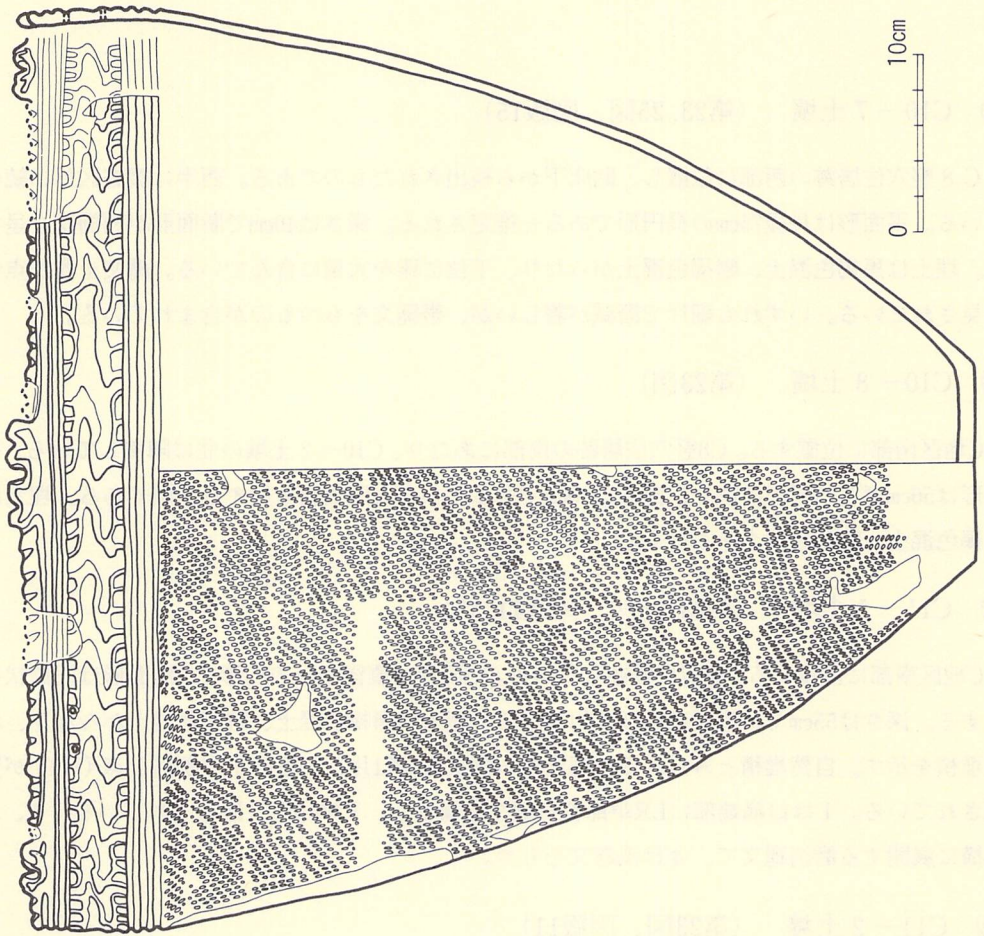
L-32.100

0 50cm



10YR2/1 黒色土、粘性あり。

52.0 × 54.6 × 11.0



0 10cm

第26図 土墳墓

45cmの擂鉢状を呈する。埋土は黒褐色混土である。

(31) C11—7 土壇 (第23図)

C地区南端部に位置する。北にC11—8土壇が重複し、切っている。また、西半は調査区外に続いている。80cmほどの長円形であると推定される。埋土は黒褐色混土の単層である。

(32) C11—8 土壇 (第23図)

C地区南端部にあり、西半が調査区外に続いている。北にC11—5土壇、南にC11—7土壇が重複し、後者によって切られている。平面形は長径1.25mの長円形であると推定される。深さは38cmで、埋土が黒褐色混土の単層である。

6. 土壇墓

C10—1 土壇墓 (第26図、図版8.16)

C地区南部に位置する。C10竪穴住居跡の北壁と重複しており、切っている。平面形は100×80cmの不整な隅丸長方形で、深さが30cmほどの土壇墓である。底面は水平に近く平坦である。埋土は下位が黒色土である。

人骨は遺存状況が非常に悪く、取り上げ段階で粉々になってしまった。残存したものによると脚部が折り曲げられているようであり、側臥屈葬か仰臥屈葬と推定される。人骨の上には深鉢形土器の破片が密に並べられていた。破片は全て器表面を上にしており、意図的に並べられたものである。人骨の下には土器は認められず、土器内に人骨を納めたものではない。したがって土器片被覆墓とでも称すべきものであろう。

土器は口径51.0cm、器高が54.5cmの大型深鉢形土器である。器形は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部が内側に彎曲している。最大径は口縁より若干下がった所にある。

底径は11cmで、口径の約1/5であり、全体的に大きく開いた形を呈する。文様は口縁部文様帯と下半の地文とは3条の沈線によって分けられている。口縁部文様帯は2段の羊歯状文となっており、その間は2条の沈線で区画されている。口唇部には向い合った2個1対の突起を6個もち、その間は羊歯状文の一部が刻まれている。口縁部文様帯には補修孔が3孔認められ、貫通孔は外面からのみ穿孔されたものである。なお、底から4～20cmの高さまでは二次火熱のため褐色を呈しており、それより上には炭化物(煤?)が付着している。明らかに転用されたものである。そのほか埋土から搔器類1点(14)が発見されている。

7. 遺物包含層

遺物包含層は基本土層における第II層に相当するが、上層のI—2層との識別はむずかしい。しかし、遺物の含まれている量は比較にならないくらい多いので遺物包含層として区別することとした。

包含層の範囲はC8グリッドの後半ぐらいから、C9、C10、C11グリッドまでの約17～18mで、層厚は0.3～0.5mである。この範囲はちょうど住居跡や土壌が重複して検出された範囲とも一致している。

包含層は東から西に傾斜するC地区の下端部に位置しているが、包含層の西端部のC11、C12グリッドにおいては、包含層と浜田川の氾濫堆積層とが互層に堆積している。このことから遺構や包含層は浜田川の川岸の近く所在していることがわかる。

包含層には、縄文時代後期と晩期を主体とする中期～晩期までの土器。土偶、土錘、耳飾などの土製品。石錐、石鏃、石匙、石斧、磨石、独鈷石状石製品、石冠状石製品などの石器や石製品。鉄滓や羽口などの生産遺物。貝、馬の歯、猪の牙などの自然遺物などが含まれている。これら遺物の出土状況には層序的な所見は見られなかった。

(1) 土器

遺構外における土器の出土量は多くのグリッドにおいては整理用コンテナに1～2箱であるが、C8グリッドでは6箱、C9グリッドでは6箱、C10グリッドでは10箱、C11グリッドでは7箱と包含層部分での出土量が多い。

これら土器片の内容は地区別および層序別による特徴や差異は認められなかったので、全体を大きく次の6群に区分した。

第1群 縄文時代中期に属すると思われる土器をまとめた。太めの沈線や隆帯による文様に磨消縄文が見られる。これらの土器の多くは大木10式に比定される。

第2群 縄文時代初頭から前葉に相当すると思われる土器を一括した。量的には最も多い土器群である。本群は内容的にさらに細分化されるものであるが、一応次のとおりである。

まず、連鎖状隆起線文や中空把手などを有する土器群(29図の1～6)で、これらは口縁部直下から胴部においては数条の平行沈線を用いた渦巻文や懸垂文となるものである。鎖状文(29図の4)から列点化(29図の6)したようなものまでである。これらの土器群はいわゆる門前式に類例を求めることができるものと思われる。

次に、口唇部に胴部の2～3倍の厚みをもった突起が配置され、突起部には孔が穿たれ、穿孔の周囲には円形および弧形の沈線があり、また突起の上端、下端、頂部に盲孔が存在するものがある。さらにこれらの土器の口唇部外面には沈線も見られる。(27図の5～10)

この他にも、口縁部に沈線による同じ円的な文様、半円文の組み合せたもの、渦巻文などが見られる。

第3群 縄文時代後期中葉に属すると思われる土器群を一括した。この土器群にはさらに次の細分ができる。まず、第一には、口唇部を無文帯とし、さらに口縁に沿って数条の平行沈線を引き、この平行沈線間には一段おきに向きをかえた孤状沈線を施すものである。(31図の17、18)

次に、磨消縄文を構成する沈線に沿って連続刺突文を施した土器である。(31図の9、20、21) (31図の20)は大形突起のとりつけ部分である。

第4群 本群は縄文時代末葉に属すると思われる土器群を一括した。この土器群も次の細分が可能である。まず第一には、刻み目文をもつ土器で、口縁部に刻み目文帯をもつものから、口縁部に沿って1条から数条の平行沈線を引き、無文帯を交互に刻み目文帯があるものなど、多種類のものがある。(31図9～16、22)

次に、いわゆるコブ付土器で、これらのものは入組状の磨消縄文も見られ、さらに細分もできると思われるが、ここでは一括してある。(31図の1～8)

第5群 縄文時代晩期に属すると思われる土器を一括した。本群の土器は第2群に次ぐ出土量があり、内容としては、さらに大きく次の区分ができる。

第1には、シダ状文の見られる土器で、器形としては壺、注口などが見られる。(32図の1) (35図の1～7) これらは大洞BC式に属すると思われる。

第2には、雲形文、兀字文などの見られる土器で、器形としては壺、浅鉢、注口などがある(32図の2) (33図の1) (34図の1) (35図の8～13)。これらは大洞C2式に属すると思われる。

第3には、工字文、変形工字文などが見られ、器形は壺、浅鉢がある。(33図の2～3) (34図の2～4) (36図の1～11) これらは大洞A～A'式に属すると思われる。

第6群 粗製土器や分類できない土器をここに一括した。

口縁部に撚糸圧痕文をめぐるす縄文時代後期前葉の粗製土器(39図の1～3)。

折り返し口縁部に縄文を施文し、その下に無文帯をもつ土器で、これも同じく後期前葉の粗製土器である(40図の1～3)。

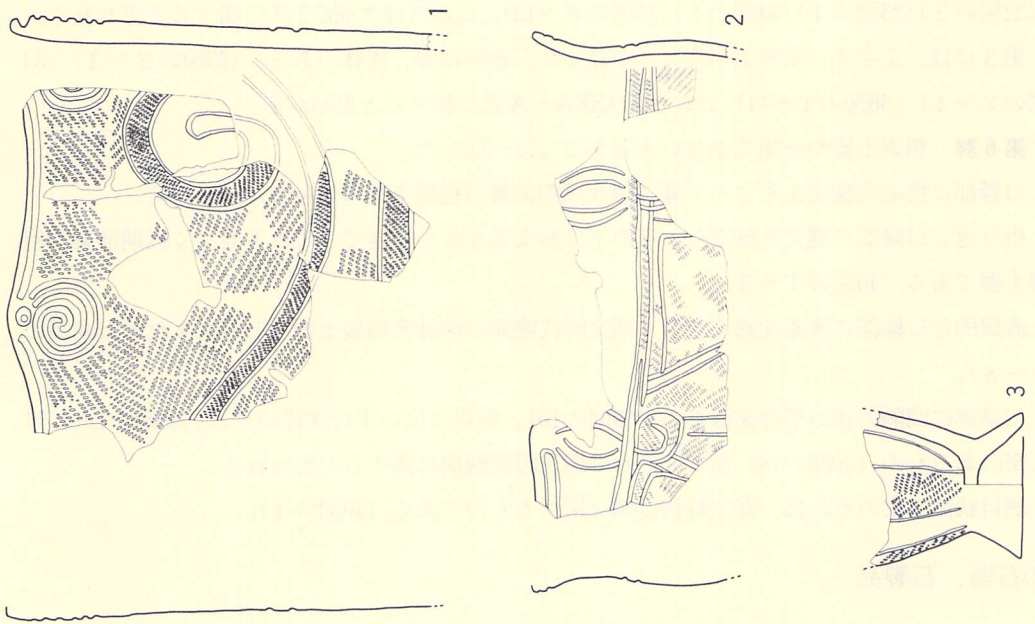
直線的な口縁部に多条沈線文を引く縄文時代晩期の深鉢形粗製土器などが含まれる(40図の6～8)。

口縁部に間隔の狭い平行沈線もの(39図の10)、反対に広い平行沈線のもの(39図の12)、無文帯のあるもの(39図の18)など、これは縄文時代晩期に属すると思われる。

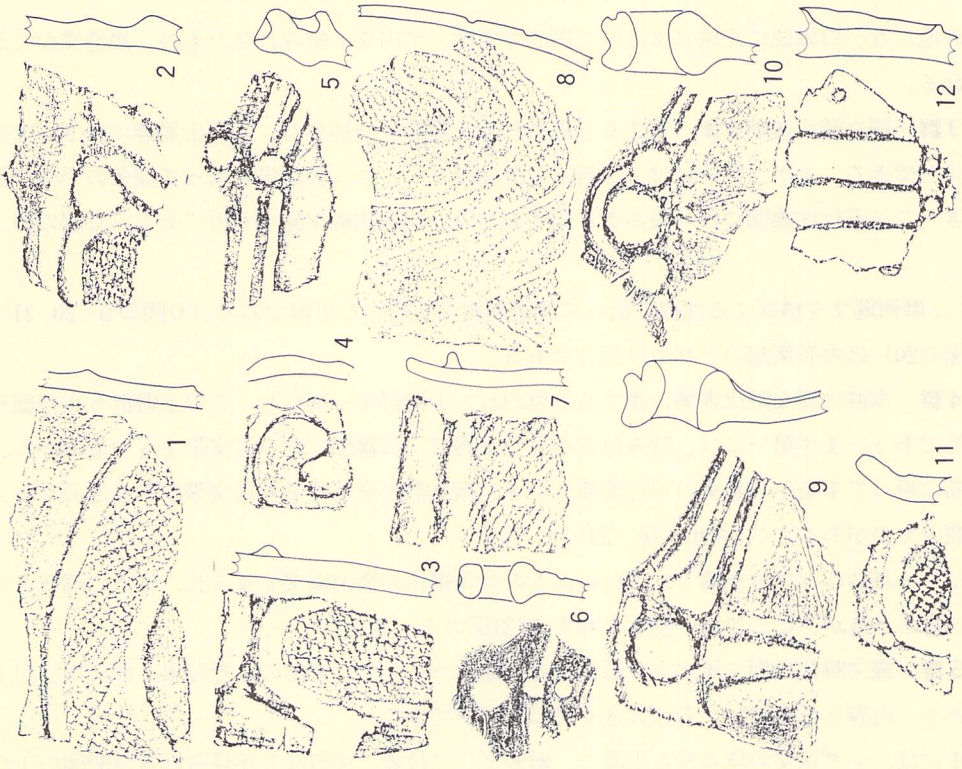
網目状撚糸文のものは、縄文時代後期に属するものである(40図の4)。

(2)石器、石製品

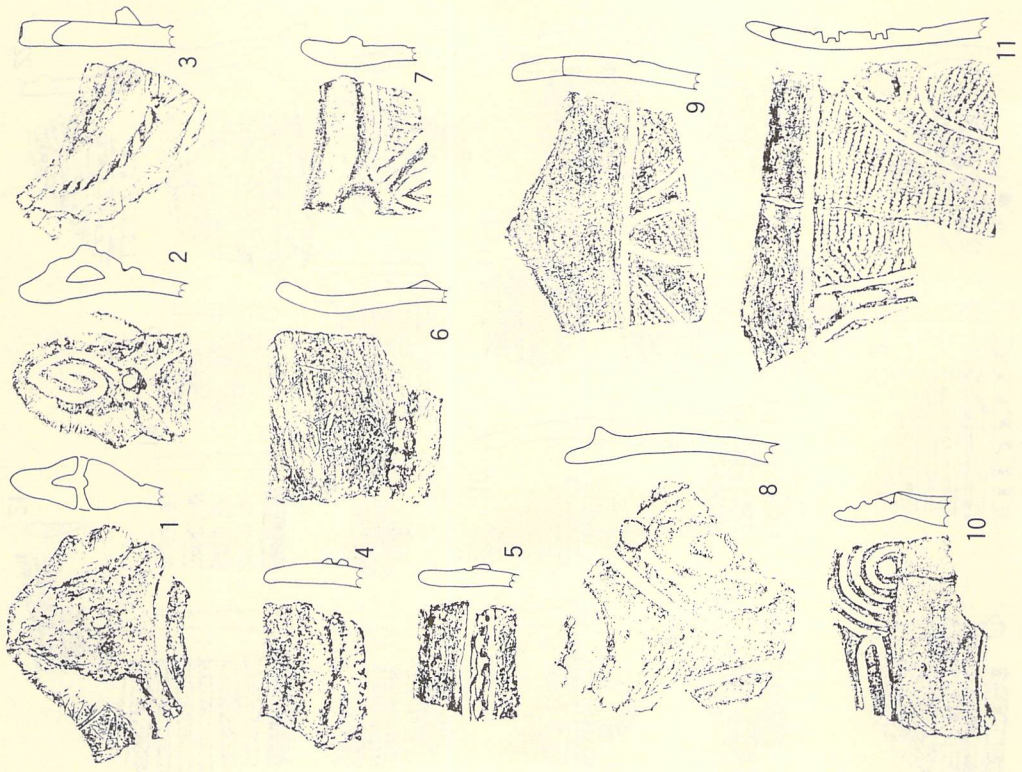
石鏃 (第41～43図、図版28～30)



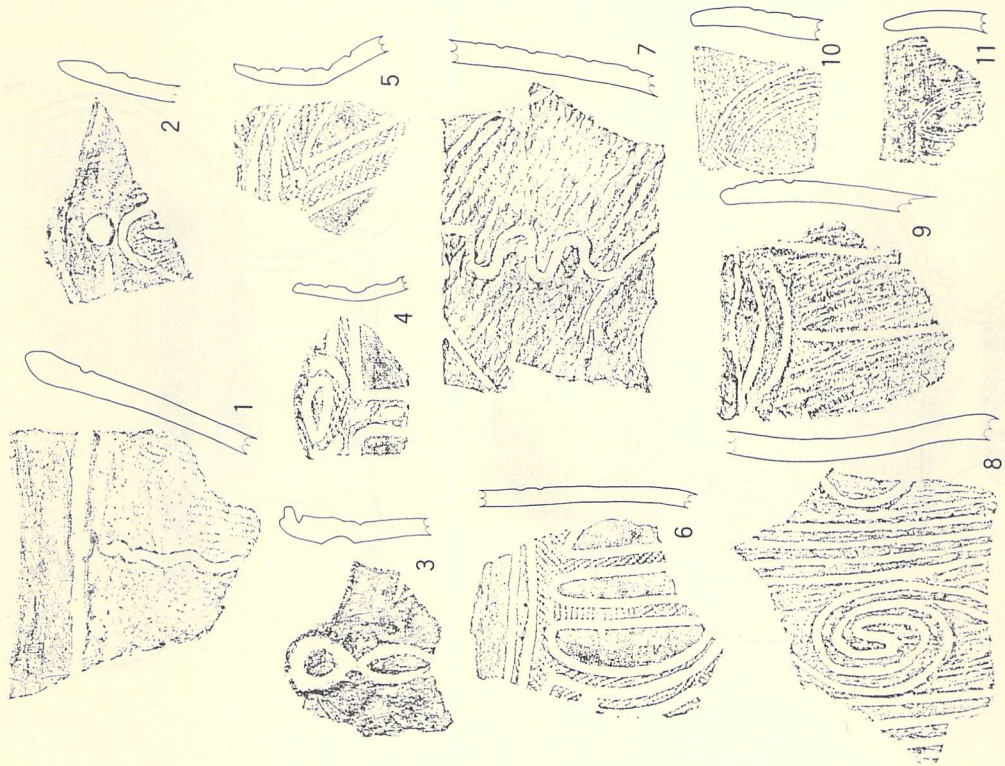
第28图 土器 (第2群)



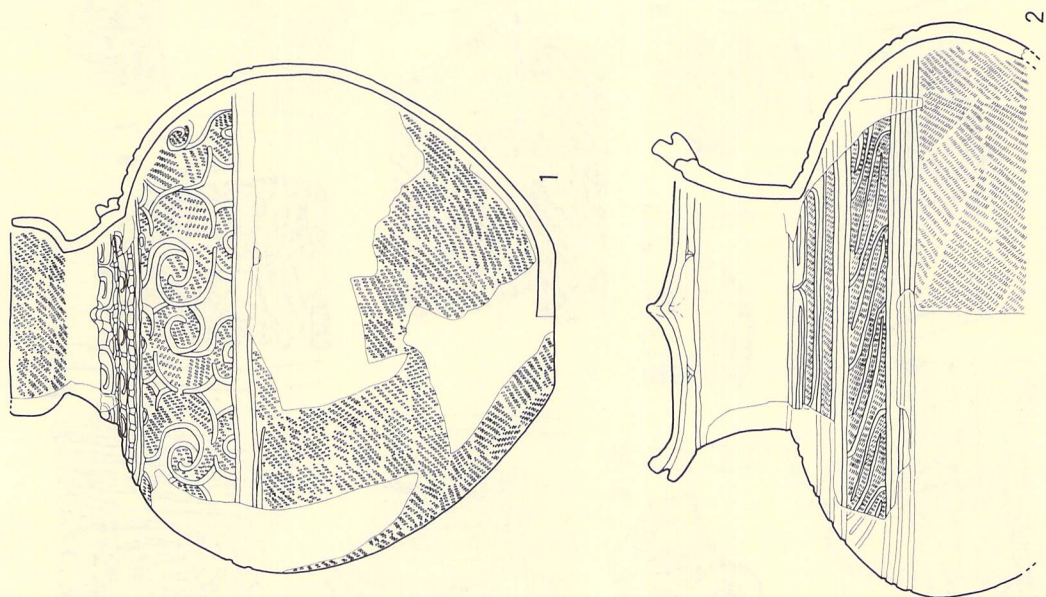
第27图 土器 (第1・2群)



第29图 玉器 (第2群)



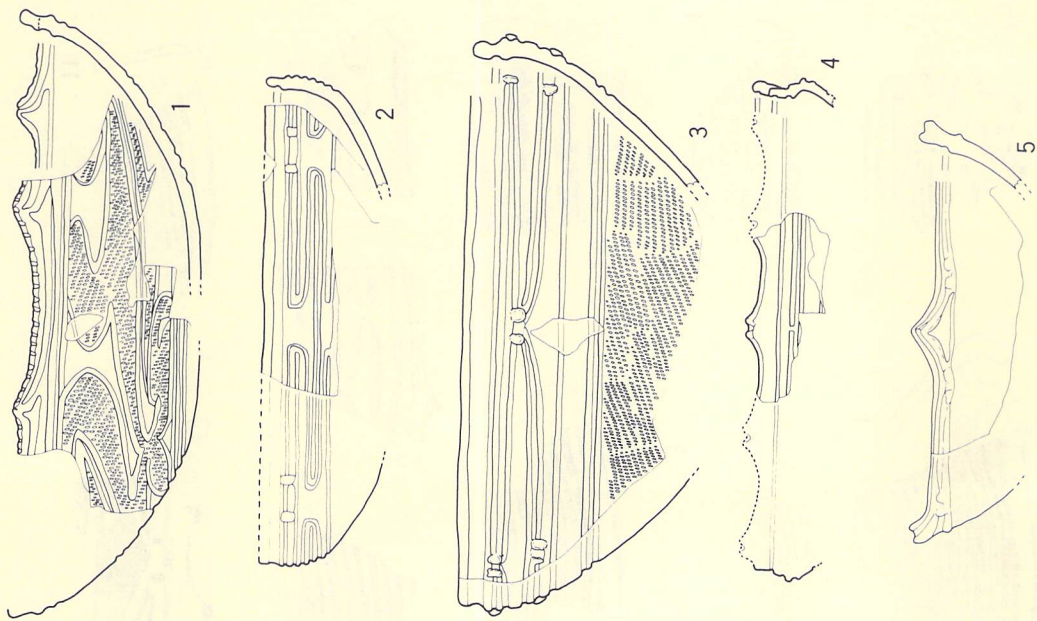
第30图 玉器 (第2群)



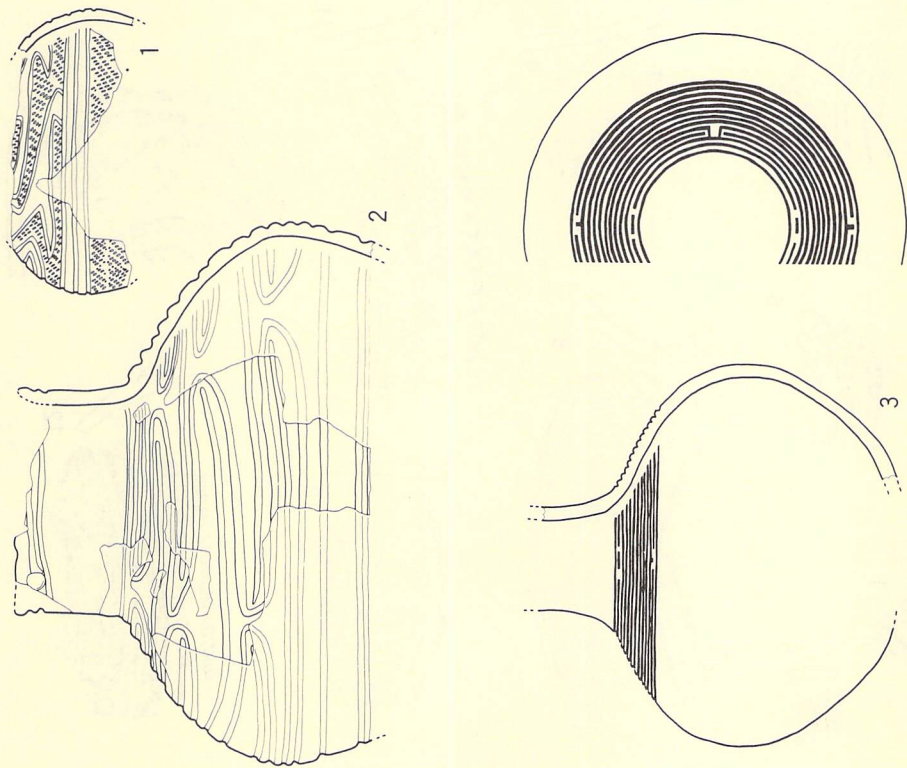
第32图 土器 (第5群)



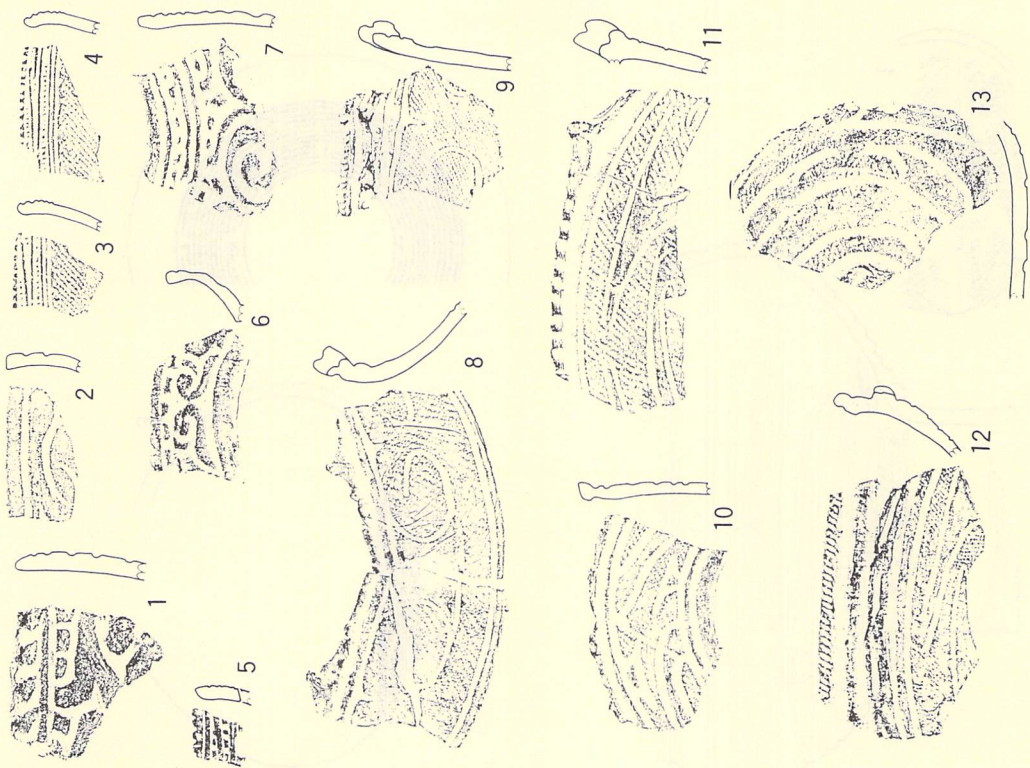
第31图 土器 (第3·4群)



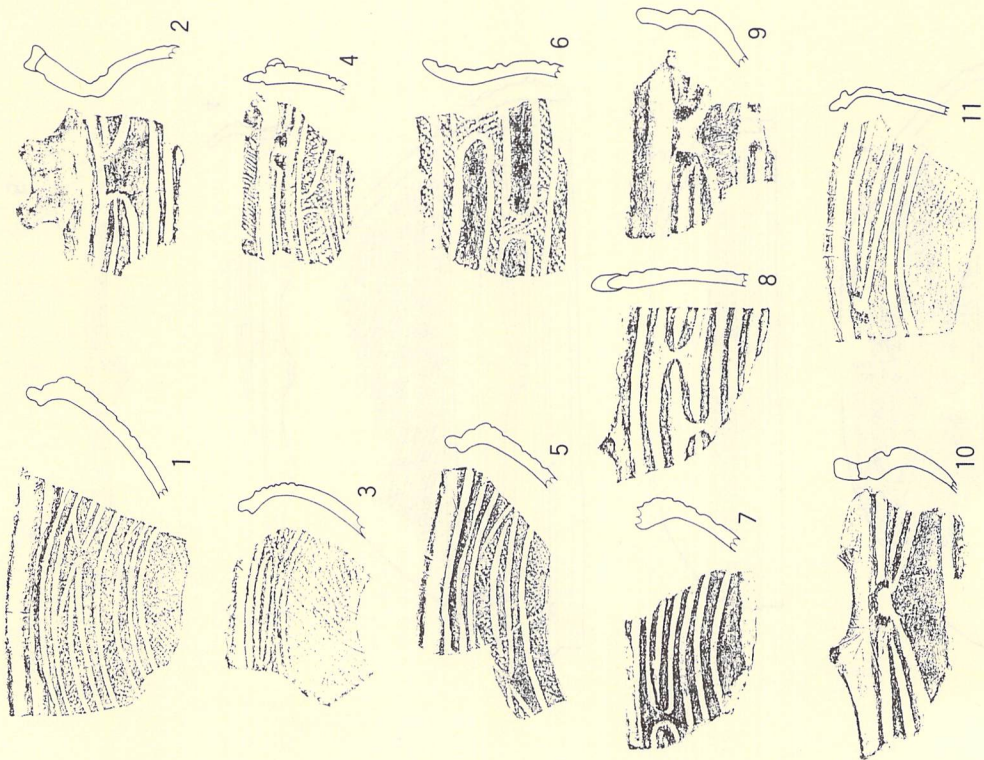
第34图 土器 (第5群)



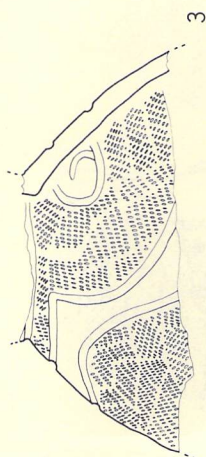
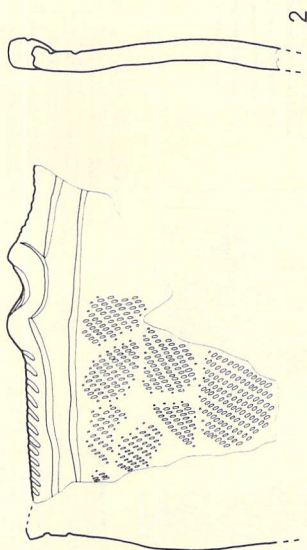
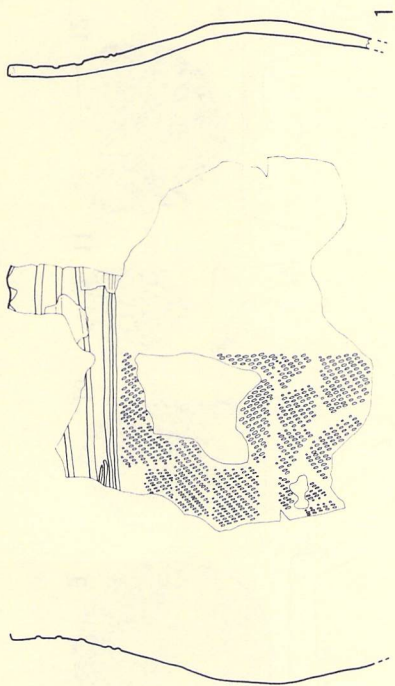
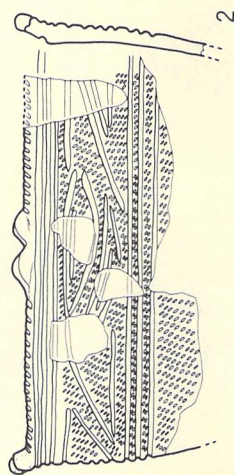
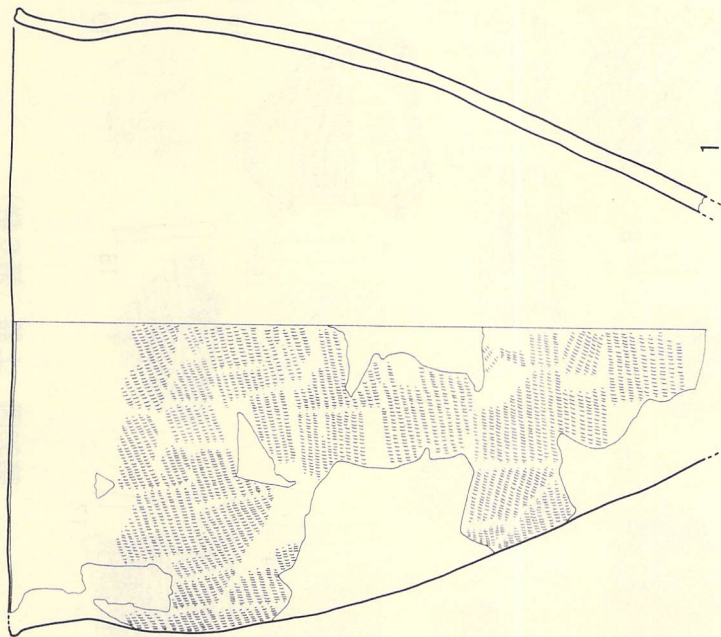
第33图 土器 (第5群)



第35图 土器 (第5群)

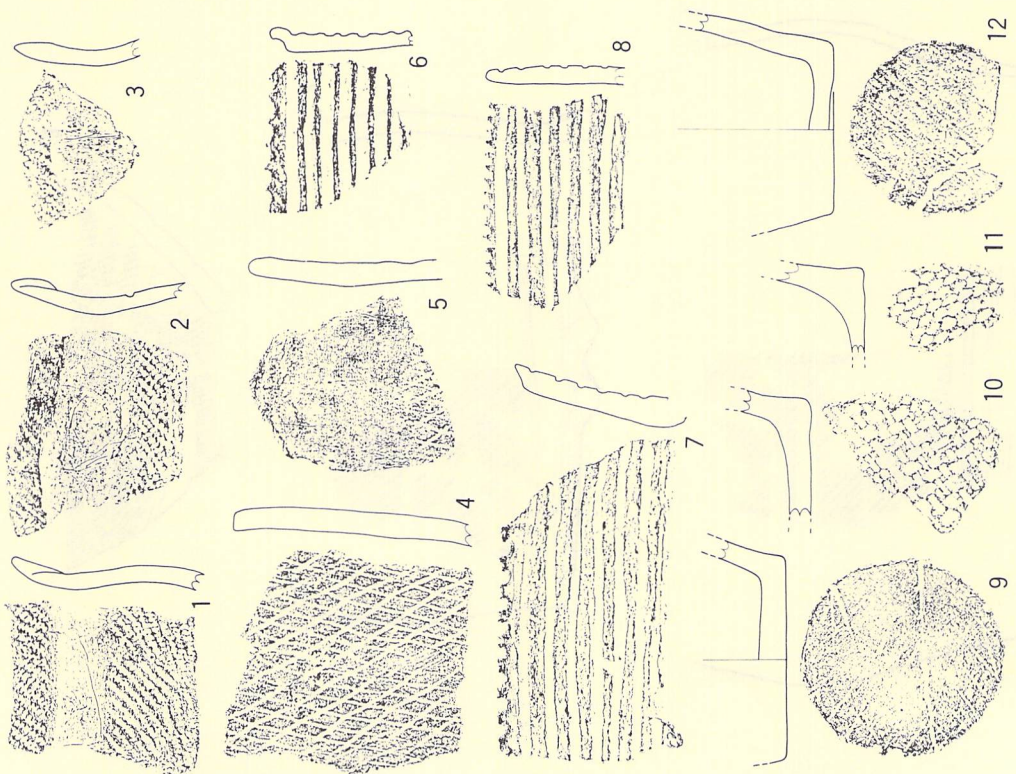


第36图 土器 (第5群)

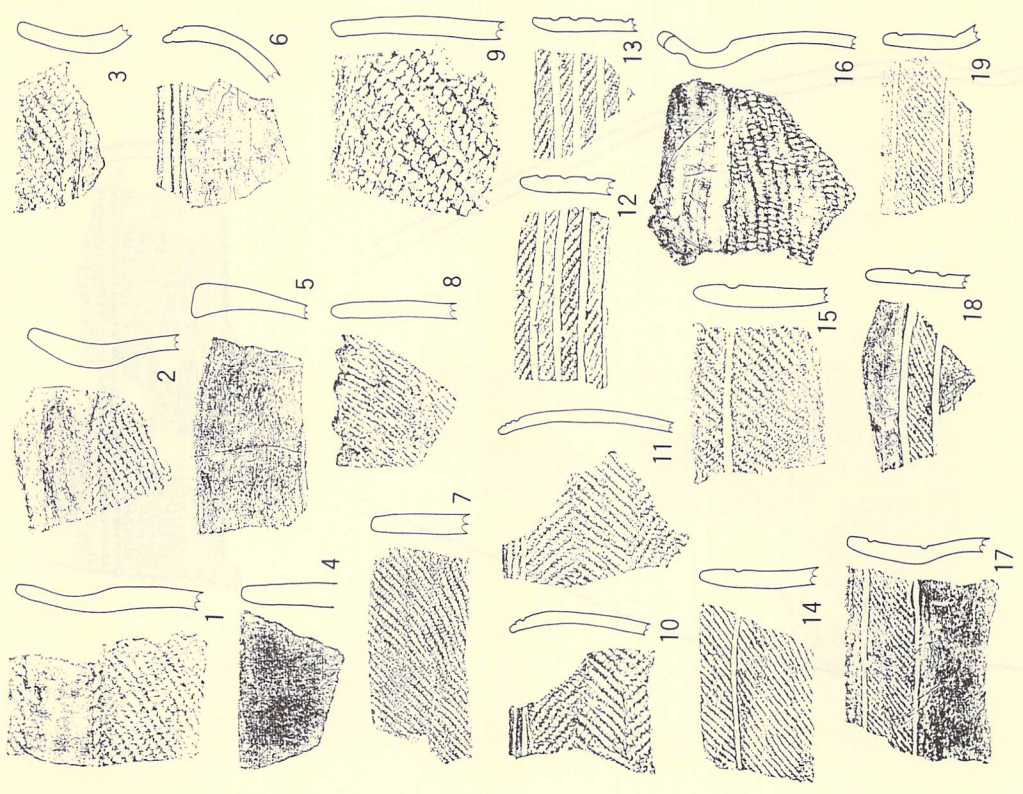


第37图 土器 (第6群)

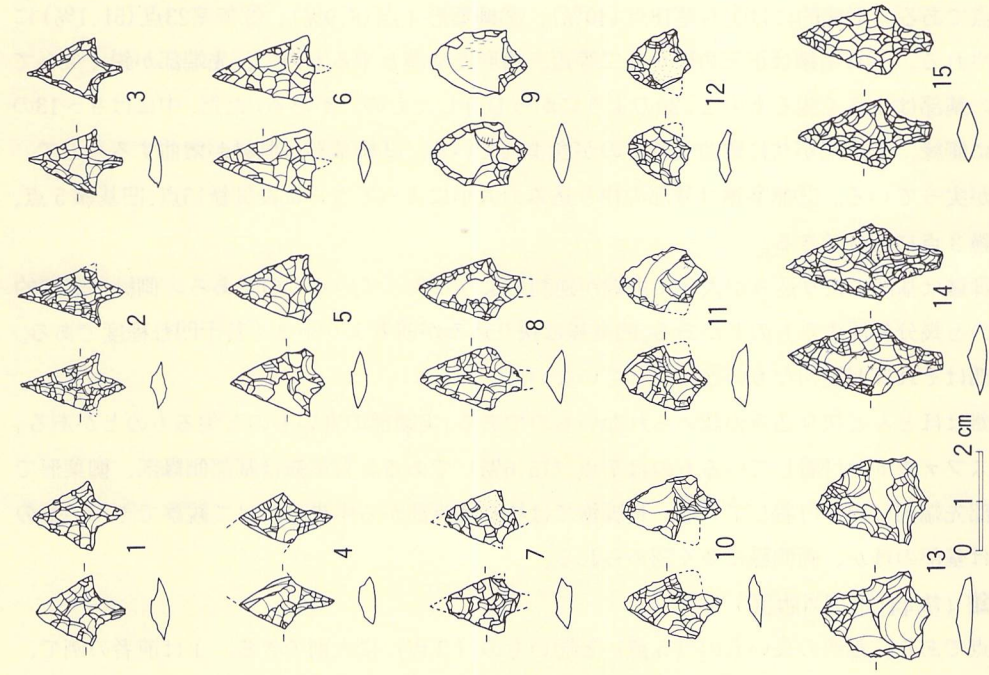
第38图 土器 (第6群)



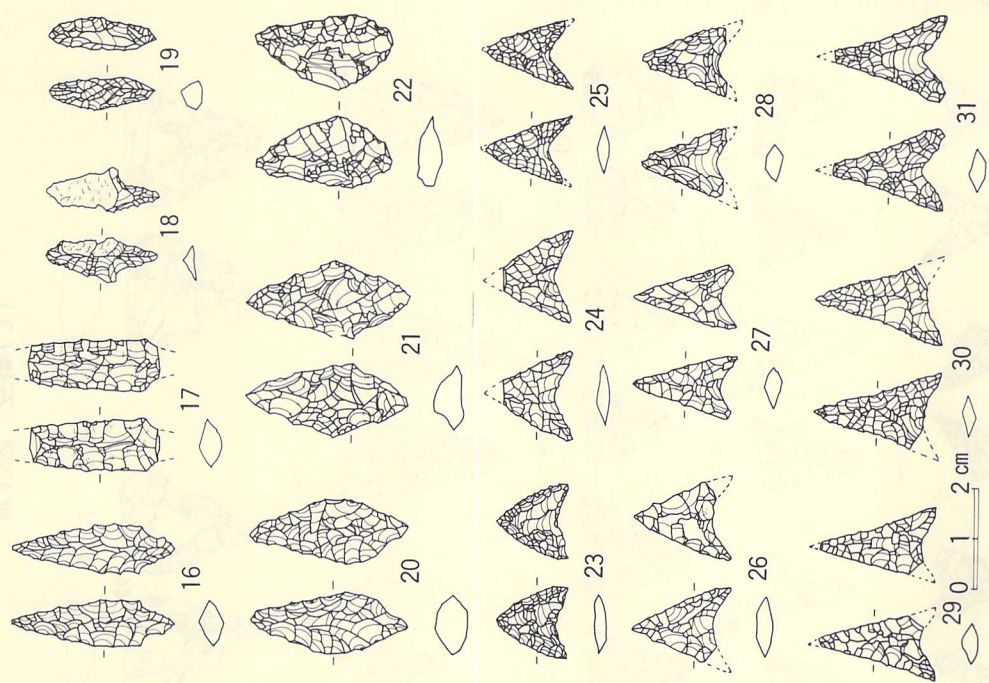
第40图 土器 (第6群)



第39图 土器 (第6群)



第41図 石鏃(1)



第42図 石鏃(2)

45点である。形態的には①有茎18点(40%)、②柳葉形4点(8.9%)、③無茎23点(51.1%)に大別される。①有茎鏃は正三角形から二等辺三角形を基調とするもので、先端部が鋭く尖っている。基部は小さく尖るものと、20のようにがっしりしたものとがある。ただ、中には9~13のように側縁、先端部が共に彎曲するものが含まれている。②柳葉形は側縁が彎曲するもので、両端が尖っている。③無茎鏃は基部の抉り込みの大小によってさらに長脚鏃15点、凹基鏃5点、平基鏃3点に細分できる。

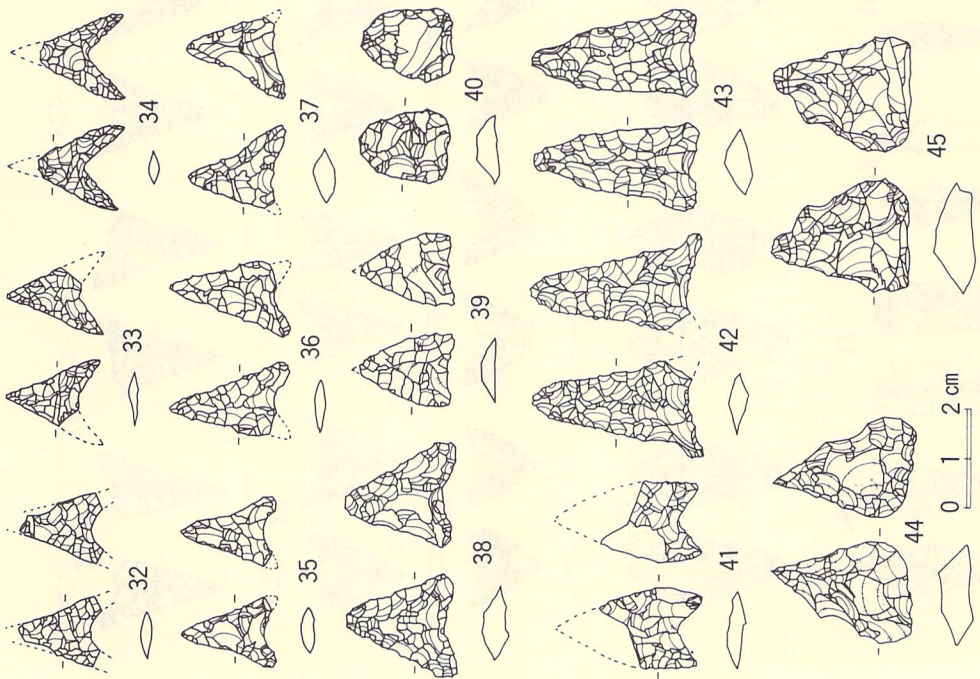
長脚鏃は基部の抉り込みが大きく両端が逆刺のように尖っているものである。側縁は真線的なものと幾分外反するものとがある。凹基鏃は抉り込みが前者より小さく若干凹む程度である。先端部はそれほど鋭利なものとはなっていない。

平基鏃はほとんど抉り込みの認められないものである。尖端部の丸いものと尖るものとがある。

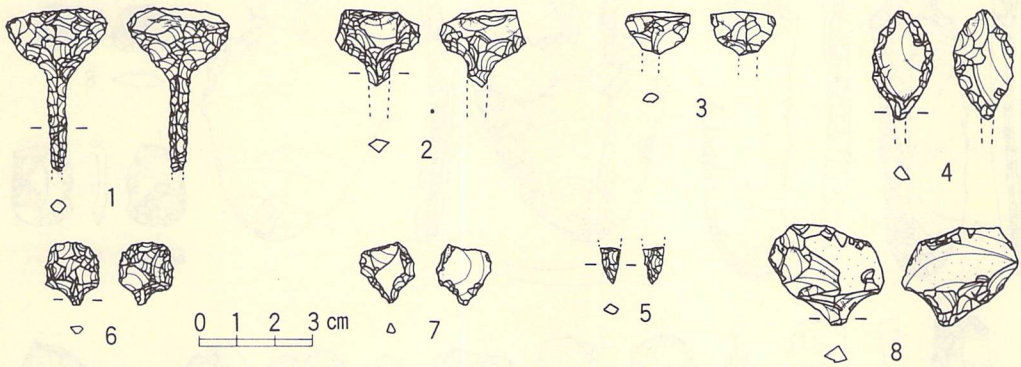
アスファルトの付着しているものは7点(15.6%)である。有茎鏃は基部側縁部、柳葉形では基部先端部に僅か付着している。長脚鏃では抉り込み部から中央にかけて観察でき、凹基の43では基部のほか、両側縁に多く認められる。

石錐(第44図、図版30)

8点である。錐部の長いもの(5点)と短いもの(3点)に大別できる。1は前者の例で、長さは2.7cm以上である。6~8は後者の例で錐部の長さは0.5cm前後である。つまみ部は横に転開するもので、打面、自然面あるいは主要剥離面をそのまま残している。錐部はいずれも断面菱形に近いもので、丁寧に加工されている。



第43図 石鏃(3)

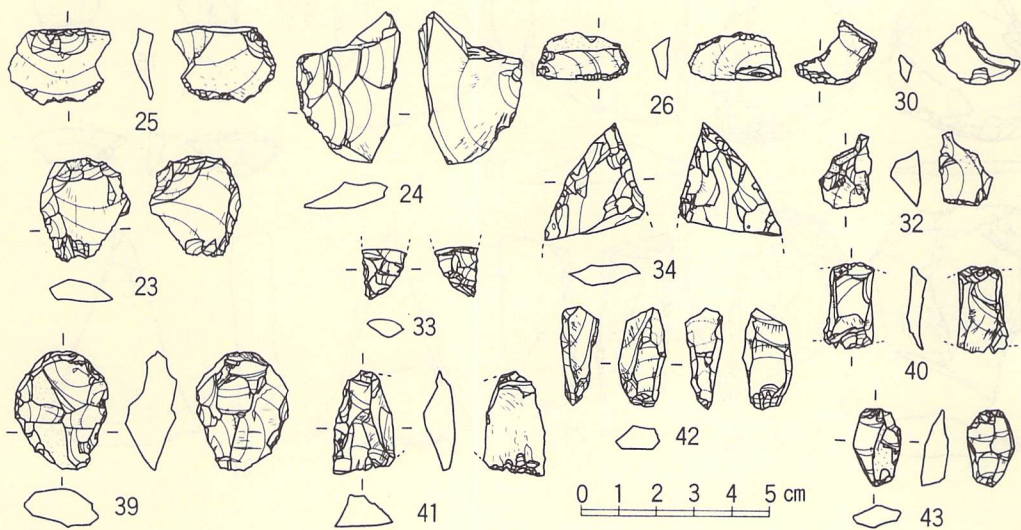


第44図 石 錐

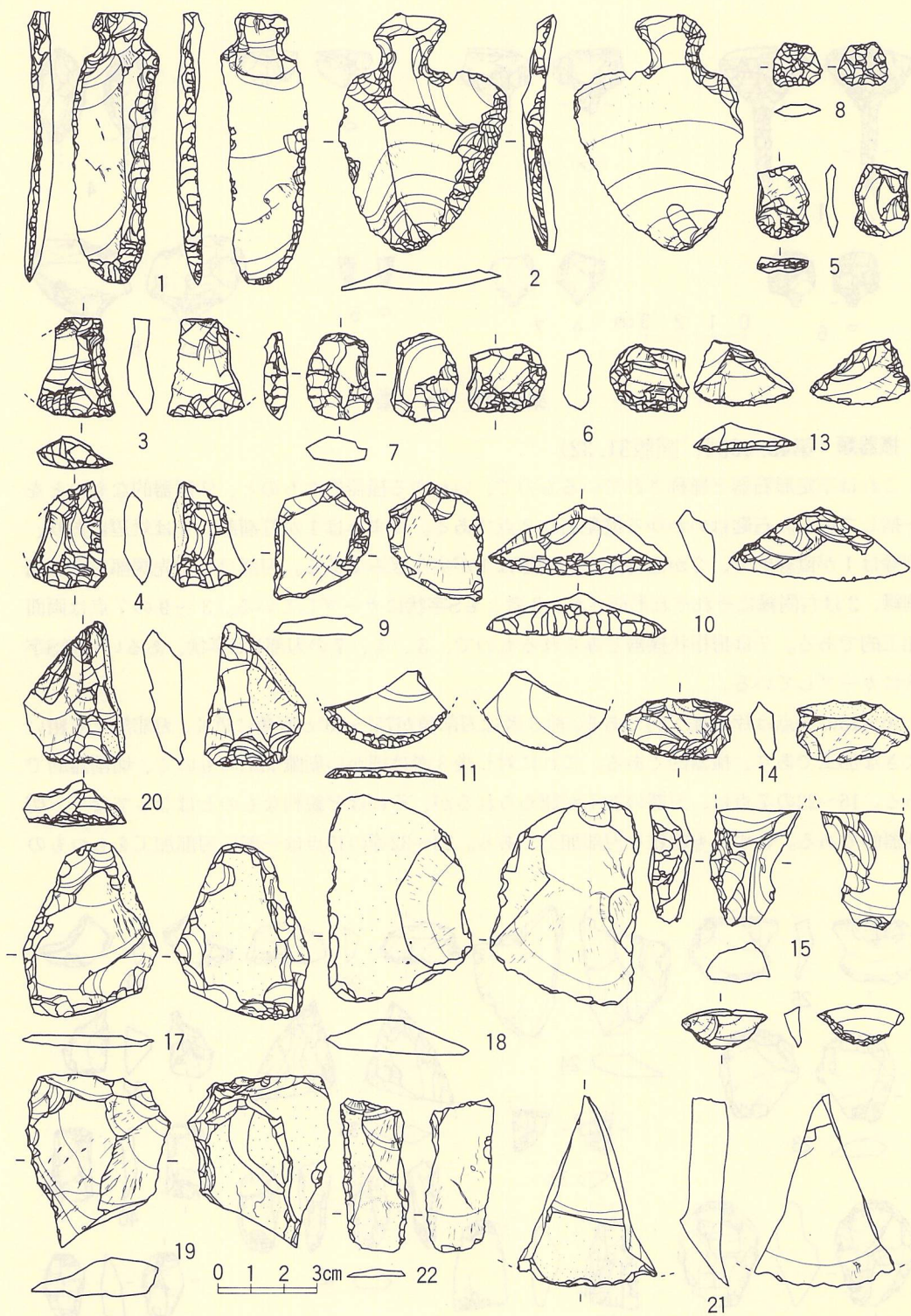
搔器類 (第45. 46図、図版31. 32)

これは不定形石器と総称されているもので、いわゆる搔器的なもの、切削器的なものを一括している。石匙はいわゆる縦型石匙2点である。つまみは1が打瘤部、2は対辺にあり、側縁は1が直線的で、2が曲線的、先端部は1が尖りぎみである。刃部は1が先端部を含む両側縁、2は右側縁にそれぞれ形成され、3者ともS字状にカーブしている。3～9の7点は両面加工的である。7は拇指状搔器とみられるもので、3、4、7の刃部はS字状、あるいは逆S字状にカーブしている。

10～15の6点は片面加工的である。前3者は刃部角が75°～80°と直角に近く、刃部加工も粗い大きな加工であり、搔器的である。これに対し後3者は細かい剝離加工のもので、切削器的である。16～22の7点は、刃部の加工が認められるが、それほど鋭利なものとはなっており、切削器的である。いずれも粗雑な刃部加工である。23～32等の15点は一部に刃部加工をもつもの



第45図 搔器類 (1)



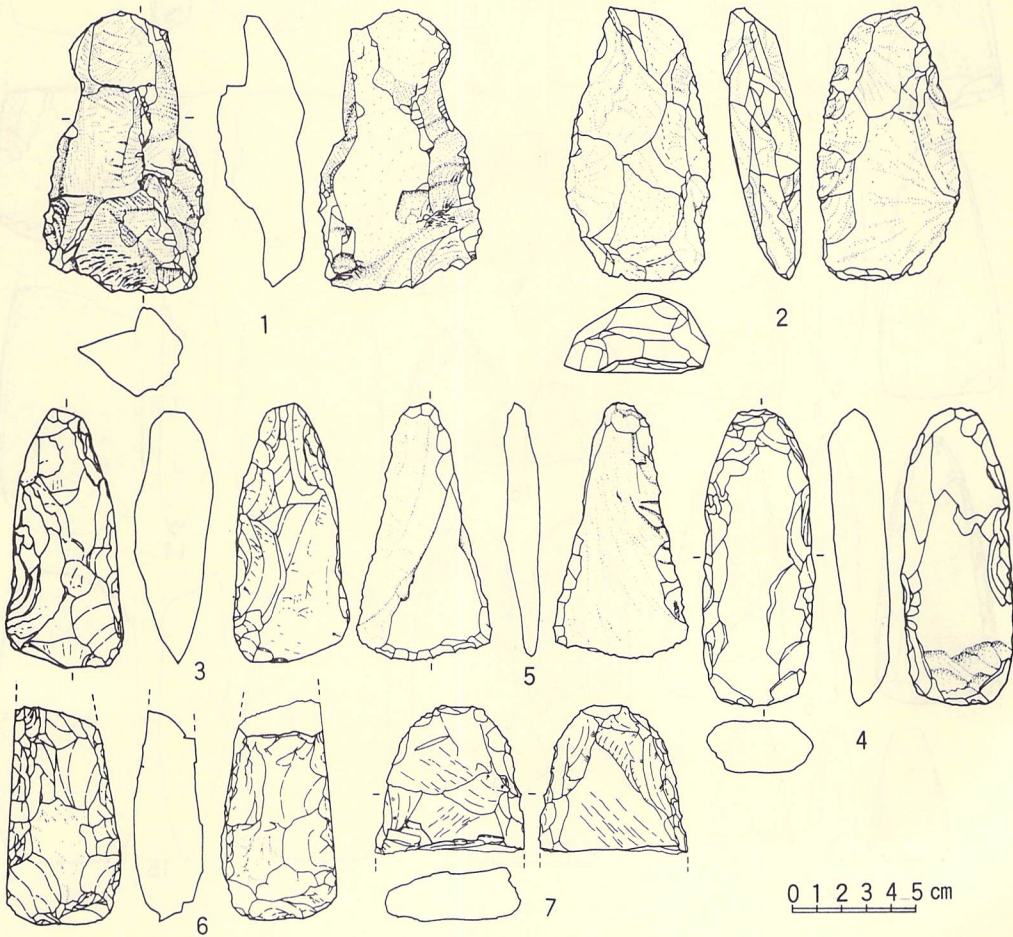
第46図 搔器類(2)

である。26～32等11点は小さな剥片を利用したものである。片面加工が主体をなすが、23等2点は両面加工である。33、34は石槍等の一部とみられるものである。

39～43の5点は楔形石器とみられるものである。42、43の2点は、マイクロ・コア様に上下両端から剥離加工されている。41は主に先端加工によって楔形石器にしたもので、右側縁には搔器様の刃部が認められる。40は両側縁を切断したもので、上下両端とも欠損している。39はやや大型であり、あるいは他の石器かもしれない。

石斧 (第47. 48図、図版33. 34)

石斧には磨製石斧と打製石斧とがある。磨製石斧は16点である。①棒状に細長いもの(2点)、②単冊形のもの(6点)、③末広がりとなるもの(7点)に分けられる。基部は①、③では幅が狭まって平坦となり、②では若干狭まる程度である。側縁はほとんどのものは、幾分彎曲するものようであるが、直線的なものも存在する。側面は面取的なもの(9点)、丸味をもつもの(5点)、稜線的なもの(1点)とがある。刃部には直線的なもの(5点)と孤状をなすもの(4点)があり、いずれも両面から研磨された蛤刃をなす。



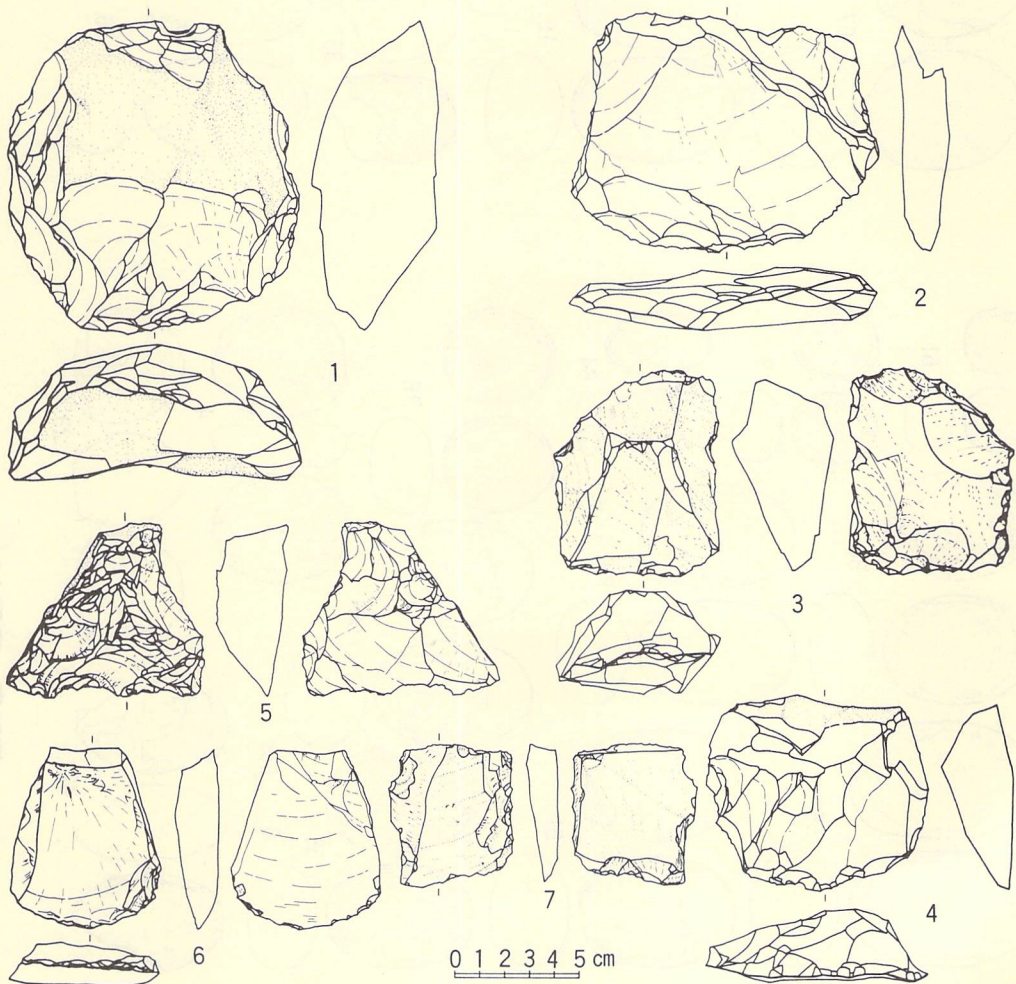
第47図 打製石斧



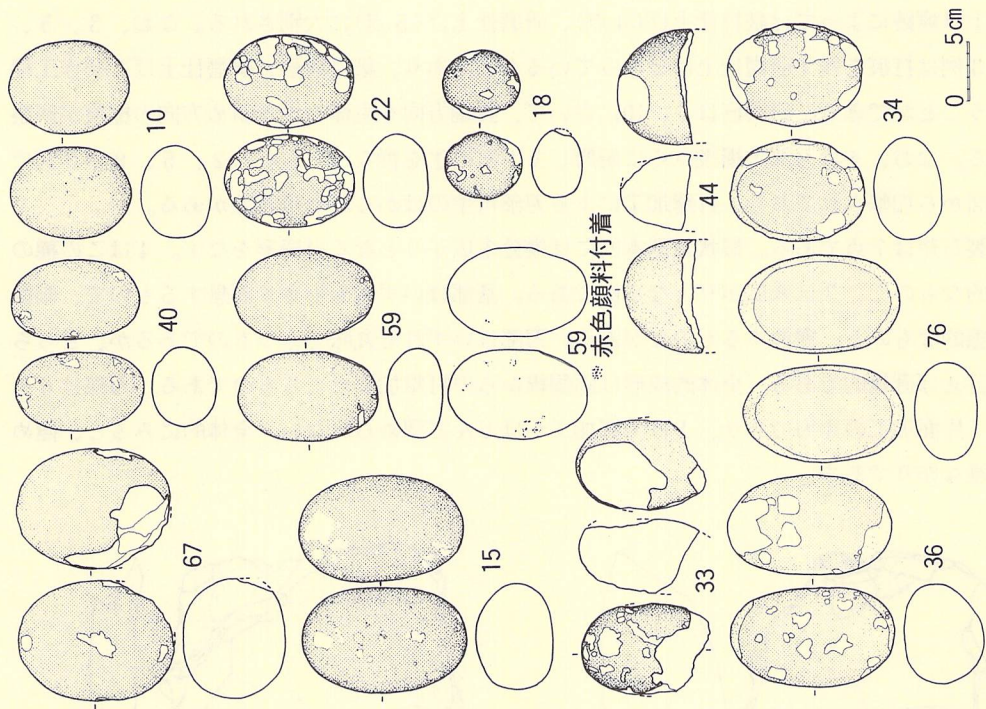
第48图 磨製石斧

仕上げ痕跡によっては敲打仕上げ(4点)、研磨仕上げ(5点)に大別される。なお、3、5、9の3例は打痕を残す研磨仕上げとなっているものであり、敲打成形、研磨仕上げと製作工程を追うことができる。研磨痕は6、10において、長軸方向を主体とする斜め方向の擦痕が観察される。なお、4は刃部欠損後さらに研磨して刃部再生を行っており、2、5、9の3例では両面から加撃されており、打撃加工による刃部再生のはかられた可能性がある。

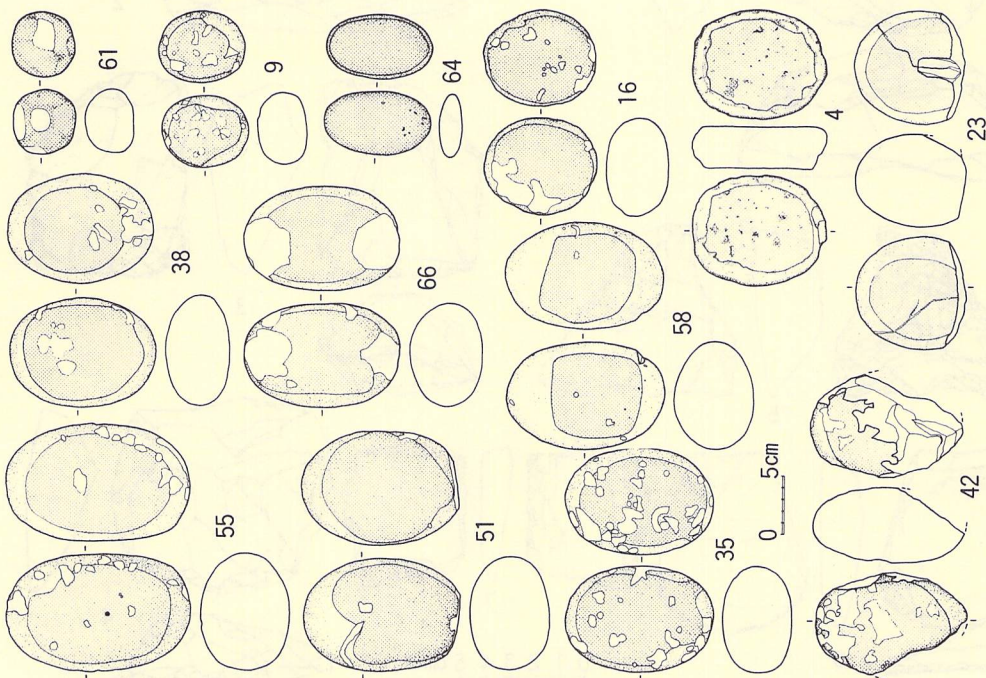
打製石斧は7点である。形状は基本的には幾分末広がりとなる単冊形をなす。4はこの種の代表的なもので、3は末広がりとなる例である。基部はいずれも小さく終息するもので、側縁は直線的なもの、彎曲するものがある。刃部はいずれも丸味をもつものであるが、どちらかと言えば直線的である。全体的成形は両側線からの打撃加工によるものである。刃部は6を除いて片面加工の片刃であり、1は刃部加工がほとんど認められない。全体的にみると、極めて粗雑な作りである。



第49図 片刃、両刃石器



第50図 磨石(1)



第51図 磨石(2)

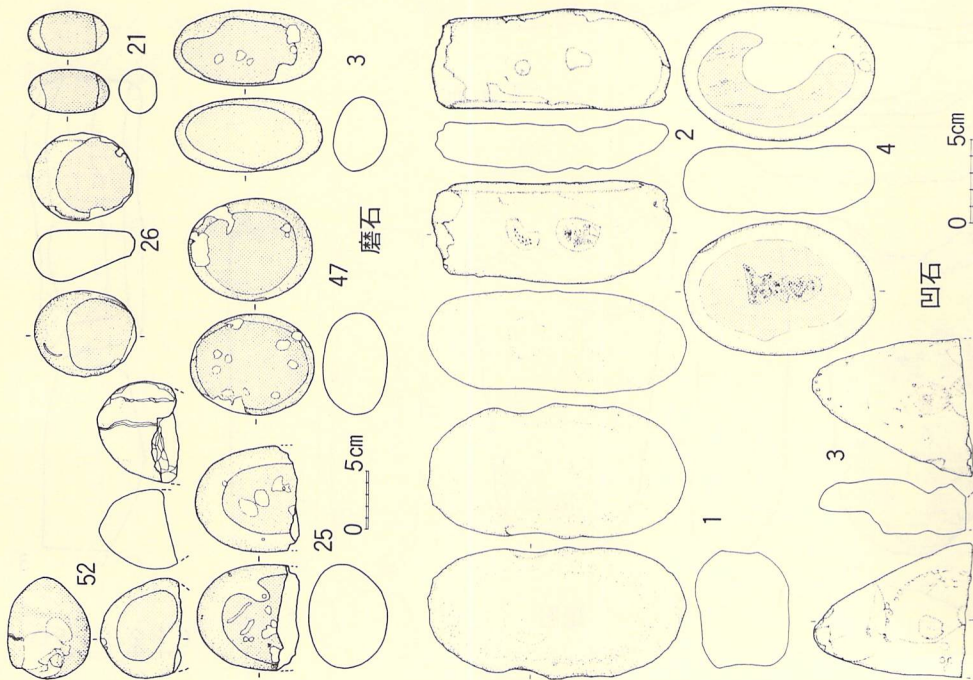
片刃、両刃石器 (第49図、図版34)

石斧に類する使用が想定される打製石器を片刃、両刃石器とする。これは7点である。形状はほとんど方形に近いもので、2、4は横に長いものである。基部は1～3の3点を除いて平坦で、石斧に比較すると大きい。側縁は直線的で、刃部は直線的なものと、丸味をもつものがある。基本的には片刃である。全体的成形は打撃加工による粗雑な加工で、片面あるいは両面に主要剝離面を大きく残している。

磨石、凹石 (第50～52図、図版35.36)

磨石は78点である。形状は球を押しつぶしたような円形か長円形を呈している。この中では5.0～9.5cmの小さなものは円形に近く、12cm以上となると長円形が主体となる傾向がある。大きさは5.3×4.3×3.2cmを最小とし、15.7×9.9×7.2cmを最大とする。主な使用面は2面(43.6%)、及び全面(47.4%)で、1面使用のものは僅か7例である。4は使用頻度が極めて高かったと見え、使用面が平坦になっている。使用痕はほとんど擦痕、研磨痕であるが、中には敲打痕をもつものが4点含まれている。52、56、61の3点は面取的な打面をもつもので敲击石的使用が想定されるものである。なお、59においては赤色顔料が付着しており、使用の一端を示唆している。

凹石は破損を含めて5点である。ただし1点は砥石として転用されたものである。これらのうち磨面をもつものは4の1点のみである。形状は長円形(1、4)あるいは棒状(2、3)を呈するもので、凹はほとんど表裏両面に認められ、いずれも長軸方向に並ぶ複数の穴である。

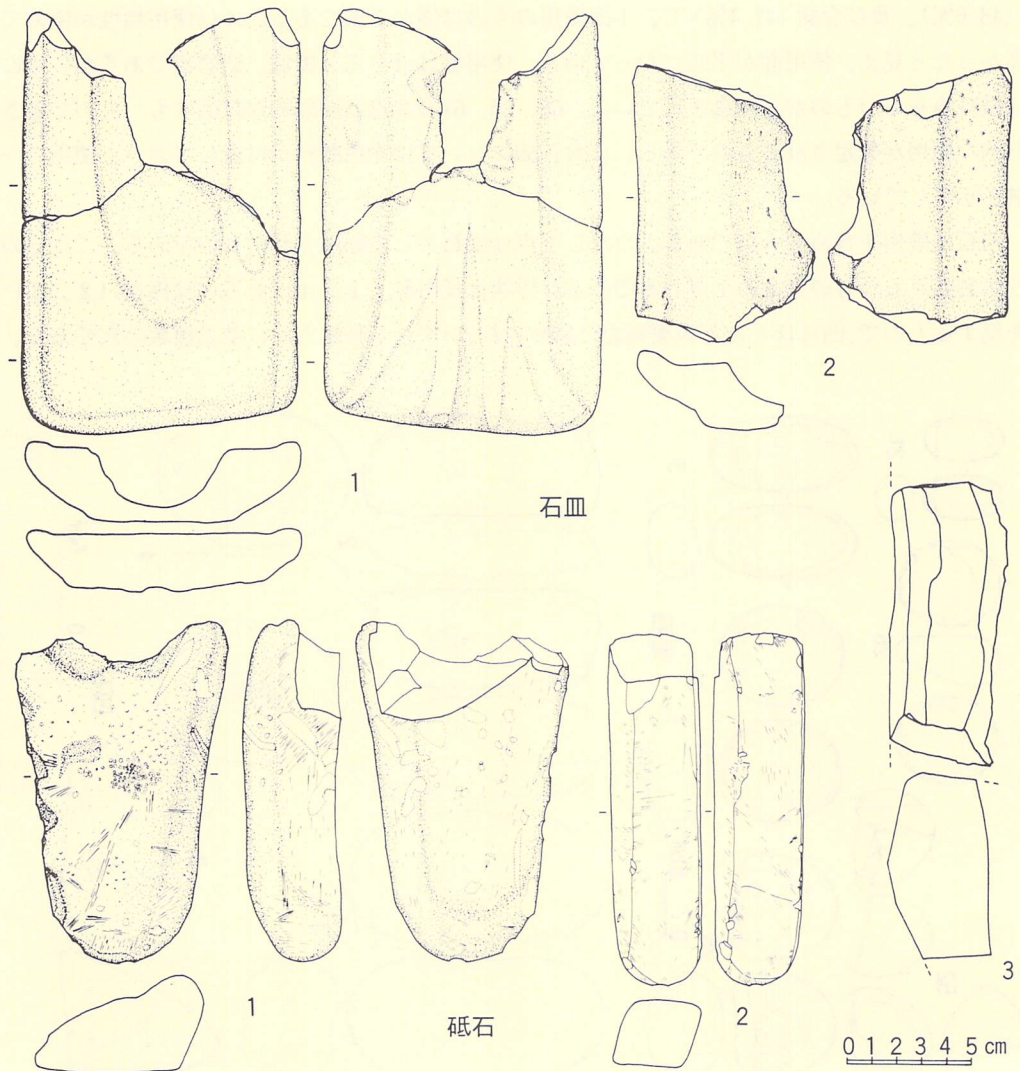


第52図 磨石(3) 凹石

V字状(3)、U字状(2)、あるいは皿状(1、4)を呈し、深いものと、浅いものがある。

石皿(第53図、図版39)

破損したもののみ5点である。1はほぼ原形を復元することができるもので、幅が22cm、厚さが6.4cm、長さが33.7cm以上となる。縁は幅1.5~2.0cm、高さ0.5cmに造り出され、内面は平坦となっている。ただし、中央部は使用のため幅10cm、長さが23.5cm以上の長円形の凹みが形成され、磨り減って穴があいている。裏面は幅12cmの平底を呈する舟底状に加工され、両側には3条の溝が造られている。2は前者同様の形状を呈する破片で、同じように磨り減って穴があいている。一部火熱を受けている。両者とも全面細かい敲打痕をもち、打撃加工されている。7は厚さ7cmの板状を呈し、表裏2面が使用されている。



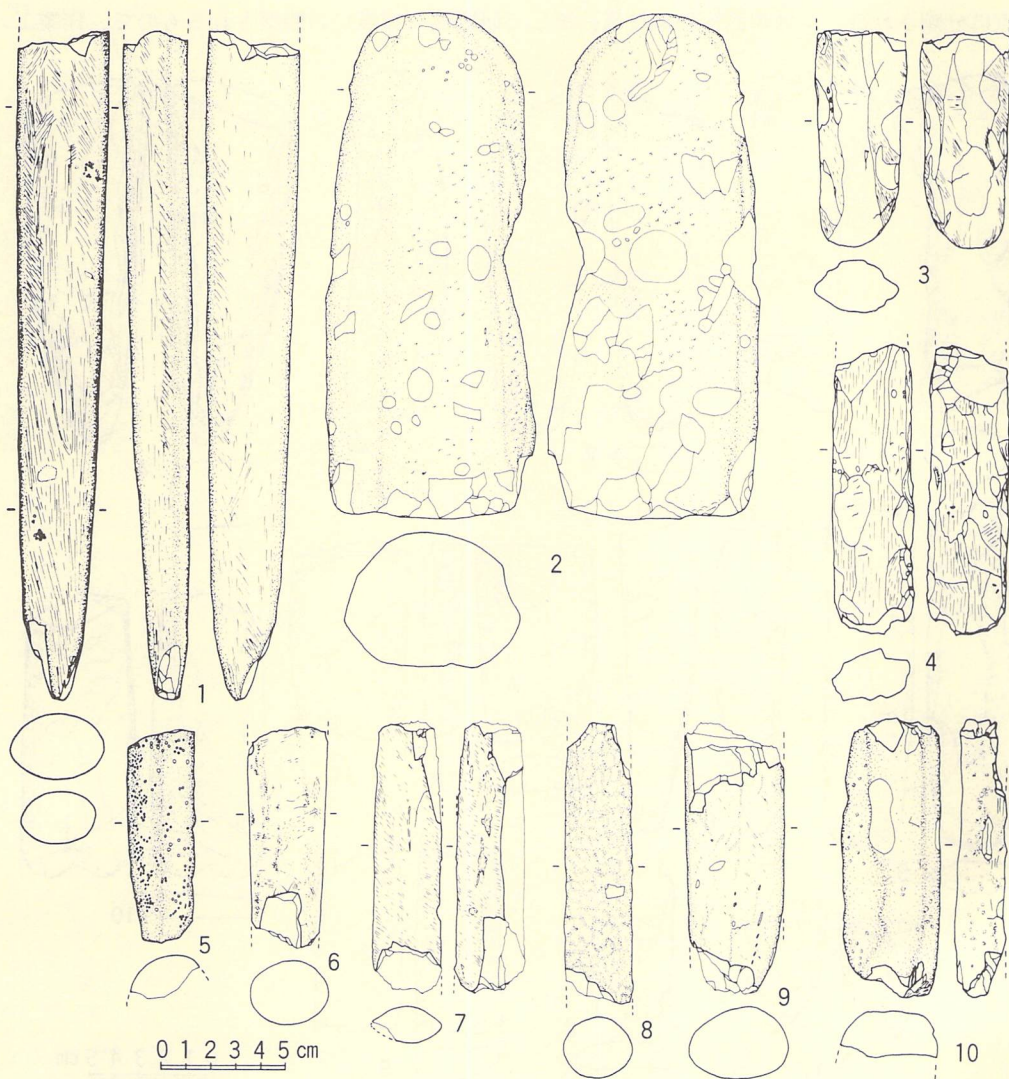
第53図 石皿、砥石

砥石（第53図、図版39）

凹石を砥石として転用したもので、表面と側面が使用面である。砥面は長軸方向に対しては凹面を呈し、短軸方向では凸面になっている。使用痕は主に長軸方向であるが、斜め方向のものも認められる。

石棒、石剣（第54.55図、図版37.38）

石棒、石剣は完全な形で発見されたものはない。断面形が円形のを石棒、扁平なものを石剣とした。石棒は胴部7点、先端部3点の10点で、頭部は発見されていない。直径8.6cmの大型のものを含んでいる。胴部は直径2.7~3.9cmのほぼ円形を呈する。先端部は先細りとなるものであるが、1は欠損部をそのまま利用し、3では磨製石斧の刃部のように尖っている。2は



第54図 石棒

幾分細まる程度である。成形痕によっては敲打仕上げ（3点）と、研磨仕上げ（5点）とに分けられる。4、10は粗割痕を残すもので、10が敲打仕上げ、4が研磨仕上げとなっている。なお、5、7の2例は火熱を受けている。

石剣は頭部2点、胴部5点、先端部4点の11点である。頭部は1では鉞の柄のように柄頭が下方に張りみ、3は蕨手刀の柄のように丸く納まるものである。胴部は1、4を除いて、長径3.1~4.7cm、短径0.7~1.6cmの方形が菱形になっている。2、7、9、10の4例は両側縁が両面から研磨されており、明らかに石剣を意識して成形されたものようである。先端部は先細となるが、4、6、11の3例は刀の切先のように尖っている。ただし、6、11は直線部を刃部とし、彎曲する側を峰としている。このうち、6、11は1側縁に片面加工の刃部が形成されており刀を意図したものとみられる。仕上げ痕跡では敲打痕をもつもの4点、研磨痕をもつもの7点に分類される。1は粗割後の敲打痕、そして研磨痕（擦痕）の観察されるもので、作業工



第55図 石 剣

程を追うことができる。なお、粗割痕を残すものは7点の多きに達する。

独鈷石状石製品 (第56図、図版39)

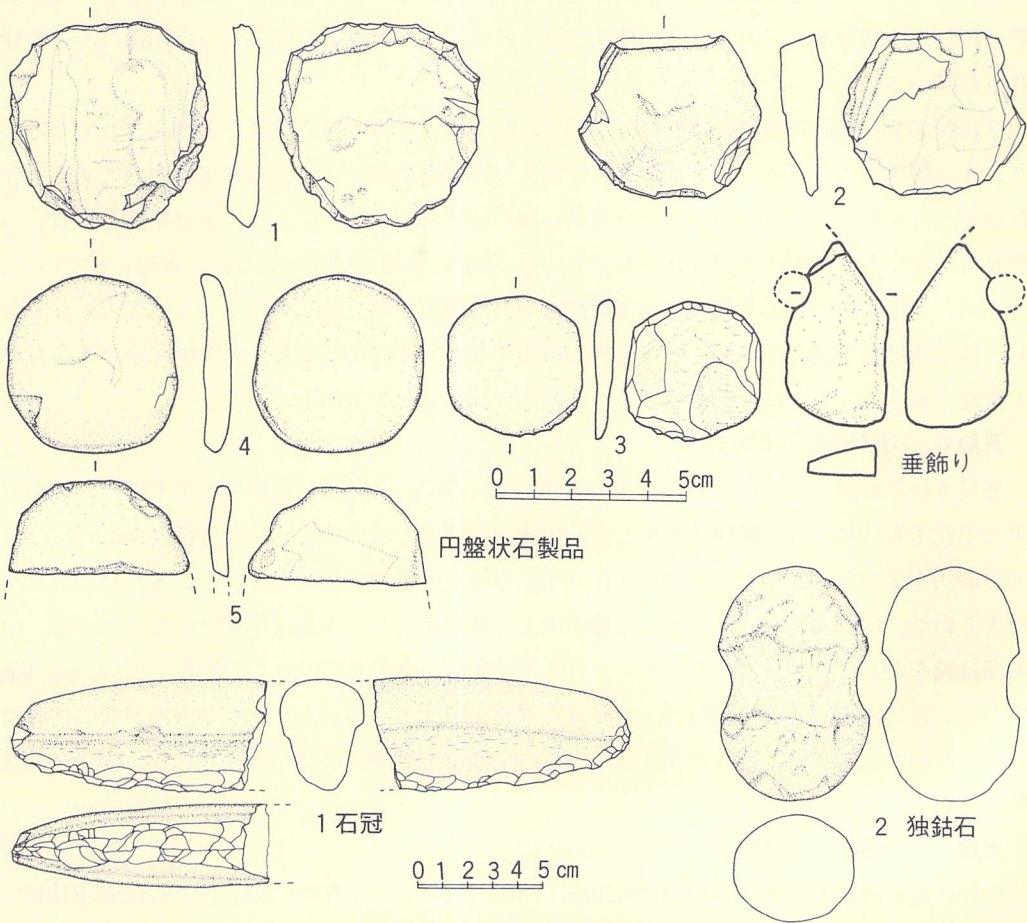
両頭石斧のように中央部に溝が巡っている。直径6cm、長さ9.5cmで、中央部の抉れ部分は直径4.6~4.9cmである。両端部は丸く納まり、溝の外側の節は存在しない。

石冠 (第56図、図版39)

『石器の基礎知識III』の石冠No.2に酷似するもので、「石鋸状石冠」と呼ばれるものである(秋田、平鹿遺跡)。上端部は丸く成形され、上半と下半との境には小さな段もっている。下半は先端部に向って薄くなっているが、下端は転用によるものか敲打による刃部が形成されている。中央で折損している。

円盤状石製品 (第56図、図版39)

破損品1点(4)を含めて5点である。扁平な原石の周縁部を打欠いて円形に成形したものである。直径3.6~5.4cmで、重さは9.5~39.5gである。成形には両面から打撃加工したもので、3、4の2例はその後敲きつぶしや研磨痕が認められる。前者は丁寧な仕上げとなっている。



第56図 その他石製品

垂飾り（第56図、図版39）

块状耳飾様を呈しているが、加工が粗雑であり、やや大き目である。残存部の長さが4.8cm、幅が2.7cmである。厚さは0.8cmで、内側に向かって薄くなっている。裏面は平坦で、上部に直径1.0cmほどの円孔をもつ。

3. 土偶・土製品

土偶（第57図、図版40.41）

発見された土偶は8点である。完全なものではなく頭部1、腕部1、腰部2、脚部1、足3である。1は頭部で、顔面が斜め下方に突き出して全体的には前後に展開している。頭髪は上半が欠損しているが、下半は縦線が引かれて表出されている。鼻は中央にあって高く、下端に1個の鼻孔をもつ。眉毛は鼻に続く隆帯に小さな刻みを施して表現されている。その下の目は大きく誇張されており遮光器を装着したようにもみえる。眉毛と同様の隆帯に刻み目からなり、沈線によって上下に2分されている。耳朶は斜め下方に垂下し穿孔されている。なお、この頭部は差し込み式となっており、芯が棒状に造られている。また、前頭部から後頭部にかけて穿孔されている。

2は腕部で、ヤッコ風に横に伸ばした形をなす。上下に2本1組の沈線で文様化されている。3、4は腰部とみられるもので、前者は沈線及び刺突文が施され後者は刺突文のみである。5は脚部とみられるもので、小さな刺突文が全面に施されている。6、7、8は足部である。いずれも前後左右に突出する円板状をなすもので、前側には刻み付けによる指が表現されている。

なお、1は顔面が斜め下に突き出す形態をなし、眉毛が鼻に続く隆帯によって表現されるなど、後期的様相を呈している。また刻目の多用等によっては後期後葉から晩期にかけてのものと推測される。3～8は中空土偶であり、晩期に属するものであろう。

耳飾り（第58図、図版41）

発見された耳飾りは4点である。9は直径3.5cm、高さ2.7cmの円筒状をなすもので、上面中央に小孔をもっている。側縁は僅かに凹んで耳かかりとなっている。10は直径2.9cm、高さ2.1cmの環状を呈するものである。薄手の作りで、全面に赤色顔料が塗布されている。11は栓状をなすもので、中央に貫通孔をもつ。上端が大きな球面をなし、下端は先細りとなっている。中央部は段をなしてくびれている。無文で全面赤色顔料が塗布されている。直径、高さとも2.1cmである。12は直径1.4cm、高さ1.2cmの小さな環状を呈するものである。上端内面が受口状の段をなしており、上縁には刻みが施されている。全面に赤色顔料が塗布されている。いずれも晩期に属するものであろう。

土錘（第58図、図版41）

いわゆる有溝土錘である。貝鳥貝塚CIII式に相当するもので、直径1.8cm、長さ5.1cmの円筒に、

番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石	質	備考	番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石	質	備考
石鏃																	
1	C9-II	1.8	1.4	0.4	0.5	淡緑色珪質凝灰岩			24	C9-II	(1.4)	1.8	0.2	0.3	淡緑色珪質凝灰岩		
2	C10-II	2.1	(1.1)	0.4	0.35	輝緑凝灰岩			25	C11-I	(1.8)	(1.4)	0.3	0.3	〃		タール
3	C10-I住	1.7	1.3	0.3	0.4	淡緑色珪質凝灰岩			26	C9-II	1.9	(1.5)	0.4	0.55	凝灰質珪質泥岩		
4	C9-II	(1.8)	(1.0)	0.3	0.33	輝緑凝灰岩質チャート			27	C10-I	2.1	1.3	0.4	0.5	淡緑色珪質凝灰岩		
5	C10-II	1.8	1.3	0.3	0.6	粘板岩			28	C11-II	(1.7)	(1.3)	0.4	0.6	砂質粘板岩		
6	C9-II	(2.0)	1.3	0.3	0.45	〃			29	C10-II	2.3	(1.3)	0.3	0.6	凝灰質珪質泥岩		タール
7	C10-I	(1.4)	(1.1)	0.3	0.4	淡緑色珪質凝灰岩		タール	30	C3-I	2.5	1.6	0.3	0.4	〃		
8	C10-I	(2.0)	1.2	0.4	0.75	〃			31	C8-I住	(2.2)	1.7	0.3	0.55	淡緑色珪質凝灰岩		タール
9	C10-II	1.9	1.3	0.4	0.85	砂質粘板岩			32	C10-I	(1.6)	(1.4)	0.2	0.3	輝緑凝灰岩		
10	C10-I	1.9	(1.3)	0.4	0.6	玉髓			33	C9-II	1.9	(1.3)	0.3	0.3	凝灰質珪質泥岩		
11	C10-II	1.7	(1.3)	0.3	0.6	輝緑凝灰岩			34	C8-I住	(1.7)	1.7	0.2	0.3	粘板岩		
12	C11-I	1.2	(1.0)	0.3	0.3	玉髓			35	C10-II	1.9	(1.4)	0.3	0.35	輝緑凝灰岩		タール
13	C11-I	2.2	1.7	0.4	1.2	粘板岩			36	C8-I住	2.4	(1.5)	0.2	0.45	凝灰質珪質泥岩		
14	D1-I	3.1	1.5	0.4	1.4	〃			37	C9-II	2.0	(1.6)	0.5	0.8	輝緑凝灰岩		
15	D4、5-深	2.7	1.4	0.5	1.1	珪質泥岩			38	C10-I住	2.2	2.1	0.5	1.5	〃		
16	C12-II	3.2	0.9	0.5	1.1	粘板岩			39	C10-I	(1.9)	1.4	0.3	0.7	砂質粘板岩		
17	C11-II	(2.6)	1.1	0.5	1.4	〃			40	C9-II	1.8	1.4	0.5	1.2	チャート質粘板岩		
18	C10-II	2.2	(0.9)	0.4	0.35	チャート質粘板岩			41	C4-I	(2.0)	1.6	0.3	0.72	玉髓		
19	C10-I	2.1	0.6	0.5	0.6	粘板岩			42	C8-I土壌	3.4	(1.9)	0.5	1.8	珪質泥岩		
20	C10-I	3.1	1.2	0.7	2.4	砂質粘板岩			43	B15-I	3.3	1.7	0.6	2.95	淡緑色珪質凝灰岩		タール
21	C10-I	3.2	1.4	0.7	2.3	粘板岩			44	C9-I	2.8	2.0	0.8	3.45	粘板岩		
22	C9-II	2.7	1.4	0.5	1.7	輝緑凝灰岩質チャート		タール	45	C11-表土	2.7	2.3	1.0	4.95	チャート質粘板岩		
23	C8-I	1.4	1.5	0.3	0.45	黒曜石											

石錐

1	C10-I	(4.2)	2.7	0.9	4.1	凝灰質珪質泥岩			5	C10-II	(1.0)	0.6	0.3	-	淡緑色珪質凝灰岩		
2	C10-I	(2.0)	2.2	0.6	1.8	砂質粘板岩			6	C11-II	1.7	1.9	0.4	0.35	〃		
3	C9-II	(1.1)	1.7	0.7	0.45	玉髓			7	C10-I	1.5	1.7	0.4	0.9	輝緑凝灰岩		
4	C9-II	(2.8)	1.5	0.5	1.6	輝緑凝灰岩質チャート			8	C5-I	2.6	3.1	1.0	6.3	淡緑色珪質凝灰岩		

種器類

1	C2-I	8.2	2.3	0.7	15.022	凝灰質珪質泥岩			23	D1-I	2.8	2.3	1.0	5.84	淡緑色珪質凝灰岩		
2	C11-I	7.2	4.8	0.8	24.16	〃			24	C10-II	3.2	2.6	1.2	9.4	凝灰質珪質泥岩		
3	C8-I住	3.0	(2.4)	1.0	5.7	粘板岩			25	C10-II	2.0	2.6	0.6		輝緑凝灰岩質チャート		
4	C9-I	(2.2)	3.3	1.1	6.19	チャート質粘板岩			26	C10-II	1.2	2.5	0.5		珪質泥岩		
5	C8-I土壌	1.6	2.0	0.4	1.3	輝緑凝灰岩			27	C10-II	(1.3)	(2.1)	0.5		凝灰質珪質泥岩		
6	B15-I	2.4	2.1	0.8	4.88	〃			28	C10-II	1.5	2.2	0.4		淡緑色珪質凝灰岩		
7	C4-I	2.7	2.1	0.7	4.46	凝灰質珪質泥岩			29	C10-I	(1.6)	(1.3)	0.3		粘板岩		
8	C10-I住	1.2	1.5	0.4	0.6	珪質泥岩			30	D1-I	1.5	2.3	0.4	0.98	淡緑色珪質凝灰岩		
9	C3-I	3.9	2.8	0.7	3.15	凝灰質硬質泥岩			31	C10-II	1.6	2.1	0.4		〃		
10	C8-I住(北半)	2.3	5.4	1.0	9.29	凝灰質珪質泥岩			32	C10-I住	2.1	1.4	0.8		凝灰質珪質泥岩		
11	C10-II	(2.1)	3.7	0.3	2.1	珪質泥岩			33	C9-II	(1.1)	(1.7)	0.5		玉髓		
12	C10-I住	(1.2)	(2.6)	0.6		凝灰質珪質泥岩			34	C10-I	(0.8)	(1.8)	0.3		粘板岩		
13	B15-I土壌(埋土)	1.9	3.0	0.9	3.68	淡緑色珪質凝灰岩			35	C8-I	(0.8)	(2.0)	0.6		玉髓		
14	C10-I土壌	3.4	2.0	0.8					36	C10-I	2.1	(0.8)	0.2		珪質泥岩		
15	C10-I住	(3.6)	2.6	1.3	11.56	珪質泥岩			37	C10-I	(1.2)	1.1	0.5	0.44	輝緑凝灰岩質チャート		
16	C9-I	4.4	(2.6)	1.6	13.75	粘板岩			38	C10-II	(2.2)	(3.6)	1.1	4.3	粘板岩		
17	C11-II	4.9	4.0	0.7	13.5	凝灰質硬質泥岩			39	C8-I住(南半)	3.2	2.4	1.3	9.2	珪質泥岩		
18	C8-I	6.2	4.2	1.3	39.45	砂質粘板岩			40	C10-II	(1.3)	2.3	0.5	1.72	淡緑色珪質凝灰岩		
19	C10-I	5.2	4.4	1.5	28.2	〃			41	C8-I住(南半)	2.8	(1.7)	0.9	3.58	凝灰質珪質泥岩		
20	C10-II	4.3	3.0	1.3		〃			42	C4-I	2.7	1.7	1.0	2.6	淡緑色珪質凝灰岩		
21	C9-I	(4.2)	5.9	1.8	26	〃			43	C11-I	2.1	1.2	0.7	1.72	〃		
22	B、C深堀り	4.5	1.9	0.6	5.01	〃											

磨製石斧

1	B14-I	15.5	4.5	3.5	350	粘板岩ホルンフェルス			9	C9-I	(9.0)	4.6	2.8	180	粘板岩		
2	C6-I	(13.1)	4.6	2.7	140	硬砂岩			10	B15-I	(9.9)	4.2	1.8	80	〃		
3	C2-I	11.5	4.5	2.8	170	〃			11	C9-I	(6.4)	5.5	2.7	160	硬砂岩		
4	C2-I	10.1	4.9	2.7	190	石英斑岩			12	C3-I	8.9	4.6	2.7	180	〃		
5	C7-表	10.8	5.0	2.5	180	砂質粘板岩			13	D1-表	9.7	5.1	2.1	190	凝灰質硬砂岩		
6	C11-I	(5.6)	3.4	2.0	40	淡緑色極細粒凝灰岩			14	B15-I	10.0	5.9	2.7	240	硬砂岩		
7	C4-I	(6.7)	4.0	2.5	100	凝灰質硬砂岩			15	B15-I	11.9	6.0	3.2	340	〃		
8	C11-I	(6.8)	4.3	2.3	110	角閃岩			16	C11-I	(5.7)	4.3	2.4	70	凝灰質硬砂岩		

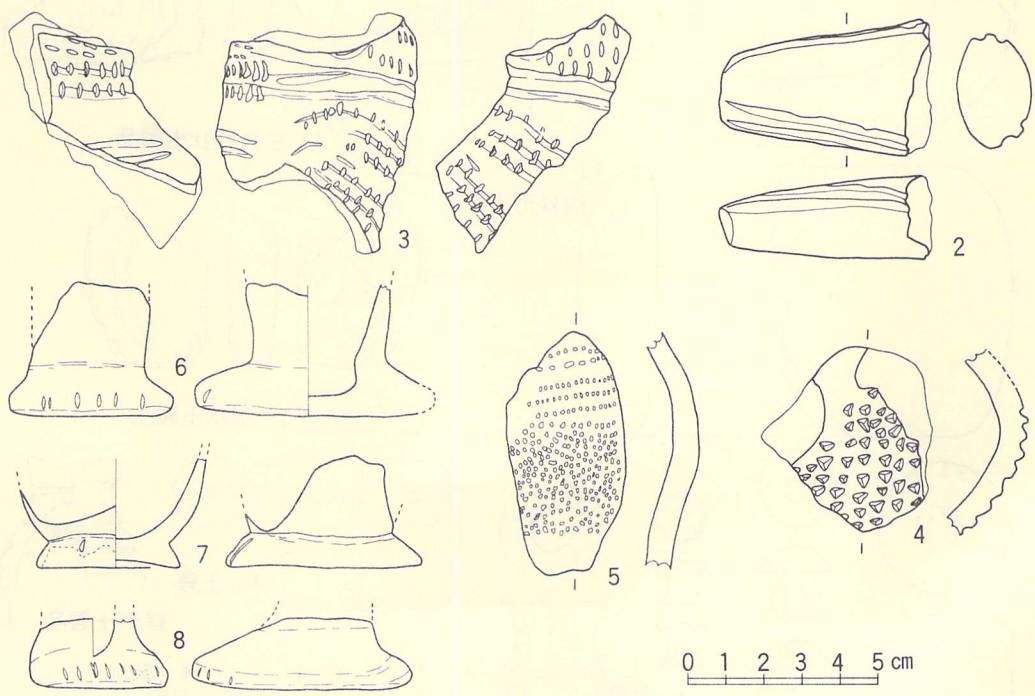
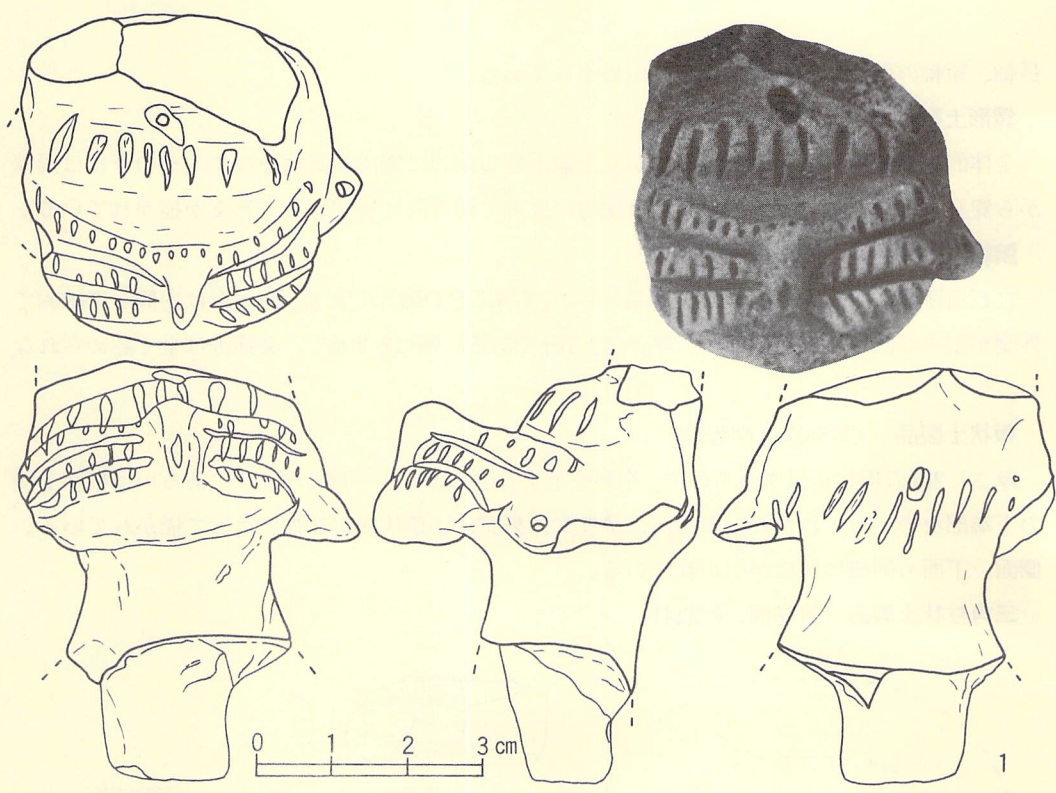
打製石斧

1	C3-表	11.3	6.4	3.4	200	砂質粘板岩			5	C10-I	10.1	5.3	1.6	70	砂質粘板岩		
2	C3-I	11.1	5.8	3.1	180	硬砂岩			6	C11-I	(8.9)	4.6	2.7	160	凝灰質硬砂岩		
3	C10-I	10.4	4.7	3.4	160	玻璃質流紋岩			7	C2-I	(5.9)	5.9	2.0	89	粘板岩		
4	D1-表	11.9	4.6	2.1	180	硬砂岩											

片刃、両刃石器

1	C5-I	12.4	11.6	5.6	880	凝灰質硬砂岩			5	C11-I	6.9	8.1	3.0	140	粘板岩		
2	B10-13-I	9.7	12.4	2.4	300	凝灰質粘板岩			6	C10-I	7.4	6.0	1.7	100	凝灰質粘板岩		
3	C5-I	8.3	6.5	4.1	220	〃			7	C10-I	6.0	5.0	1.3	50	〃		
4	C4-I	8.0	9.0	2.9	200	粘板岩											

番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
磨石															
1	B7・8サブトレ	8.7	7.5	6.5	600	角閃黒雲母花崗岩		40	C9-I	11.0	6.7	5.4	600	角閃黒雲母花崗岩	
2	B10~13-I	11.3	(7.7)	6.3	(90)	〃		41	C9-I	9.2	7.3	5.4	490	〃	
3	B10~13-I	12.3	6.3	4.7	540	〃		42	C9-I	(13.0)	8.5	6.3	850	〃	
4	B12-溝	11.2	9.3	3.8	730	〃		43	C9-I	(4.7)	8.4	4.8	240	斜長石★岩	
5	B15-I	10.3	8.6	5.6	620	〃		44	C9-I	(6.5)	9.5	6.5	520	〃	
6	B15-2 pit	9.8	8.2	5.3	600	半花崗岩		45	C9-I	6.8	6.3	4.3	270	角閃黒雲母花崗岩	
7	B16-I	6.7	6.1	4.7	240	角閃黒雲母花崗岩		46	C10-表	10.3	9.3	6.1	870	〃	
8	B-土壇	8.3	6.7	6.5	490	半花崗岩		47	C10-表	10.5	8.7	5.5	750	〃	
9	B-上げ土	7.3	6.2	4.1	280	角閃黒雲母花崗岩		48	C10-I	8.0	6.9	5.1	430	〃	
10	C2-I	10.2	7.8	6.2	700	半花崗岩		49	C10-I	(13.4)	9.1	6.2	*1110	斜長石★岩	
11	C2-I	7.9	6.9	5.3	410	角閃黒雲母花崗岩		50	C10-I	(8.3)	7.4	6.4	470	角閃黒雲母花崗岩	
12	C2-I	9.4	9.2	6.3	780	〃		51	C10-I	13.1	9.7	6.7	1300	〃	
13	C3-表	11.8	6.9	6.2	700	〃		52	C10-I	(8.2)	8.0	6.9	590	硬砂岩	
14	C3-I	8.5	7.0	4.1	360	〃		53	C10-I	(5.9)	6.5	4.1	240	角閃黒雲母花崗岩	
15	C3-I	14.0	9.0	6.7	*1300	〃		54	C11-I	5.3	4.1	3.2	100	凝灰質硬砂岩	
16	C3-I	9.6	8.2	5.4	620	〃		55	C11-表	15.7	9.9	7.2	*1780	角閃黒雲母花崗岩	
17	C3-I	6.0	5.9	5.1	260	斜長石★岩		56	C11-表	7.6	7.3	5.0	390	〃	
18	C4-I	6.6	5.7	4.3	220	角閃黒雲母花崗岩		57	C11-表	9.0	6.4	5.8	460	〃	
19	C4-I	9.2	8.7	6.7	760	〃		58	C11-I	13.4	9.0	6.8	1240	凝灰質硬砂岩	
20	C4-I	9.4	8.2	(6.4)	(690)	〃		59	C11-I	11.8	7.6	4.8	680	角閃黒雲母花崗岩紅柄付着	
21	C4-I	6.8	3.8	3.3	140	閃緑岩		60	C11-I	11.0	7.7	6.8	840	〃	
22	C5-I	11.0	8.0	5.6	720	角閃黒雲母花崗岩		61	C11-I	5.5	5.2	4.2	200	安山岩	
23	C5-I	9.4	9.8	7.8	*1,040	〃		62	C11-I	11.5	7.3	4.9	640	角閃黒雲母花崗岩	
24	C5-I	9.9	7.9	6.1	700	〃		63	C11-I	6.8	5.7	3.6	200	半花崗岩	
25	C5-I	(9.0)	9.1	6.7	(820)	斜長石★岩		64	C11-I	9.1	5.4	2.0	180	硬砂岩	
26	C6-表	8.7	7.3	4.4	410	安山岩		65	C11-I	7.5	5.1	3.5	200	角閃黒雲母花崗岩	
27	C6-I	7.0	5.8	5.5	300	斜長石★岩		66	C11-I	13.2	8.8	6.1	*1070	〃	
28	C6-I	(13.4)	8.2	5.7	(910)	角閃黒雲母花崗岩		67	C11-I	13.2	10.2	8.7	1700	〃	
29	C6-I	11.3	11.2	8.0	*1360	〃		68	C11-I	8.9	6.9	4.4	420	〃	
30	C6-I	13.2	10.2	7.9	1570	〃		69	C11-II	10.0	7.5	5.0	530	〃	
31	C7-I	6.0	5.1	2.9	130	半花崗岩		70	C12-表	12.4	9.4	7.5	1230	〃	
32	C7-I	5.4	4.7	4.1	140	角閃黒雲母花崗岩		71	C12-I	12.8	8.7	6.9	1090	〃	
33	C7-I	(10.7)	7.6	6.0	660	〃		72	C12-I	12.1	9.0	6.5	1040	〃	
34	C7-I	11.3	8.6	5.7	840	〃		73	C12-I	8.5	7.2	6.4	500	〃	
35	C8-表	12.6	9.0	5.9	*1040	〃		74	D1-I	6.7	6.3	4.2	230	〃	
36	C8-表	13.9	8.5	6.7	1140	〃		75	D1-I	8.7	6.2	3.9	220	〃	
37	C8-住-2	11.5	8.2	6.9	900	〃		76	D1-I	13.6	8.3	5.3	900	〃	
38	C9-I	12.4	9.3	5.5	930	〃		77	D1・2-I	7.2	6.3	5.6	377	安山岩	
39	C9-I	10.4	6.8	3.7	400	〃		78	D2-I	9.2	9.0	6.4	740	角閃黒雲母花崗岩	
凹石															
1	C2-I	15.5	8.1	6.4	*1230	角閃黒雲母花崗岩		3	C5-I	(9.7)	8.2	3.4	240	凝灰質硬砂岩	
2	C2-I	14.3	5.9	3.6	460	粘板岩ホルンフェルス		4	B15-I	11.5	8.0	4.2	560	半花崗岩	
石皿															
1	C9-I					流紋岩質角礫凝灰岩		3	C11-I					凝灰質硬砂岩	
1	C10-I					〃		4	C7-I					白色細粒凝灰岩	
1	C9-I					〃		5	C7-I					〃	
2	C8-I					〃									
砥石															
1	B13-I	13.5	8.6	3.9	380	硬砂岩		2	B13-I					凝灰質硬砂岩	
石楯															
1	C11-I	(27.0)	3.7	2.7	380	凝灰質粘板岩		6	C2-I	(8.9)	3.2	2.7	80	粘板岩	
2	C12-I	20.1	8.4	6.5	1,360	硬砂岩		7	C11-I	(11.0)	2.8	1.6	60	〃	
3	C10-I	(8.6)	3.6	2.2	90	粘板岩		8	C4-I	(11.4)	2.7	2.6	120	粘板岩ホルンフェルス	
4	D1-I	(11.7)	3.2	2.0	100	〃		9	C11-I	(10.8)	3.9	3.0	160	粘板岩	
5	C11-II	8.5	(2.8)	(1.8)	40	粘板岩ホルンフェルス		10	C4-表土	11.3	3.9	(1.9)	140	〃	
石剣															
1	C5-I	(13.5)	3.7	2.7	200	粘板岩ホルンフェルス		6	C11-I	(12.8)	3.1	0.7	40	粘板岩	
2	C11-I	(14.1)	4.0	1.1	100	〃		7	C8-I	7.9	4.7	1.6	800	粘板岩ホルンフェルス	
3	C区掘り上げ土	(15.2)	3.8	(1.7)	120	〃		8	C10-I	(6.4)	3.7	(1.2)	40	粘板岩	
4	C11-I	(14.6)	5.0	2.7	260	〃		9	C5-I	(7.5)	3.5	1.4	60	〃	
5	C地区	(13.9)	3.7	1.5	100	粘板岩		10	B16-I	(11.4)	4.6	1.0	80	〃	
独鈷石															
1	C5-I	9.5	6.0	5.5	440	角閃黒雲母花崗岩		石冠							
								1	C11-I	4.6	10.4	3.4	170	凝灰質硬砂岩	
円盤状石製品															
1	C10-I	5.4	5.2	1.2	39.5	打、凝灰質粘板岩		4	C7-I	4.7	4.4	0.8	24.0	磨、凝灰質硬砂岩	
2	D8・9-I	4.2	4.7	1.2	27.0	〃		5	C3-I	(2.5)	4.7	0.6	10.0	打	〃
3	C10-II	3.6	3.5	0.6	9.5	〃									



第57图 土 偶

長軸、短軸の両方向とも各1条の溝がめぐっている。

鐸形土製品 (第58図、図版41)

全体的に釣鐘状をなすとみられるが、上端が斜め上方に突出し耳状をなす。その下には両端から穿孔された貫通孔をもつ。文様は沈線によって横方向に展開する方形文が描かれている。

腕輪形土製品 (第58図、図版41)

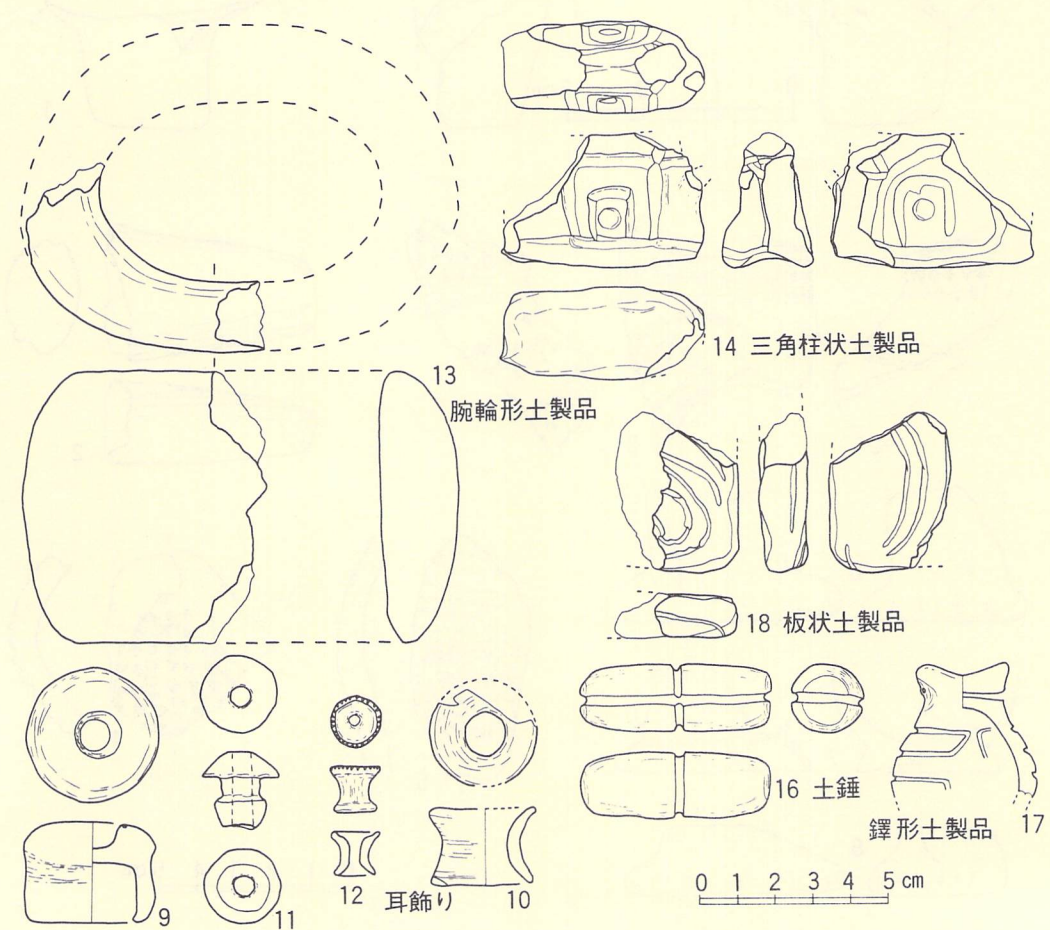
立石遺跡例にならって腕輪形土製品とした。1/4ほどの破片である。断面形は内側が直線的で外側が脹らむ凸レンズ状をなす。厚さは2.1cmである。幅は7.2cmで、文様等は全く認められない。

板状土製品 (第58図、図版41)

厚さ1.2cmの板状を呈するもので、矩形を示すもののコーナー部分である。あるいは板状土偶の下端部なのかもしれない。表面には渦巻文、裏面には弧状文が沈線によって描かれている。側面、下面も同様に沈線が引かれている。

三角柱状土製品 (第58図、図版41)

三角柱状土製品は、断面が三角形を呈するもので、表面には渦巻文、裏面には弧状文が沈線によって描かれている。側面、下面も同様に沈線が引かれている。



第58図 土製品



第59図 円盤状土製品

底部幅が2.4cm、上端部幅が1.0cmほどの三角柱状を呈するものである。長さは下底面で5.5cmを計測する。上面及び右側縁には突起の剝落痕を残している。文様は底面近くを1周する沈線と表裏面とも2重の方形文が描かれ、その中央には貫通孔が穿たれている。

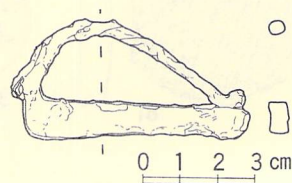
円盤状土製品 (第59図、図版42.43)

121点である。深鉢形土器の土器片を円盤状に加工したものである。基本的には円形であるが、中には方形に近いものや、長円形に近いものなども含まれている。研磨されたもの(73点、60.3%)、と打ち欠きによるもの(48点、39.7%)に大別できる。土器片の利用形態によっては口縁部2点、底部5点で、大多数のもの(94.2%)は体部破片である。文様構成では縄文(71点)、撚糸文(11点)、網目文(3点)、無文(6点)など地文のみのものが75.2%で、磨消縄文(16点)、沈線文(8点)など文様帯をもつものは19.8%である。文様によっては大木10式とみられる1点(60)を除いて後期初頭とみられるものである。また地文においても撚糸文、網目文などが含まれており後期初頭の所産の可能性が大である。なお、70、124の2点は欠損しているが、穿孔の痕跡を残すものである。大きさは長径、直径が2.5~6.5cmで、3.1~4.4cmに集中し(70.3%)、重さでは4~57gで、6~19gに74.8%が集中している。長径と重量の相関関係は大きいものほど長径に比して重くなる傾向がある。

(4)その他の遺物 (第60.61図、図版44)

以上の他には鉄製品、鉄滓、鞆羽口、骨製品、陶磁器、自然遺物等がある。鉄製品は火灯金1点である。幅1cm、長さ6cmの板状の火打部と弧状の把手からなる。把手は端部から始まってねじれた釣状をなし、他端部に接して巻いている。鉄滓は大小合せて123点、総重量は約60kgである。完全な形で遺存しているものは僅か3点で、大きさは10×8.6cm、厚さ4.3cmの碗形鉄滓を最大とする。重さは390gである。形状は碗形、あるいは板状をなすものが多く、上面が熔融状態をなし、下面には砂粒が付着している。全体的に金属質に富んで、どっしりとした量感をもつものと、ガラス質でコークス状の粗鬆な小孔を多くもって比較的軽量なものともみられる。

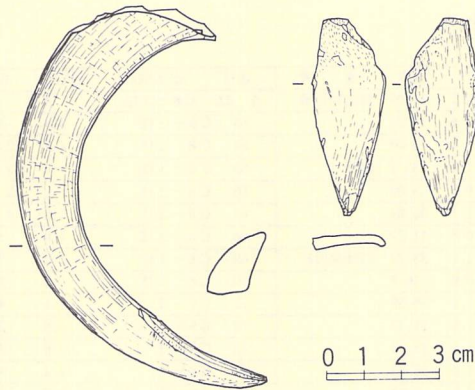
羽口は15点の発見である。残存部から外径が9.0cm、内径が25cm前後とみられる。長さは最大17cmを計測し、かなり大きなものようである。なお、外面には3~3.5cm間融に5mm前後の縦溝をもっている。色調は内面が赤褐色を呈し、外面は環元化されて青灰色になっている。骨製品は先端部を削って尖らせている。幅が1.8cm、長さが5.2cmで、厚さが3mmである。表面の基部近く1/3ほどが磨耗しているようである。陶磁器は26点である。伊万里系染付、銅板絵付等であり、近世末以降の新しいものである。自然遺物には馬の歯(2点)、猪の牙、マガキなどの貝殻(9点)、二次火熱を受けた骨片(5点)等がある。



第60図 鉄製品

第2表 円盤状土製品計測表

番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	B15-2 pit	3.6	3.8	0.7	10.07	炭化物付着	A 62	C8-1住	4.0	4.4	0.8	16.7	
2	B15-2 pit	4.4	4.1	0.6	15.06		63	C8-1住	3.4	3.3	0.9	11.55	
3	B16-I	3.3	3.3	0.7	10.06		64	C8-1住	4.2	(3.0)	0.7	8.7	
4	B16-I	5.6	5.4	1.5	53.7	底部	65	C8-1住	4.6	(2.3)	0.6	8.1	穿孔
5	B16-I	2.6	2.7	0.6	5.09		66	C8-1住	3.2	(2.4)	0.8	7.0	
6	B16-I	5.8	5.2	1.1	35.04		67	C8-1住	5.0	(4.0)	0.9	25.09	
7	C2-I	3.2	3.5	0.8	11.27		68	C8-1住	4.0	4.5	0.8	18.3	
8	C2-I	5.2	4.8	1.1	33.34	口縁部付近	69	C8-1住	2.2	3.1	0.7	9.9	
9	C2-I	4.0	3.6	0.9	16.1		70	C8-1住	3.3	3.4	0.8	11.75	
10	C2-I	6.5	6.2	1.1	56.59		71	C9-I	4.1	4.0	0.9	18.85	
11	C2-I	3.2	3.5	1.0	11.45		72	C9-I	3.6	3.7	1.0	16.2	炭化物付着
12	C3-I	3.9	3.6	1.1	13.95		73	C9-I	3.5	3.7	0.5	8.95	
13	C3-I	4.1	4.4	1.0	25.03		74	C9-I	4.4	4.4	0.6	13.55	
14	C3-I	3.4	3.3	0.6	6.74		75	C9-I	3.7	3.6	0.6	9.8	
15	C3-I	3.5	3.4	0.9	12.75	炭化物付着	76	C9-I	4.8	4.3	0.9	25.04	
16	C3-I	3.6	3.7	1.0	16.17		77	C9-I	4.1	4.0	0.9	18.4	
17	C3-I	3.2	3.3	0.7	10.02		78	C9-I	3.0	2.7	0.7	7.1	
18	C3-I	4.0	3.8	0.8	12.14		79	C9-II	4.0	4.4	0.9	19.35	
19	C3-I	5.7	5.8	1.1	40.06		80	C9-II	5.3	5.3	1.5	37.65	
20	C3-I	3.4	4.8	1.1	28.9		81	C9-II	4.3	3.9	0.9	19.5	
21	C3-I	3.1	3.3	0.5	8.15		82	C9-II	4.6	4.4	1.0	24.75	
22	C3-I	4.1	4.5	0.7	15.08	炭化物付着	83	C9-II	3.9	4.5	0.8	14.55	
23	C3-I	3.5	3.9	0.8	12.35		84	C9-II	3.2	3.5	0.7	8.55	
24	C3-I	4.4	5.4	1.1	33.95		85	C9-7土壌	3.1	3.3	0.9	10.07	
25	C3-I	3.5	4.0	1.0	17.0		86	C9-7土壌	2.2	2.8	0.8	5.06	
26	C4-I	3.3	3.7	0.7	12.7		87	C10-I	4.1	4.3	0.8	17.4	
27	C4-I	3.3	3.6	1.0	14.57		88	C10-I	4.5	4.4	0.9	20.08	
28	C4-I	4.8	5.8	0.9	33.9		89	C10-I	3.2	3.6	0.6	9.7	
29	C4-I	3.2	3.4	0.9	12.35		90	C10-I	3.3	3.5	0.6	7.9	
30	C5-I	3.6	3.3	0.8	12.09	底部	91	C10-I	2.9	3.4	0.7	8.35	
31	C7-I	3.2	4.5	0.6	11.8		92	C10-II	3.5	3.4	0.8	9.1	
32	C7-I	2.7	2.9	0.7	7.14		93	C10-II	3.6	3.9	0.6	10.07	炭化物付着
33	C7-I	5.5	4.2	0.9	25.05	炭化物付着	94	C10-II	3.4	3.3	0.7	10.05	
34	C7-I	3.2	3.7	0.9	12.8		95	C10-埋設土器	2.9	2.6	0.6	5.05	炭化物付着
35	C7-I	4.5	4.7	0.7	20.08		96	C10-I	4.5	5.0	0.9	23.8	
36	C8-I	3.4	3.5	0.7	11.63		97	C10-I	4.6	5.2	0.6	18.75	
37	C8-I	4.4	4.5	0.8	19.74		98	C10-I	4.1	4.0	0.6	13.5	
38	C8-I	4.2	4.2	1.1	21.37		99	C10-I	3.7	3.5	0.9	14.15	
39	C8-I	4.3	5.0	0.7	21.52		100	C10-I	3.5	4.2	0.8	13.6	
40	C8-I	3.8	3.9	0.6	13.1		101	C10-I	3.3	3.8	0.6	8.8	
41	C8-I	4.9	5.3	0.8	26.81		102	C10-II	3.7	4.0	0.7	11.7	
42	C8-I	3.0	3.1	0.8	9.75		103	C10-II	4.5	3.9	1.1	13.9	
43	C8-I	4.3	4.5	0.7	16.3		104	C10-II	4.0	4.2	0.9	18.0	
44	C8-I	4.0	4.1	0.8	14.7	炭化物付着	105	C10-II	3.6	(2.9)	0.9	11.35	
45	C8-I	4.4	(2.8)	0.9	15.7		106	C10-2土壌	3.3	3.4	1.0	11.7	
46	C8-I	3.7	4.2	0.7	13.5		107	C10-2土壌	3.3	(2.4)	0.8	6.6	口縁部
47	C8-I	4.2	4.0	0.9	15.09		108	C10-2土壌	2.6	2.8	0.5	4.8	体~底部
48	C8-I	4.2	(2.3)	0.9	9.65		109	C10-II	2.8	3.4	0.7	7.35	
49	C8-II	3.7	3.8	0.7	11.6		110	C11-I	4.1	4.3	0.5	11.7	
50	C8-I土壌	3.0	3.2	1.0	10.02		111	C11-1土壌	3.4	3.9	0.7	11.85	
51	C8-I土壌	4.0	4.8	0.8	19.8		112	C12-I	3.9	(2.9)	0.8	9.1	
52	C8-I土壌	4.6	5.1	1.0	28.45	炭化物付着	113	C12-II	2.5	2.8	0.6	5.01	
53	C8-II	4.1	4.8	0.7	18.7		114	D3-I	3.5	3.9	0.9	13.85	
54	C8-II	4.2	4.8	0.8	17.2		115	D8・9-I	4.0	3.8	1.0	18.0	
55	C8-II	3.7	4.3	1.0	23.65	口縁部	116	D8・9-I	4.6	5.5	0.8	24.3	
56	C8-II	3.5	3.3	0.6	7.6		117	D12-I	5.1	5.2	1.4	41.1	底部
57	C8-II	3.1	3.4	0.8	10.07		118	D12-I	3.8	(2.1)	0.6	5.06	穿孔
58	C8-II	(2.9)	3.2	0.8	9.65		119	D地区深堀り	3.0	3.2	1.1	11.7	
59	C8-II	2.6	2.8	0.6	6.3		120	D1-I	3.2	3.1	0.9	10.01	
60	C8-1住	3.4	4.0	0.7	11.55		121	D4-I	2.5	2.4	0.5	3.5	
61	C8-1住	4.0	4.0	0.9	16.2								



第61図 骨製品・自然遺物

(5)C10 竪穴住居跡貯蔵の剥片 (図版45~47)

発見された剥片は57点である。一部表皮を残すものも含まれているが、いずれも目的剥片とみられる。形態は39のように縦に細長いもの(縦長剥片)、28のようにほぼ方形に近いもの(中間形態)、17の如く横に長いもの(横長剥片)などがあり、いずれとも識別しにくいものも少なくない。大きさは縦長剥片が7.3×3.0cm、横長剥片が2.4×6.4cmを最大とし、3.2×2.6cmを最小とする。長さ、幅ともかなりバラツキがみられる。厚さは大きいものほど厚い傾向にあるが、0.8~1.4cmにほとんどのものが含まれる(40点、70%)。

打撃面は自然面を打面とするものが7例(12.3%)、平坦面を打面とするものが36例(63.2%)である。また、打撃面の除去されているものが8例、折断あるいは折損しているものが4例認められる。打撃角度は109°~136°で、32点(76.2%)のものが110°~130°に集中している。作業面の数は1面が8点、2面が15点、3面が14点、4面が10点、5面が2点で、総数130面である。その作業面は、主要剥離面と同一方向から剥離されたものが89面(68.5%)、逆方向から剥離されたものと、90度転移した方向から剥離されたものがそれぞれ18面(13.8%)である。

接合資料は3資料7点で、いずれも目的剥片が接合するものである。接合資料②、③は同一方向から剥離されたもので、先行する剥離も同方向である。これに対し、接合資料①は、3点とも打撃方向が異なる。5、45はちょうど逆方向にあたり、36が90度転移した形を示す。また先行する剥離では5、45がそれぞれ同一方向であり、36が90度転移している。石材は珪質泥岩26、凝灰質珪質泥岩27、細粒凝灰質硬砂岩4で、同一母岩とみられるものが大多数を占めている。

第3表 C10堅穴住居跡貯蔵の剝片計測表

番号	長さ	幅	厚さ	重さ	打面	打撃角	作業面	石材	備考
1	5.2	2.7	1.3	(14.3)	—	除去	2	珪質泥岩	
2	5.4	2.7	0.8	11.6	調整	123	2	凝灰質珪質泥岩	
3	5.7	2.8	1.0	13.2	調整	113	5	凝灰質珪質泥岩	
4	6.0	2.7	0.8	8.5	調整	120	4	凝灰質珪質泥岩	
5	(5.8)	2.6	0.9	(10.9)	—	折損	3	凝灰質珪質泥岩	
6	5.1	3.1	1.0	15.5	調整	132	4	凝灰質珪質泥岩	
7	5.4	3.7	1.0	9.5	調整	117	3	凝灰質珪質泥岩	
8	(4.4)	2.6	1.0	(12.8)	調整	121	2	珪質泥岩	
9	4.8	3.7	0.9	9.8	調整	110	2	凝灰質珪質泥岩	
10	4.6	3.3	1.1	14.1	自然面	114	2	珪質泥岩	
11	4.5	3.5	1.0	17.3	調整	130		珪質泥岩	
12	4.1	4.0	1.3	16.9	調整	136	2	珪質泥岩	
13	4.1	(3.6)	0.9	(11.5)	調整	122	4	凝灰質珪質泥岩	
14	4.5	3.9	1.1	17.2	調整	127	2	珪質泥岩	
15	3.8	3.1	0.4	4.2	調整	120	3	凝灰質珪質泥岩	
16	4.6	3.0	0.5	6.1	調整	109	2	凝灰質珪質泥岩	
17	4.6	3.8	0.9	14.8	調整	119	1	凝灰質珪質泥岩	
18	4.0	2.9	1.5	9.8	調整	121	8	珪質泥岩	
19	4.3	3.0	1.4	14.2	調整	130	3	珪質泥岩	
20	3.5	3.0	0.7	8.3	—	—		凝灰質珪質泥岩	
21	(3.1)	3.4	1.2	(13.2)	—	折損	2	珪質泥岩	
22	5.4	4.8	0.8	16.9	調整	128	4	凝灰質珪質泥岩	
23	(3.4)	4.1	1.1	(12.1)	—	除去		珪質泥岩	
24	3.0	4.0	1.6	10.5	自然面	—	2	珪質泥岩	
25	(4.2)	(4.0)	0.9	(14.0)	調整	129	3	凝灰質珪質泥岩	
26	4.4	3.7	0.8	11.5	自然面	125	2	珪質泥岩	
27	2.6	4.3	0.8	8.0	調整	110	1	珪質泥岩	
28	3.9	4.6	1.1	19.4	自然面	123	4	珪質泥岩	
29	4.0	4.9	0.9	8.7	調整	117	2	凝灰質珪質泥岩	
30	4.9	4.4	1.0	17.9	調整	128	2	凝灰質珪質泥岩	
31	4.2	4.9	1.7	13.2	—	除去	3	珪質泥岩	
32	3.0	5.0	1.8	19.6	自然面	128		珪質泥岩	
33	(4.3)	(5.0)	1.4	(25.4)	—	除去		珪質泥岩	
34	(4.0)	4.9	1.4	(24.8)	調整	117	3	凝灰質珪質泥岩	
35	3.7	4.6	1.1	15.5	調整	131	3	珪質泥岩	
36	3.8	5.1	1.5	26.4	調整	127	3	珪質泥岩	
37	4.0	(5.7)	1.0	23.4	調整	135	3	凝灰質珪質泥岩	
38	4.7	5.5	1.0	25.8	調整	1		珪質泥岩	
39	4.6	5.4	1.2	20.7	調整	127	3	凝灰質珪質泥岩	
40	3.4	6.4	1.4	24.2	—	除去	1	珪質泥岩	
41	3.5	2.7	1.2	(9.4)	—	折損?		珪質泥岩	
42	3.3	2.6	1.6	12.0	—	除去	3	珪質泥岩	
43	(3.1)	(4.3)	1.2	(9.0)	—	折損	1	珪質泥岩	
44	(3.5)	(2.6)	0.6	(5.9)	調整	116	2	凝灰質珪質泥岩	
45	3.7	3.1	1.0	7.9	節理面	131	1	珪質泥岩	
46	2.5	(2.2)	0.5	(1.7)	調整	131		珪質泥岩	
47	2.7	5.0	1.4	14.5	調整	135		細粒凝灰質硬砂岩	
48	(4.2)	3.4	1.2	(12.9)	—	除去	2	細粒凝灰質硬砂岩	
49	7.6	7.4	2.1	100	自然面	120		細粒凝灰質硬砂岩	
50	(9.8)	5.9	2.5	(140)	—	除去	1	細粒凝灰質硬砂岩	
51	4.3	4.6	1.5	19.6	調整	118	4	凝灰質珪質泥岩	
52	5.3	3.4	1.4	17.2	調整	125	4	凝灰質珪質泥岩	
53	6.8	3.1	1.2	21.0	調整	130	3	凝灰質珪質泥岩	
54	4.3	3.6	0.7	7.8	調整	114	4	凝灰質珪質泥岩	
55	4.5	4.0	0.7	14.5	調整	128	4	凝灰質珪質泥岩	
56	7.3	3.0	0.7	10.8	調整	119	5	凝灰質珪質泥岩	
57	4.5	4.3	0.9	11.8	調整	113	4	凝灰質珪質泥岩	

VI ま と め

今次調査は川内遺跡の東西方向を幅3m、長さ約300mについて発掘したものであるが、これはほぼ遺跡の推定される範囲に対して、東西方向のトレンチを設定したことになる。

調査地区では最も標高の高いB地区においては、礎石建物跡や土師器や須恵器の共伴する土壌が検出された。礎石立建物はすべて半間柱があることなどから少なくとも近世後半以降の建物と思われる。

東方向に傾斜する斜面の浜田川側のC地区においては、遺物包含層の下に竪穴住居跡、埋設土器、土壌などが集中して検出された。

このうちC8住居跡は3棟が重複していて建て替えによるものと思われる。一部分の調査であるが計測できた最大径は6.7mもあることから大型住居の可能性はある。時期は縄文時代後期前葉と思われる。

埋設土器は3基検出され、住居跡や土壌と切り合っている。使用された土器はいずれも底部を欠き再利用されたものであった。

土壌は32基検出されている。B地区で7基、C地区で25基であるが、C地区のもの多くの多くは遺構集中地区における検出で、住居跡などと重複している。多くの土壌が礫層を掘り抜いているため形状の整ったものは少ない。時期の判明するものは、中期末～後期初頭が7、後期初頭が5、後期中葉が4、晩期中葉が5であり、浜田川より遠くなるほど古くなる傾向がある。

C地区において住居跡と重複して土壌墓が1基検出されている。人骨の上を土器片で覆ったもので、土器片被覆墓とも称すべきものである。人骨は側臥屈葬か仰臥屈葬と思われる。土器は大洞BC式である。

遺構集中地区を覆うように遺物包含層が見られた。包含層の遺物の出土状況には層序的なものはなく、縄文時代中期から晩期までの遺物が鉄滓、羽口、馬の歯、猪の牙、貝殻などの自然遺物、などとともに一括出土したが、特に、後期初頭と晩期の出土量が多い。

川内遺跡は浜田川流域における主要な遺跡と思われ、縄文時代中期から平安時代までの複合遺跡であるが、主たるものは縄文時代後期～晩期と思われる。遺跡の範囲は広範囲におよぶと思われるが、佐野川による扇状地上から南斜面および南東斜面にかけて、特に標高31～35mの範囲に集中するものと思われる。全体に保存状況は良好で、遺構の密集して検出される地区があるものと考えられる。



A地区



B地区北



B地区北

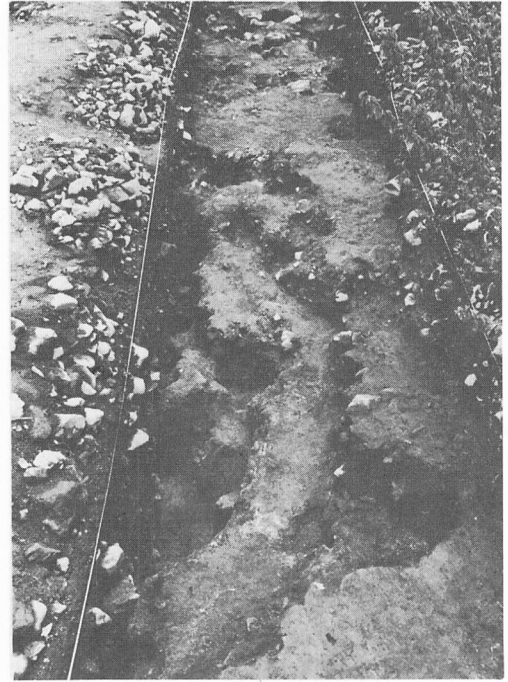


B地区南

図版1 調査区全景(1)



C地区 調査前



C地区



C地区

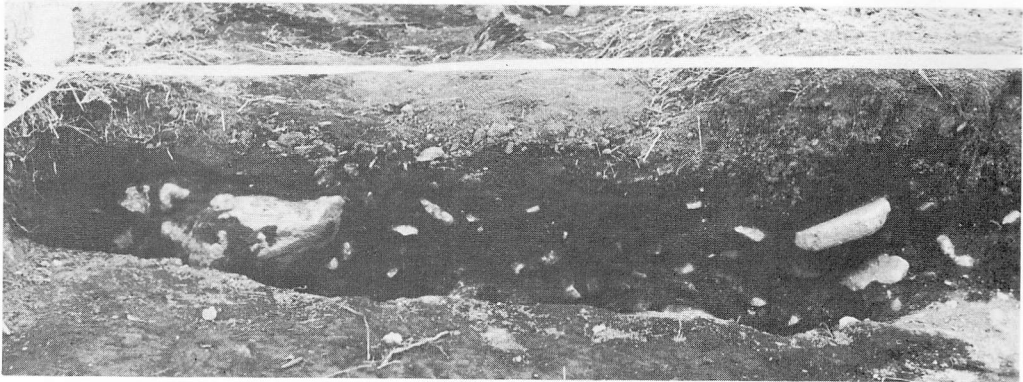


D地区

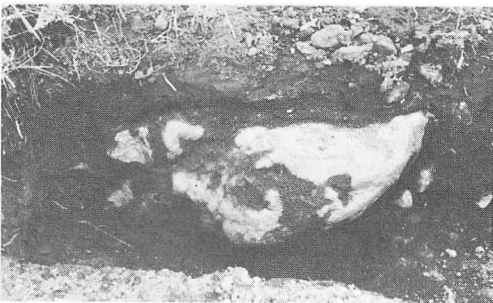
図版2 調査区全景(2)



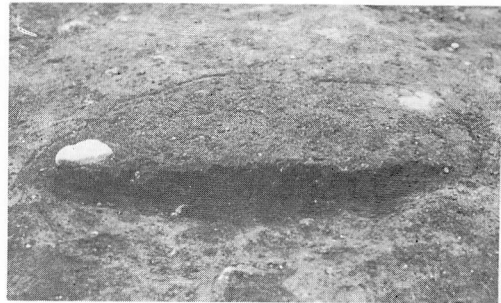
完掘



断面



礎石



抜き取り穴断面

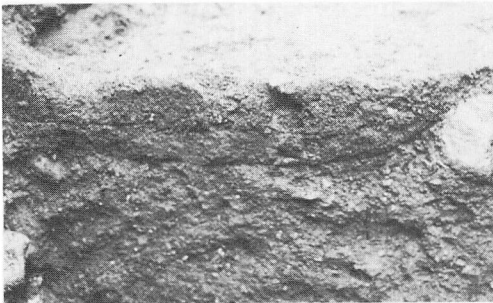
図版3 B4 礎石建物跡



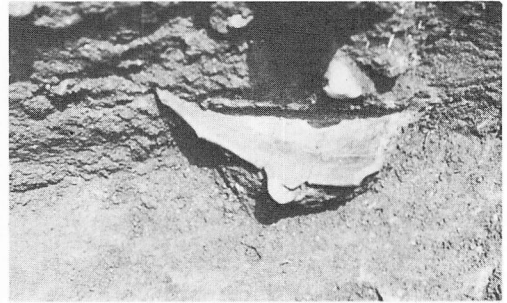
C 8 - 1 豎穴住居跡完掘



C 8 - 3 豎穴住居跡完掘

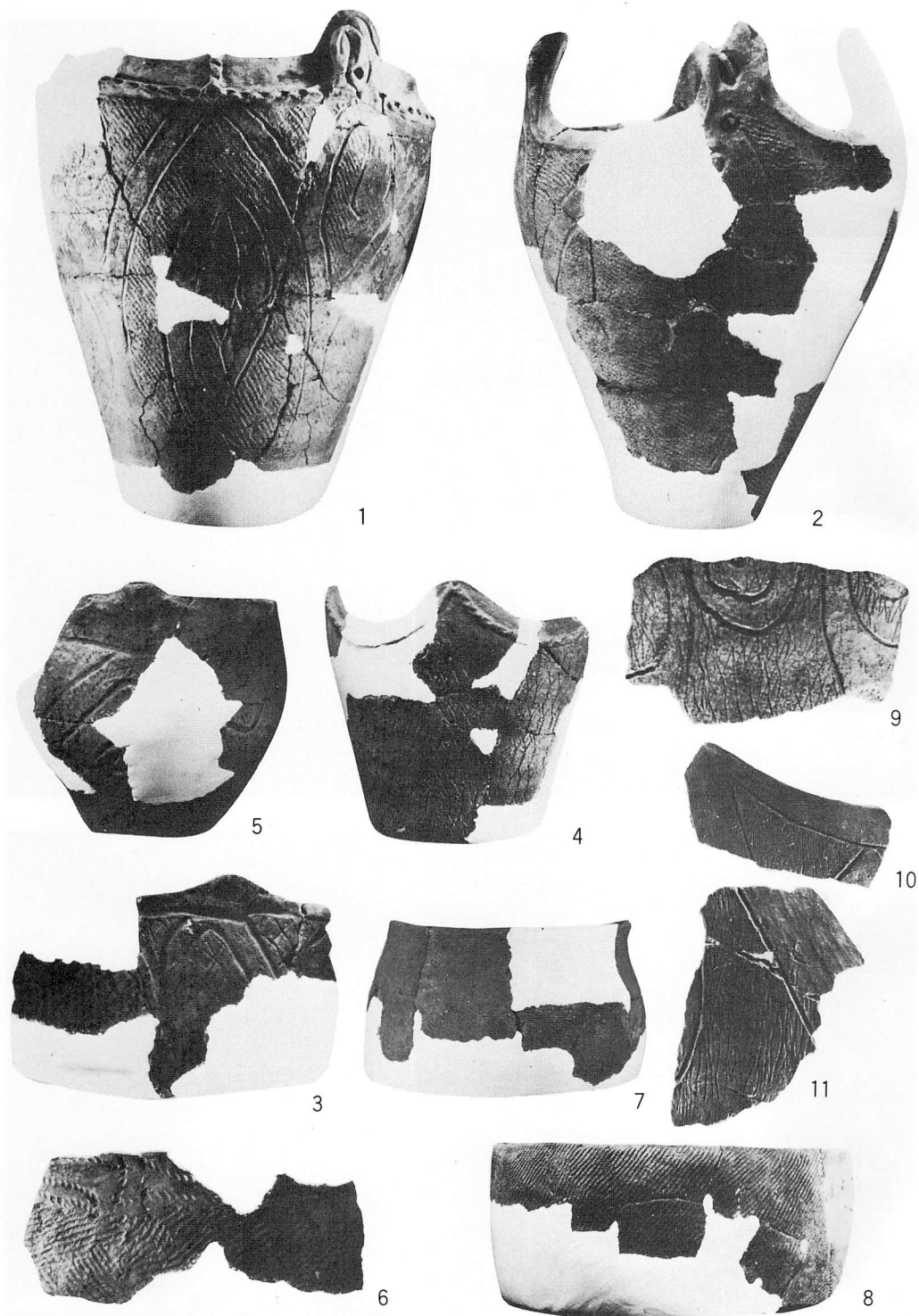


C 8 - 3 豎穴住居跡炉跡断面

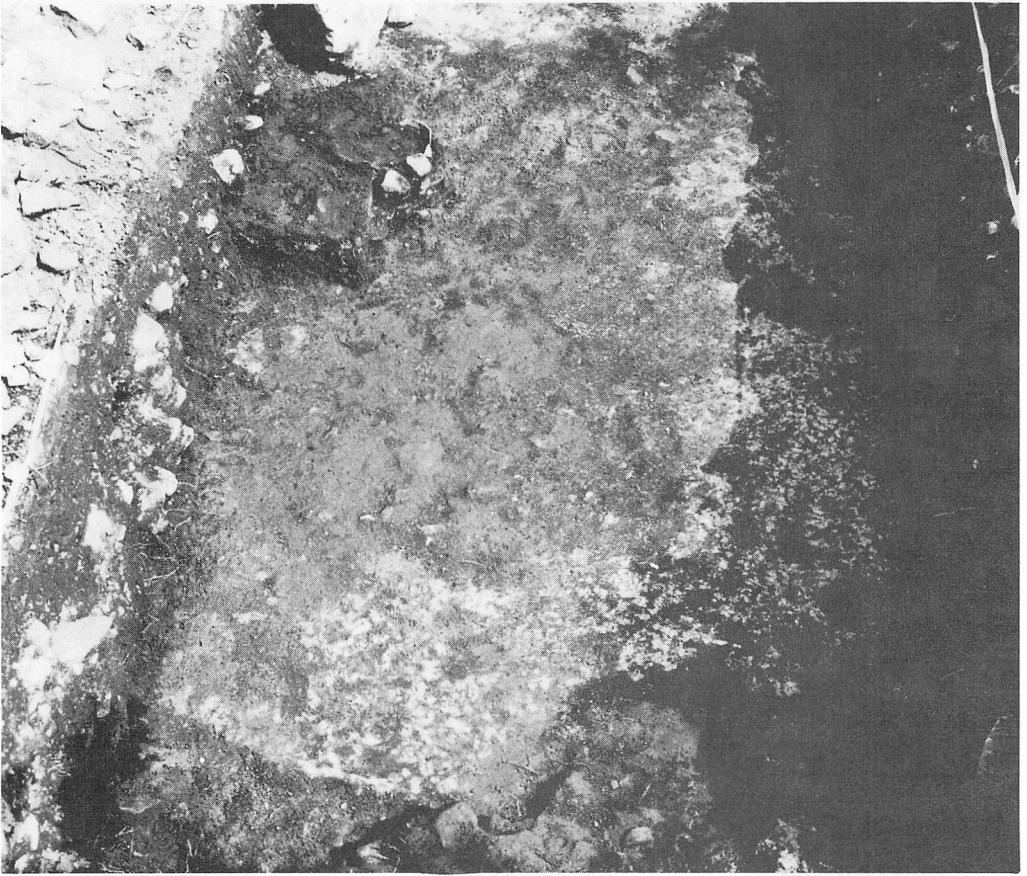


土器出土狀況

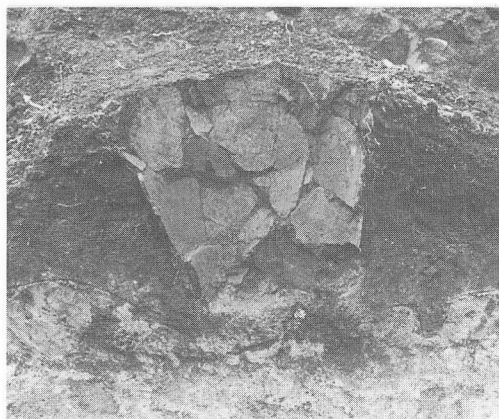
図版 4 C 8 豎穴住居跡



图版 5 C8 竖穴住居跡出土遺物



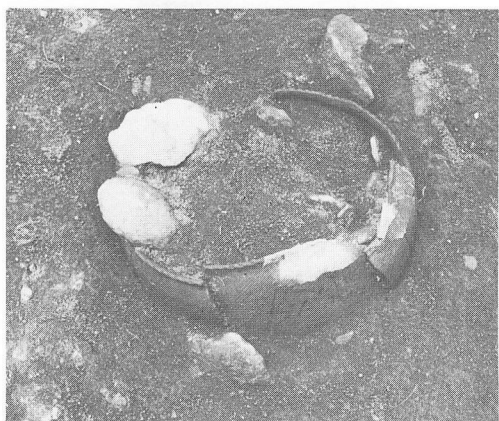
图版6 C10竖穴住居跡



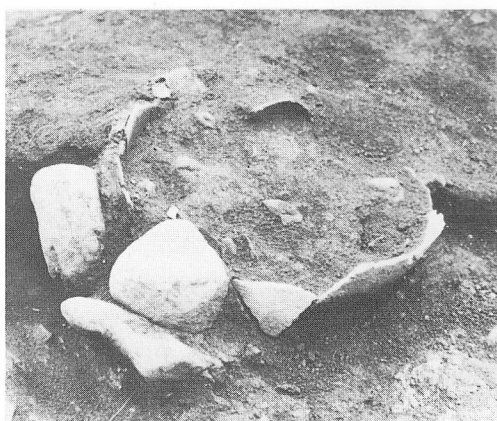
C 7 埋設土器断面



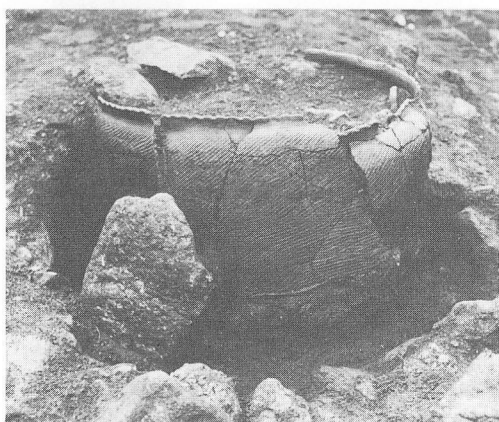
C 7 埋設土器



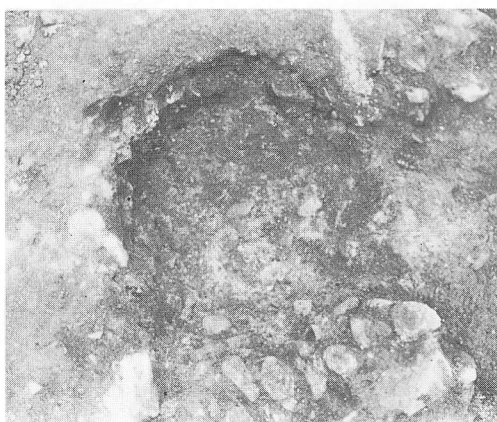
C 9 埋設土器



C10埋設土器



C 9 埋設土器側面



C10埋設土器設置穴

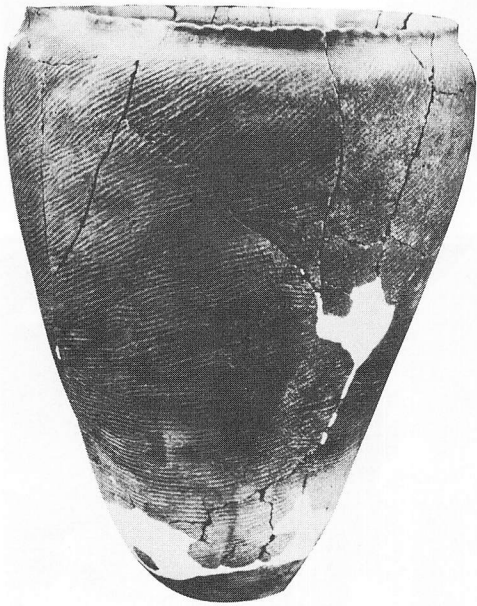
図版7 埋設土器



C 7 埋設土器



C10埋設土器

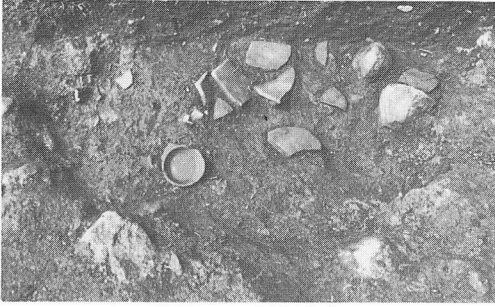


C 9 埋設土器

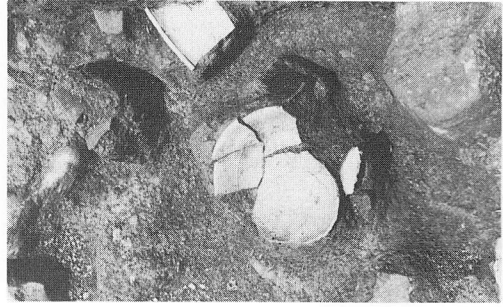


C10-1 土壙墓

図版 8 埋設土器・土壙墓出土遺物



B 4 - 1 土壤遺物



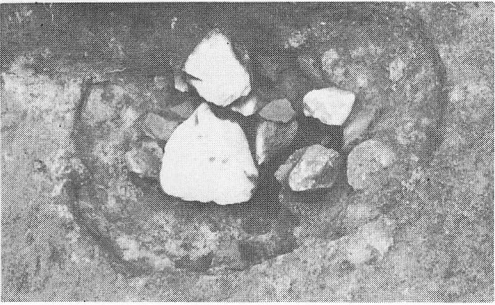
B 4 - 2 土壤遺物



B 4 - 2 土壤断面



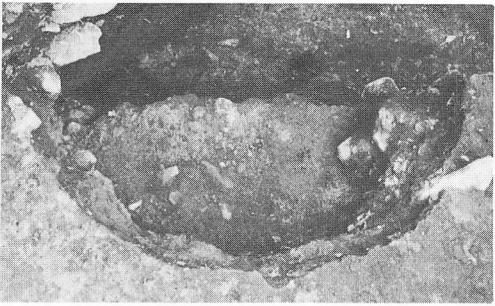
B 4 - 2 土壤完掘



B16土壤完掘



C 4 - 1 土壤完掘

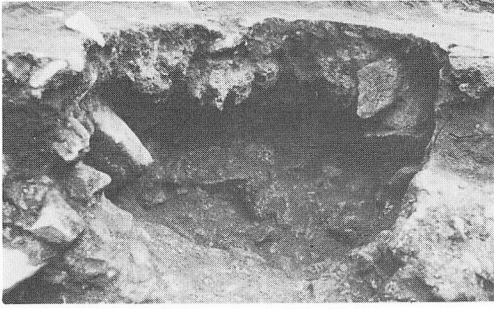


C 8 - 1 土壤完掘

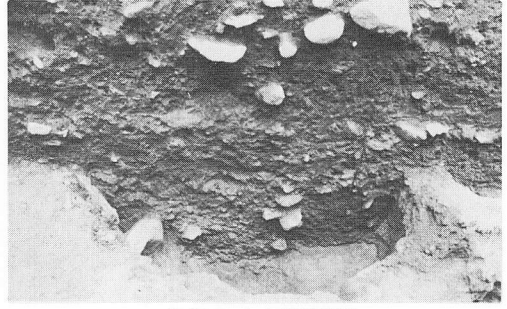


C 8 - 2 土壤断面

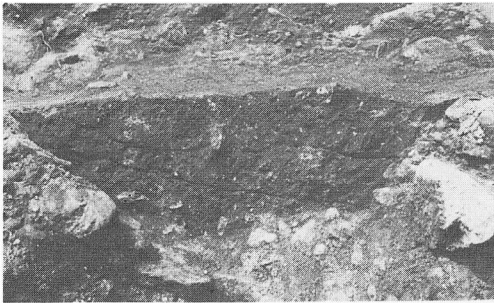
図版9 土壤 (1)



C 8 - 2 土壤完掘



C 8 - 4 土壤断面



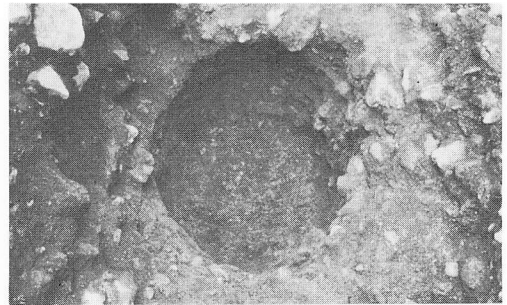
C 9 - 1 土壤断面



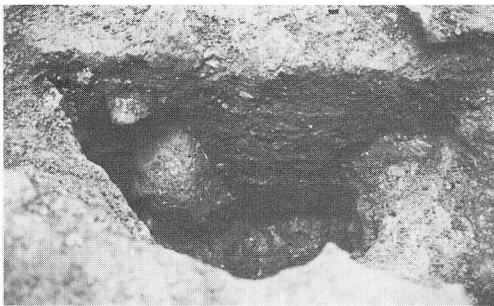
C 9 - 1 土壤完掘



C 9 - 2 土壤土器



C 9 - 2 土壤完掘



C 9 - 5 土壤断面



C 9 - 5 土壤完掘

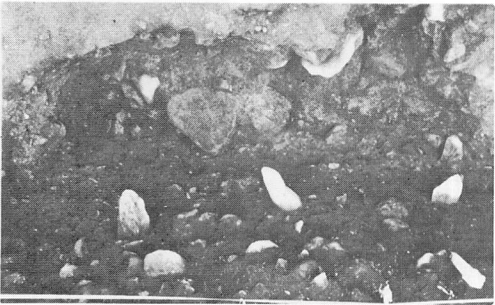
图版10 土壤 (2)



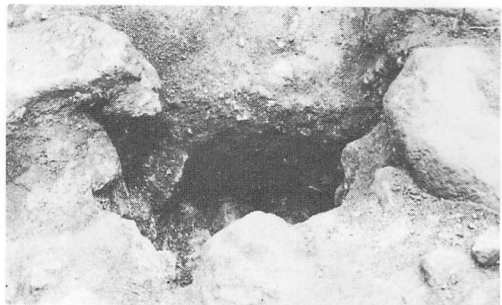
C9-6 土壤完掘



C10-2 土壤完掘



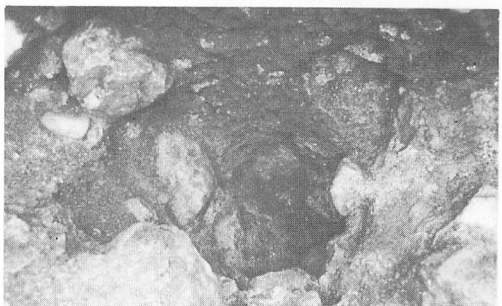
C10-4.5 土壤完掘



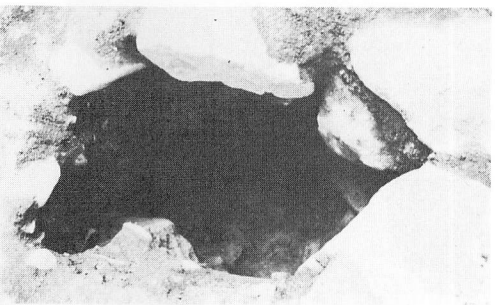
C11-1 土壤断面



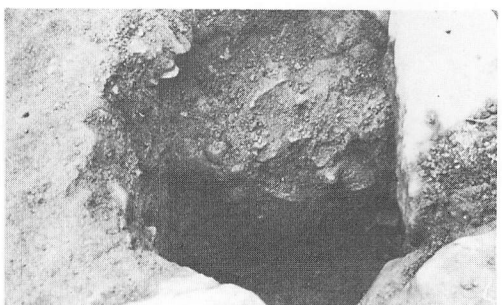
C11-1 土壤完掘



C11-2 土壤完掘

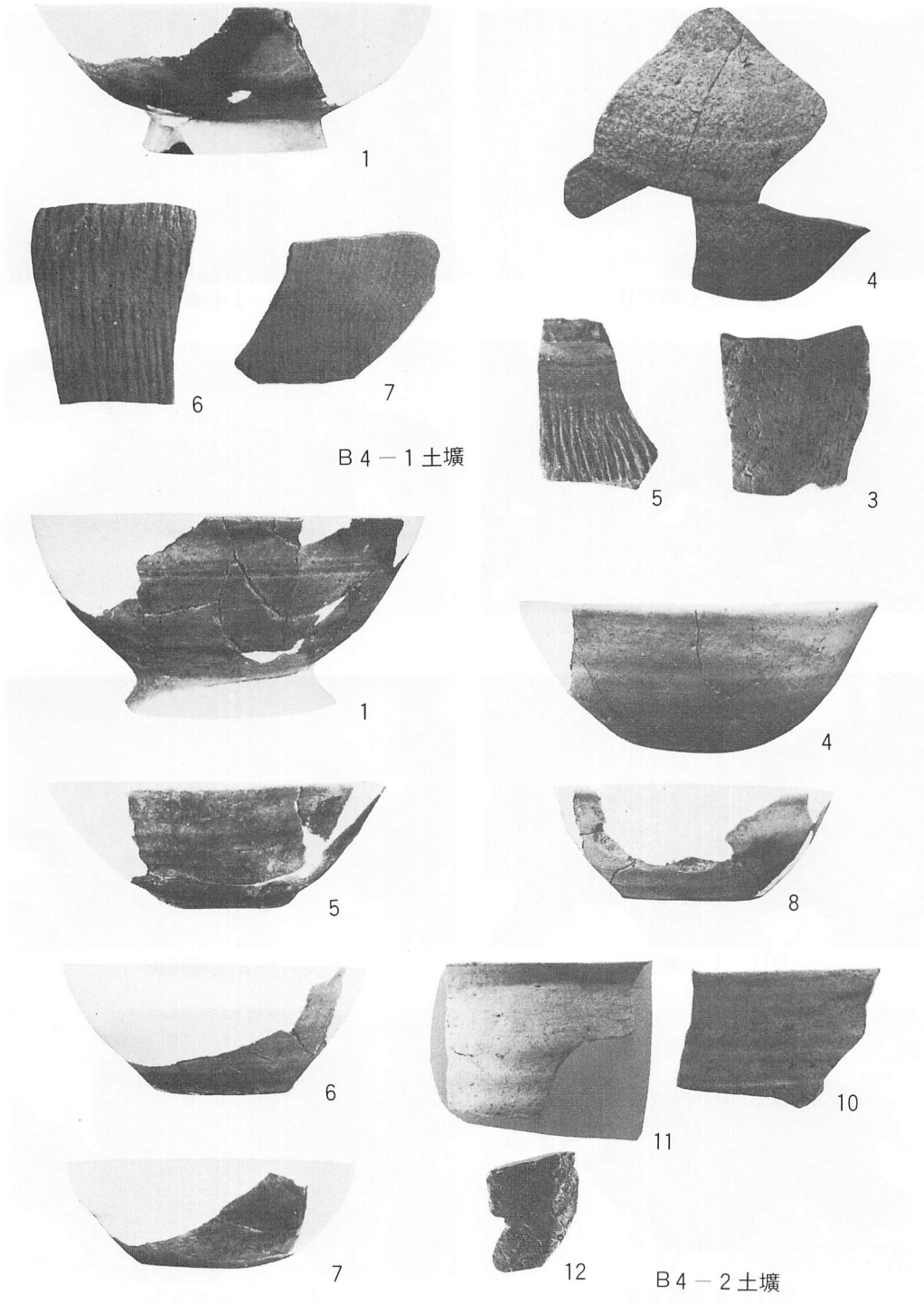


C11-3 土壤完掘



C11-3 土壤断面

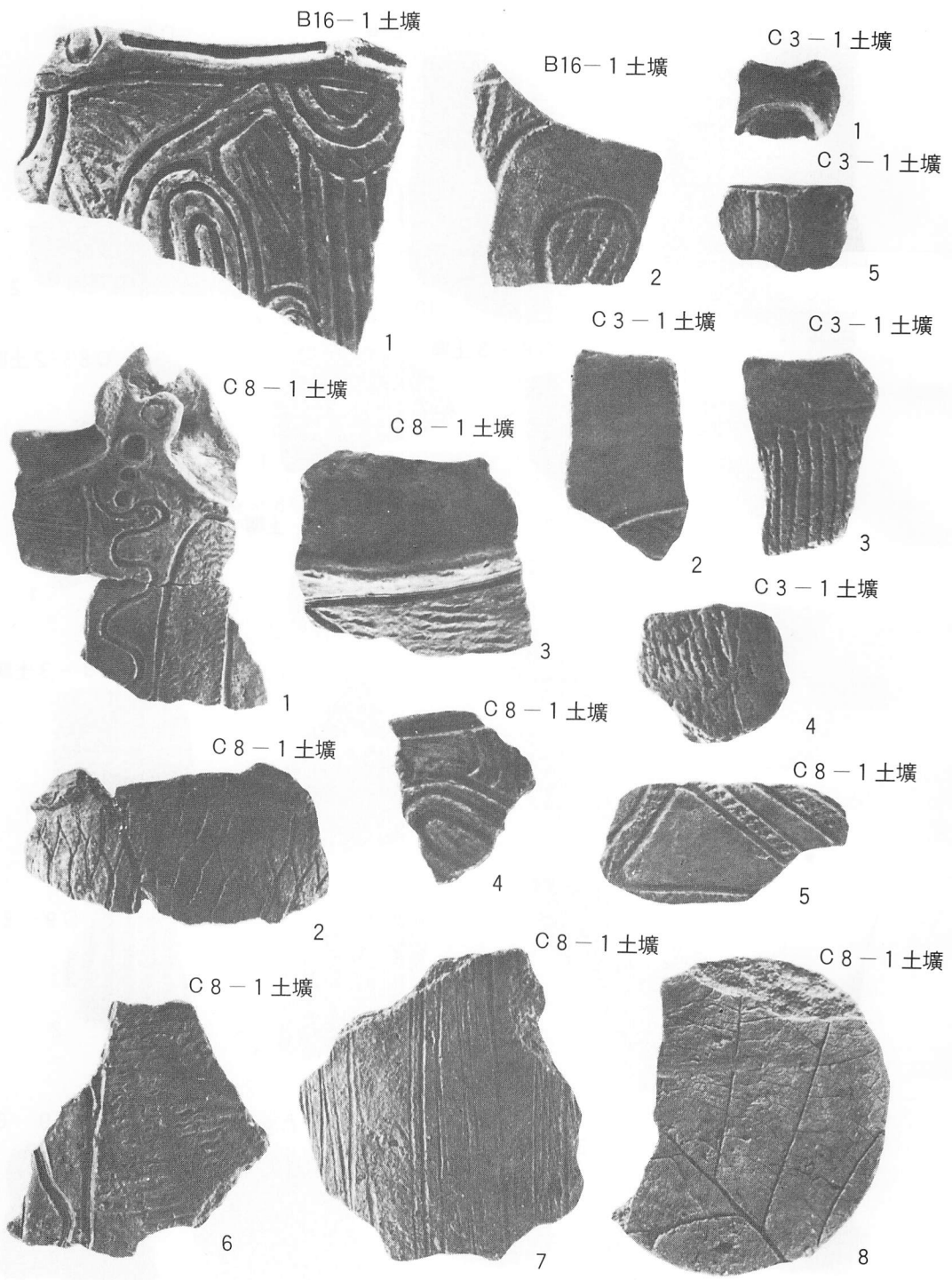
図版11 土壤 (3)



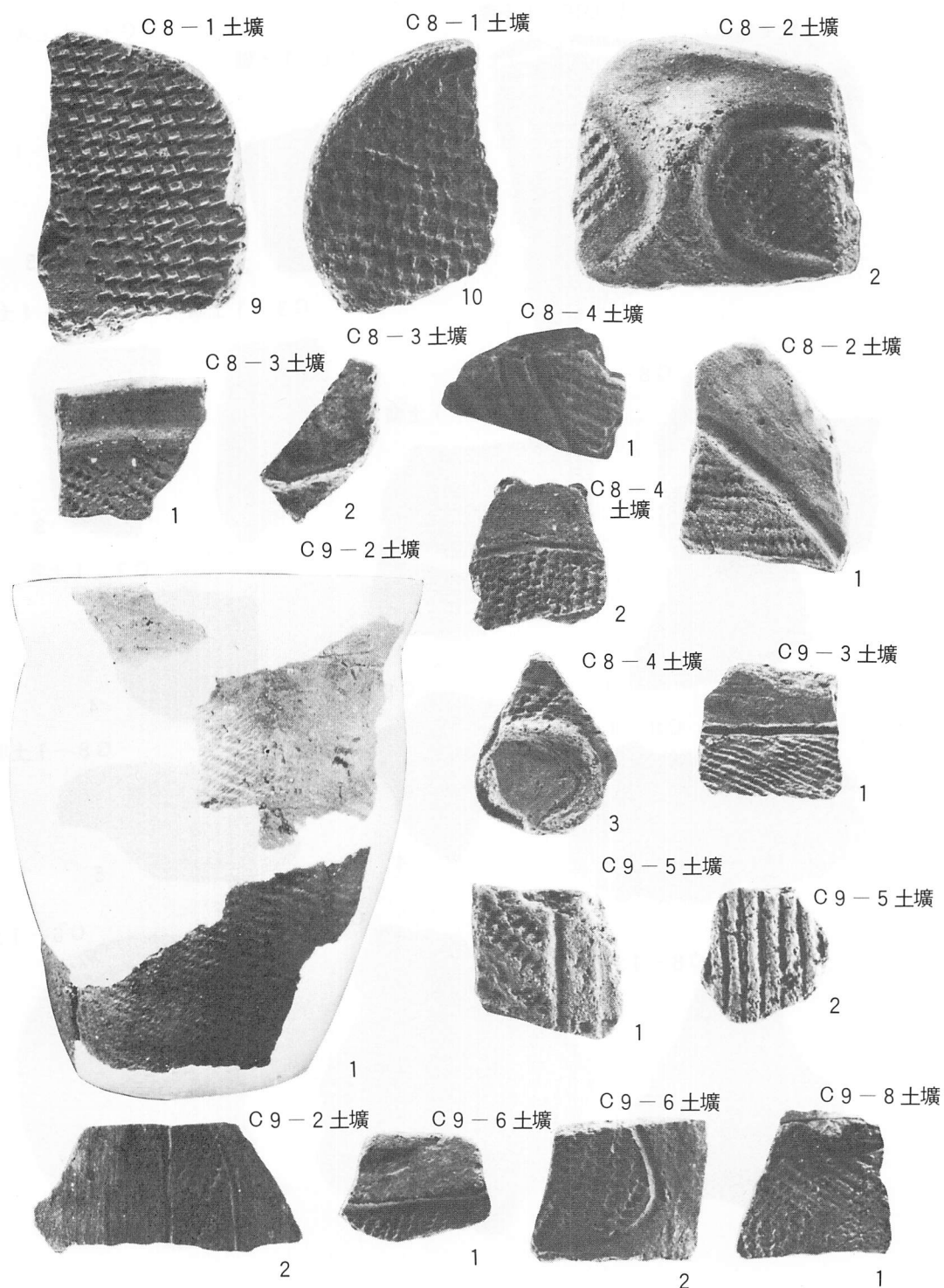
B4-1 土壤

B4-2 土壤

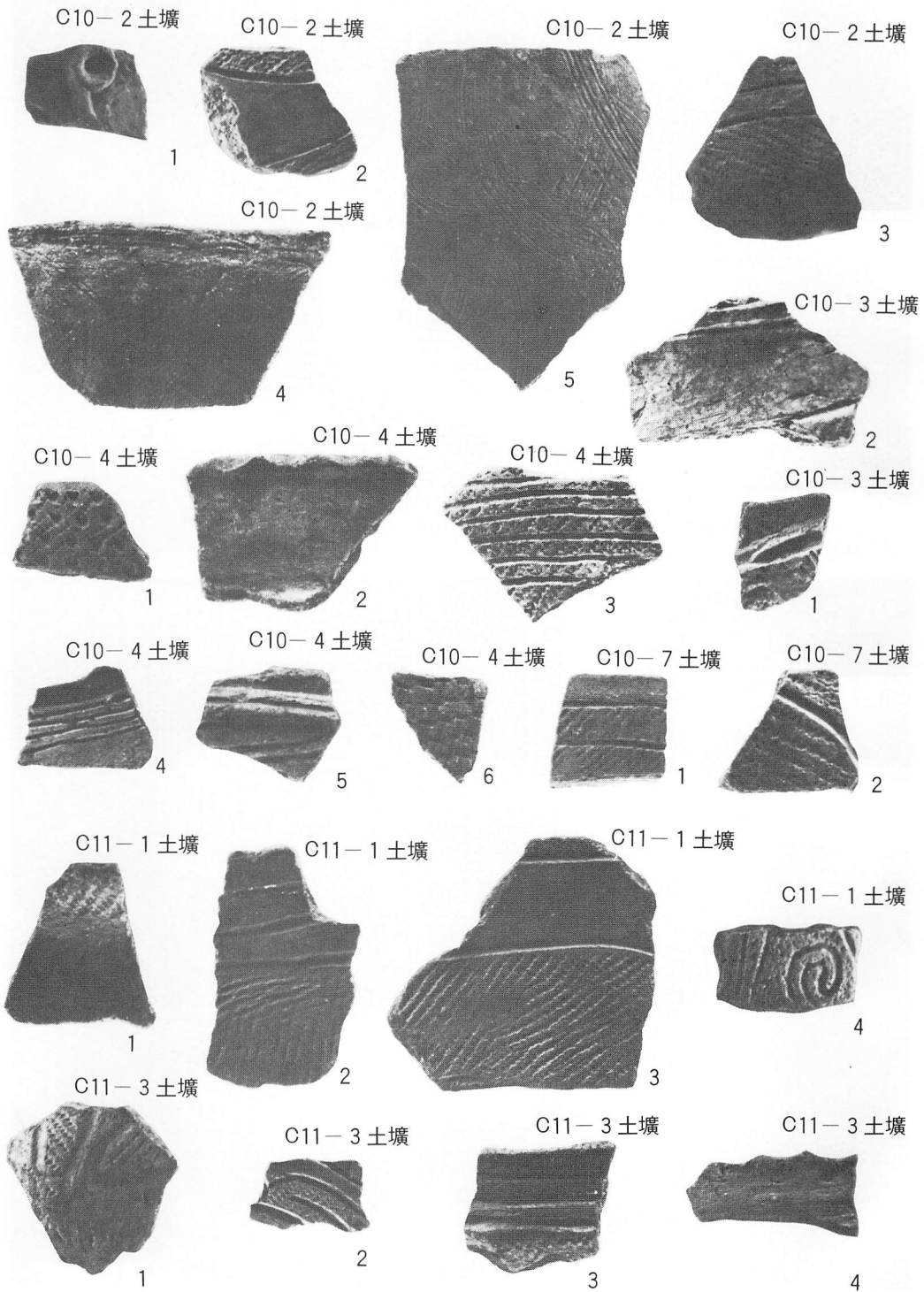
图版12 土壤出土遺物(1)



图版13 土壤出土遺物(2)



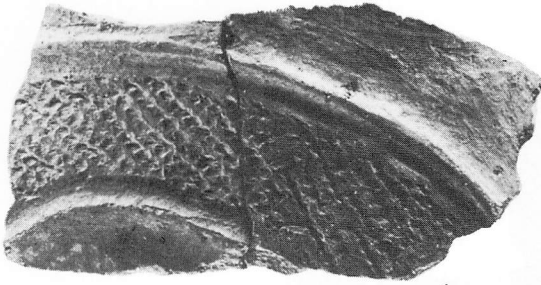
図版14 土壙出土遺物(3)



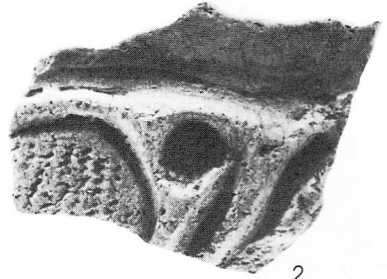
图版15 土壤出土遺物(4)



图版16 土墳墓



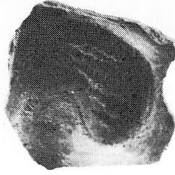
1



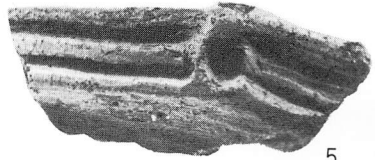
2



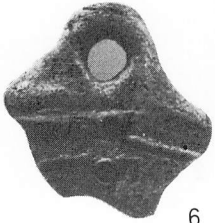
3



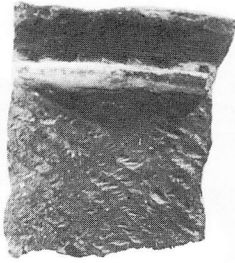
4



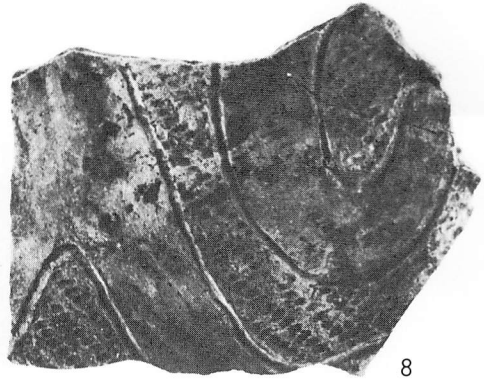
5



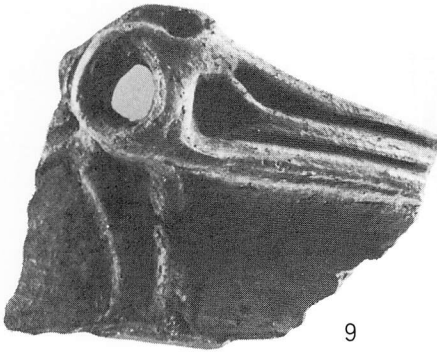
6



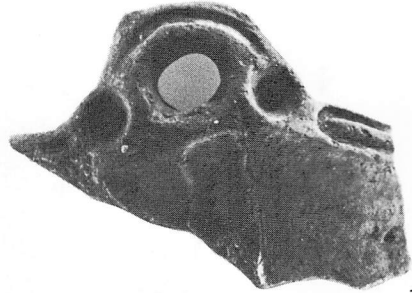
7



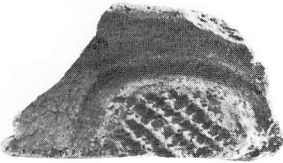
8



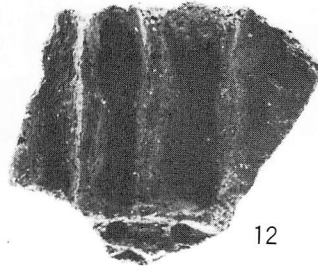
9



10



11

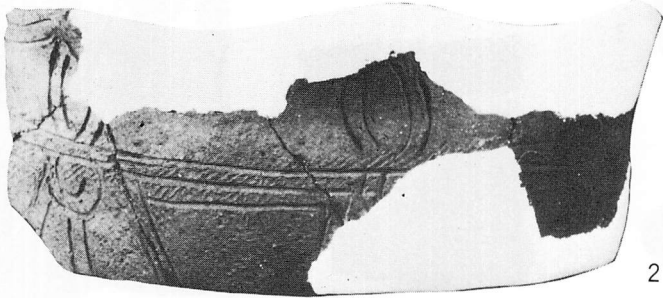


12

图版17 土器 (第1・2群)



1

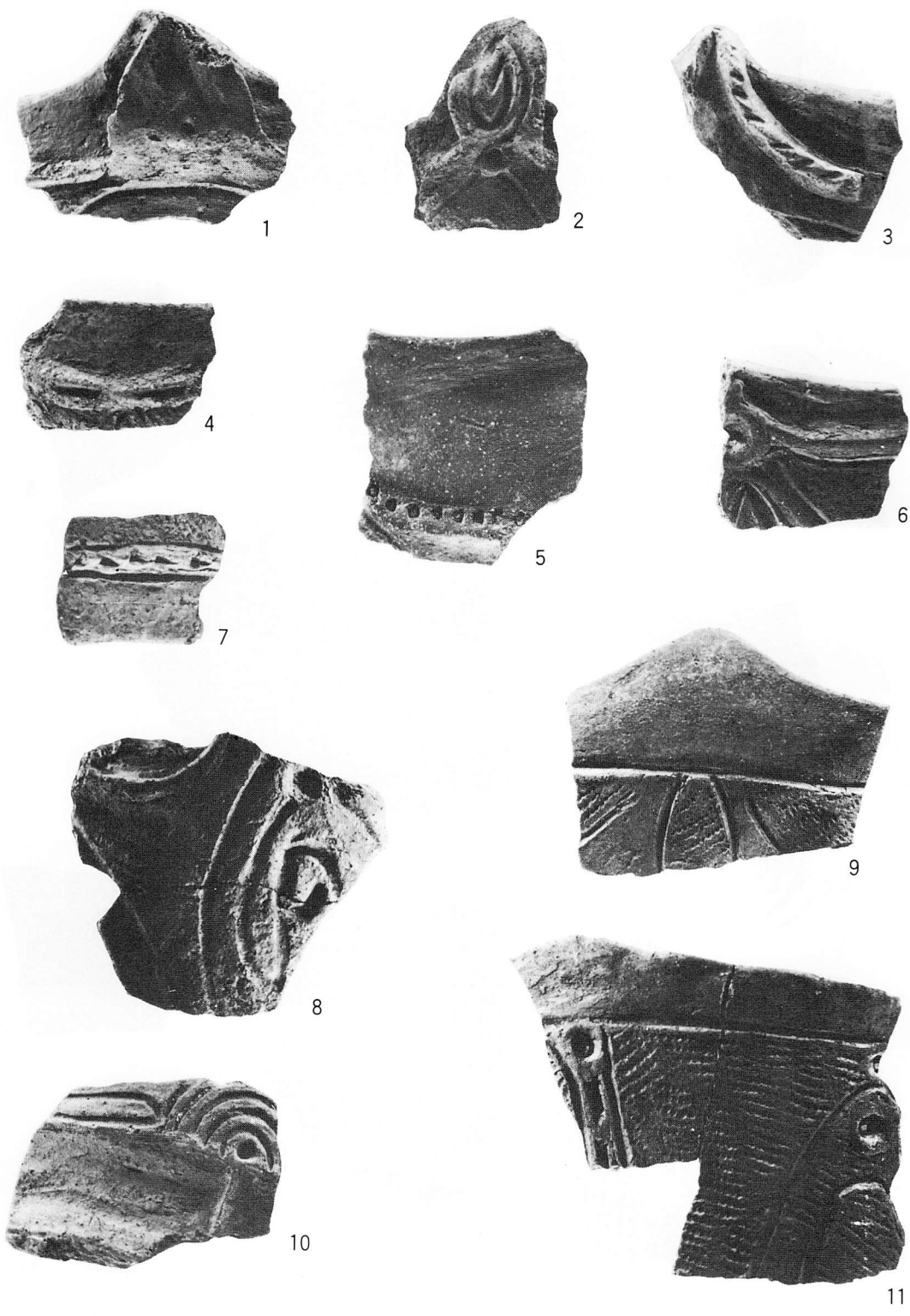


2



3

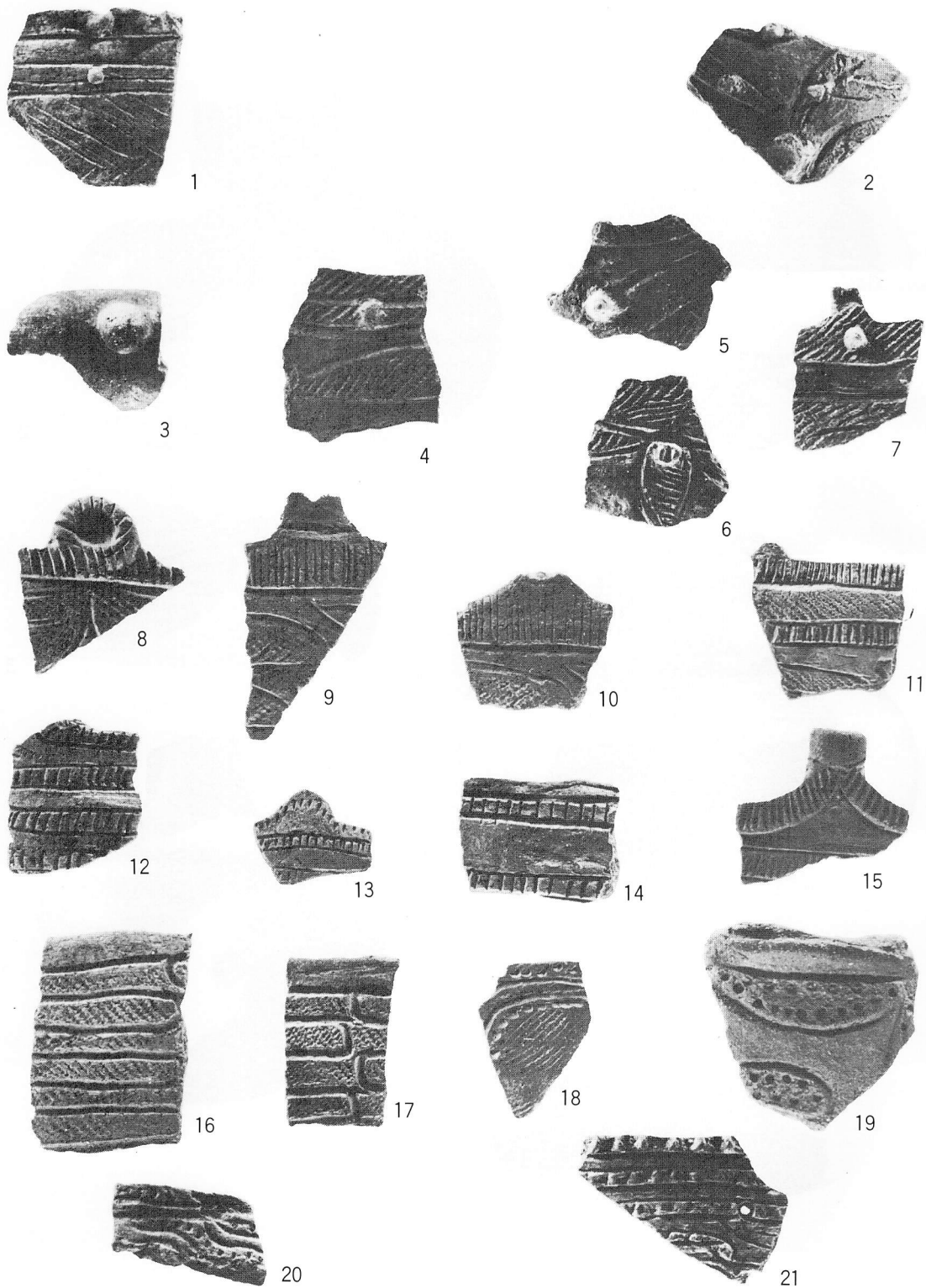
图版18 土器 (第2群)



图版19 土器 (第2群)



图版20 土器 (第2群)



图版21 土器 (第3·4群)



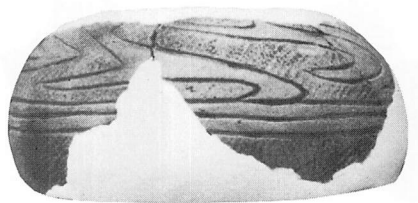
1



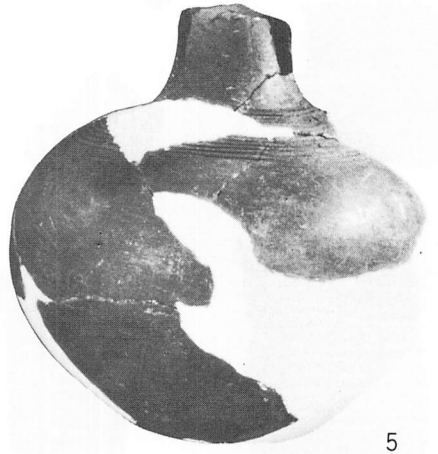
2



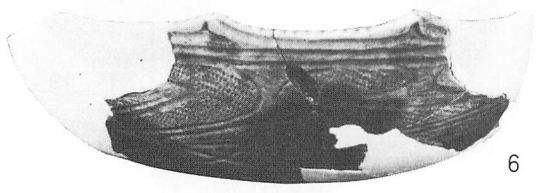
4



3

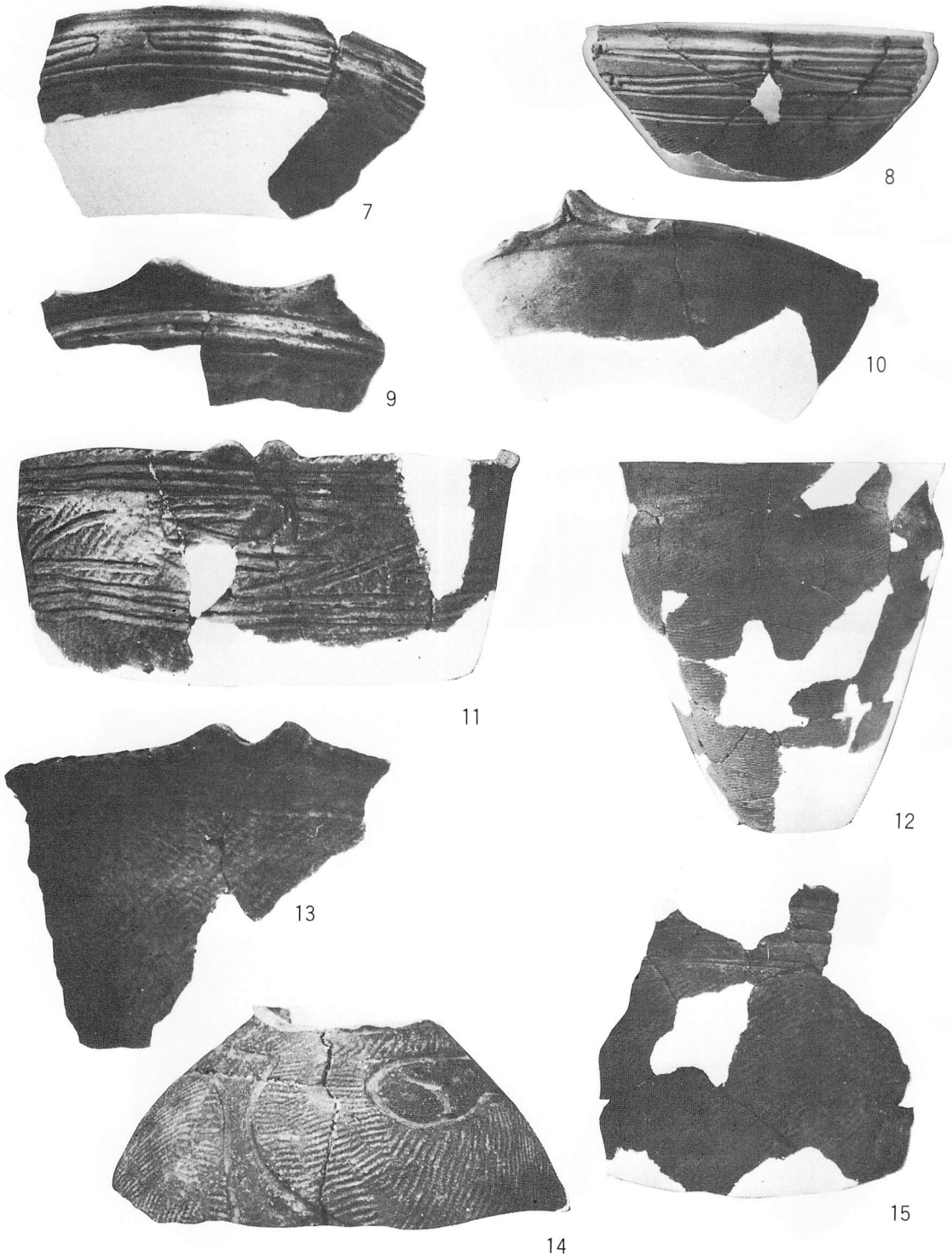


5

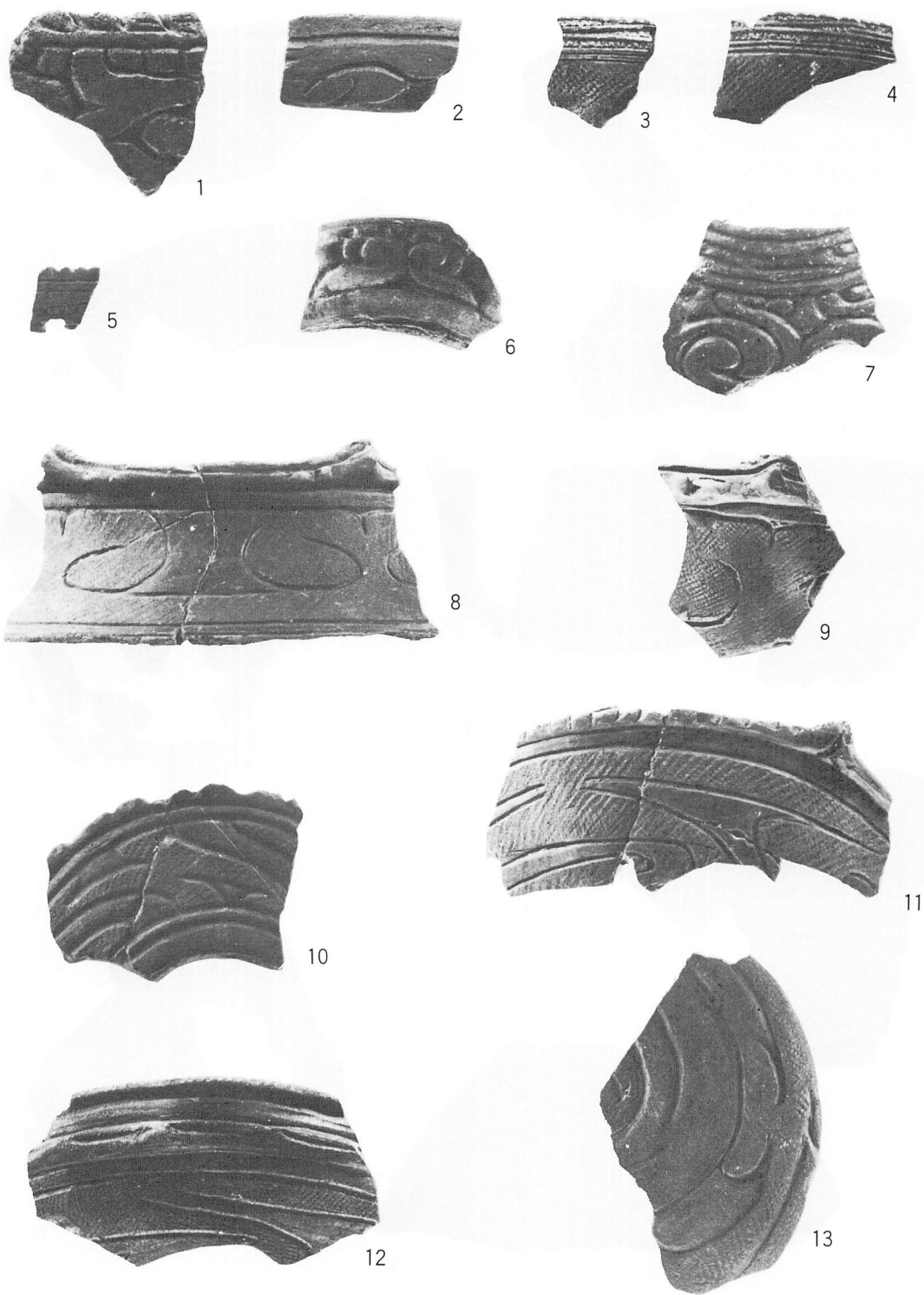


6

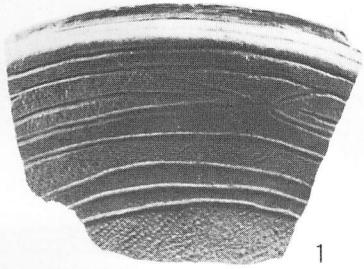
图版22 土器 (第5群)



图版23 土器 (第5・6群)



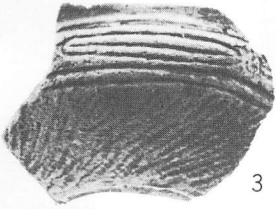
图版24 土器 (第5群)



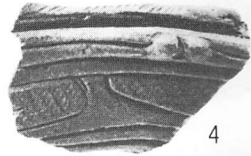
1



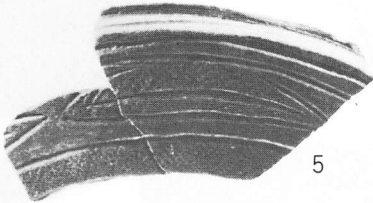
2



3



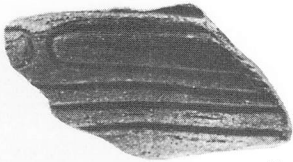
4



5



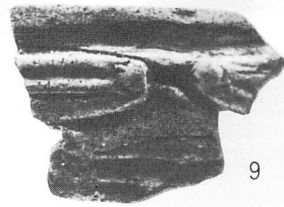
6



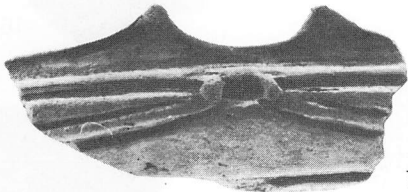
7



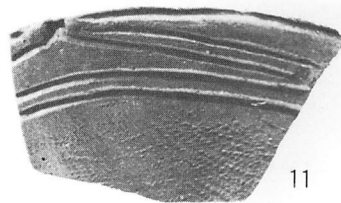
8



9

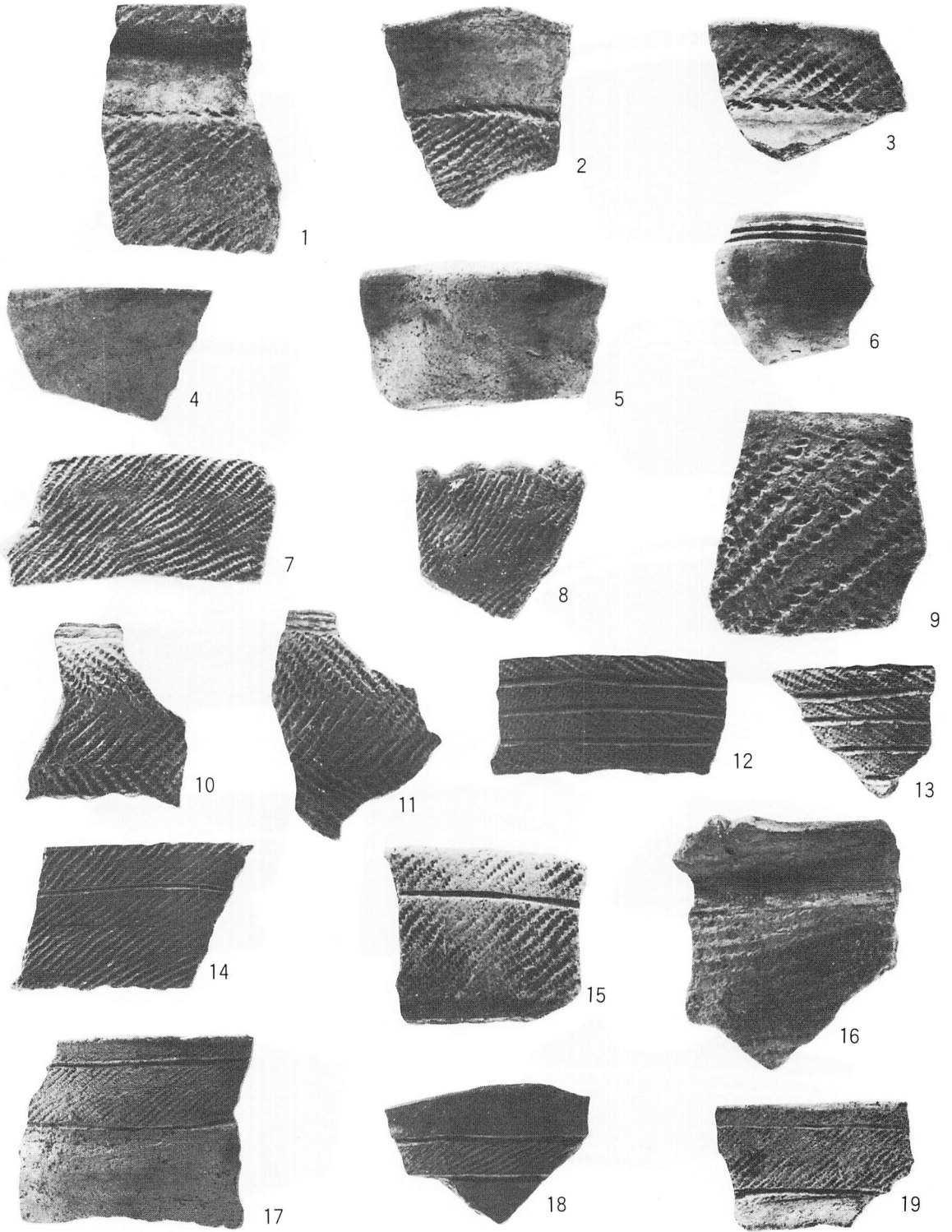


10

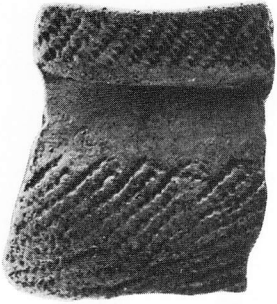


11

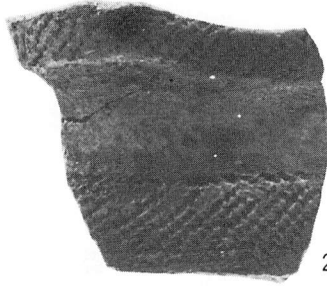
图版25 土器 (第5群)



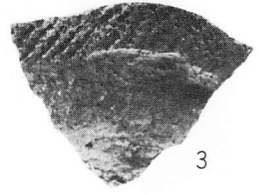
图版26 土器 (第6群)



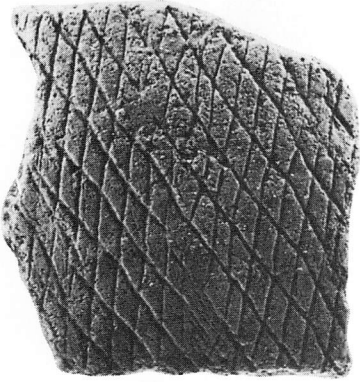
1



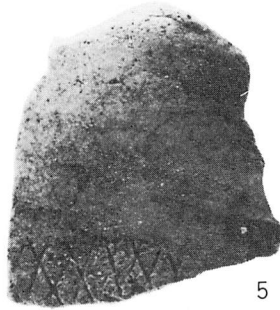
2



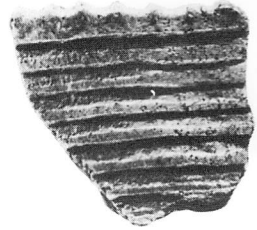
3



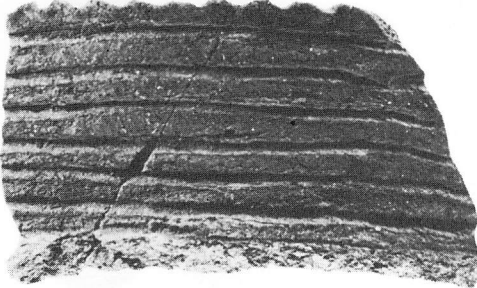
4



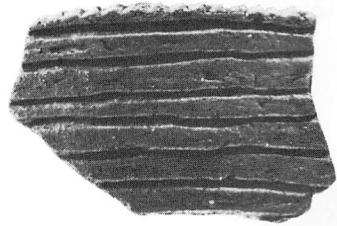
5



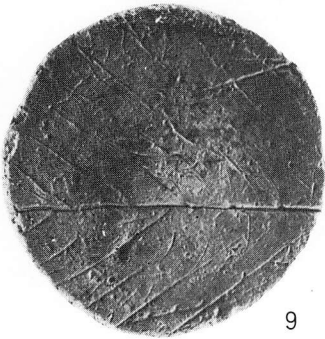
6



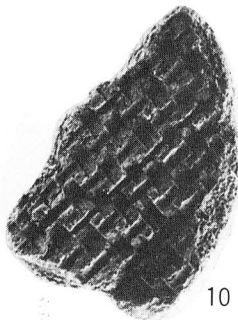
7



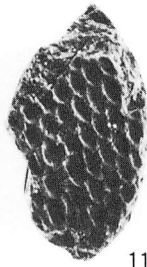
8



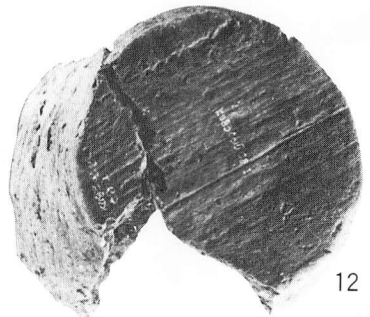
9



10

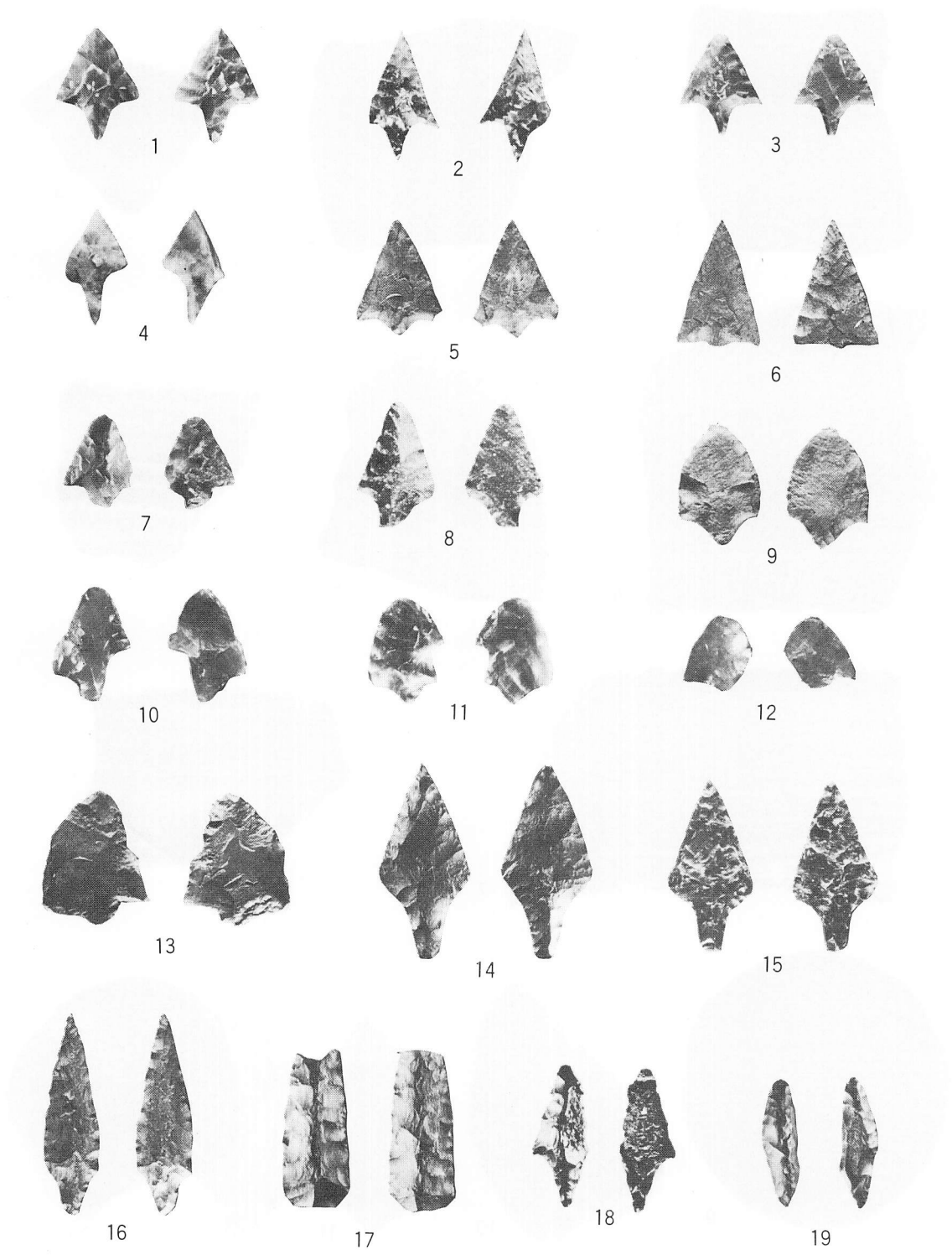


11

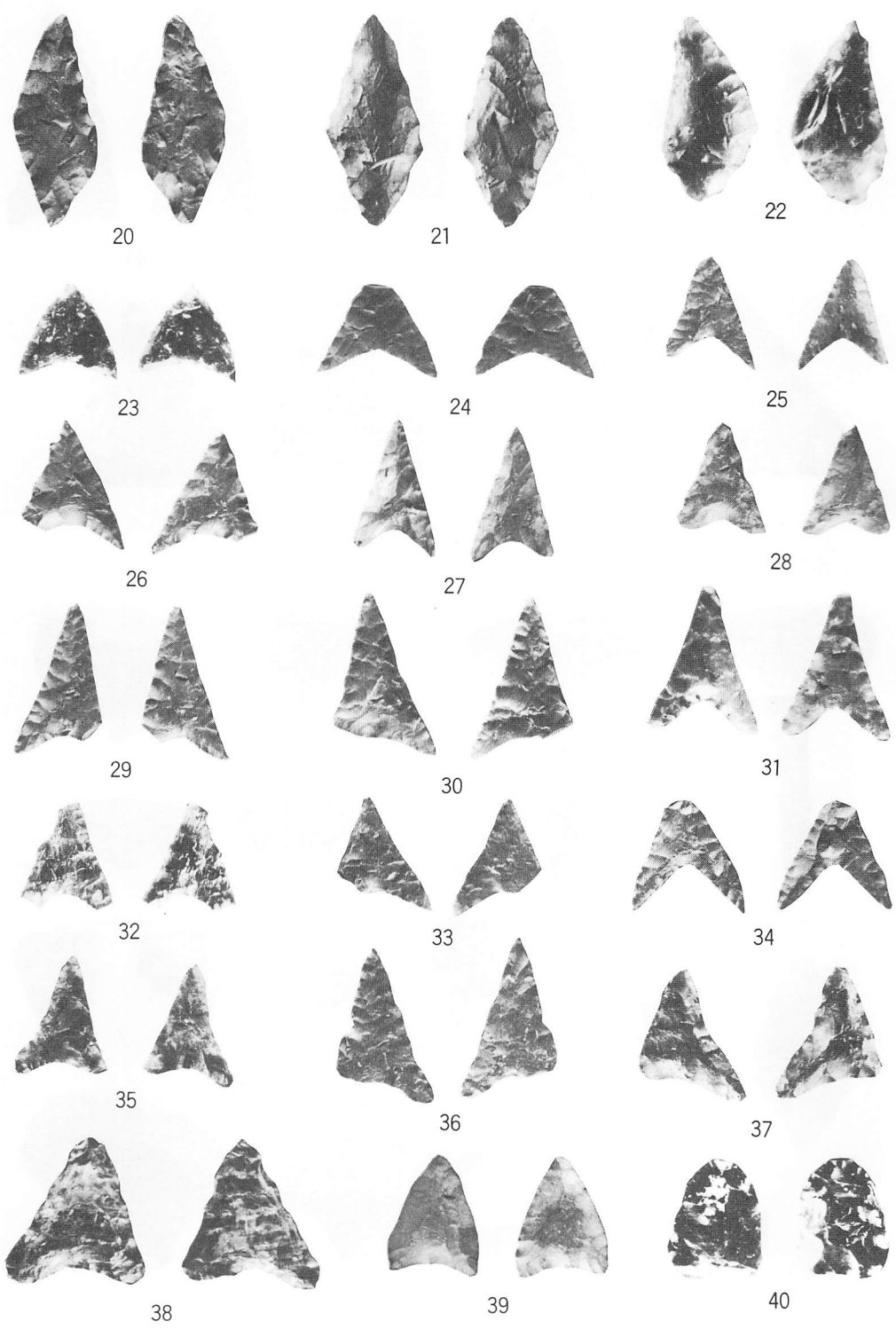


12

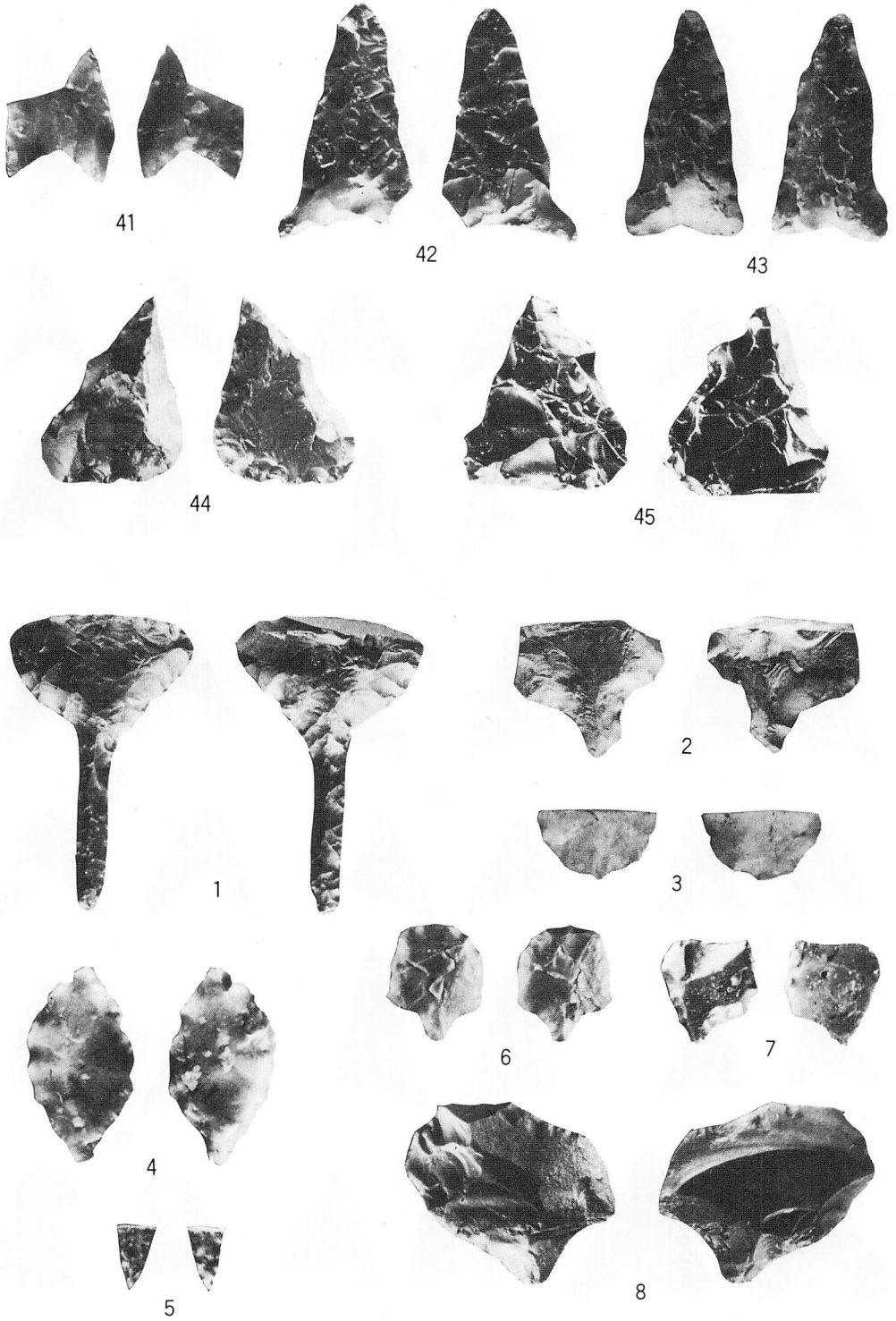
图版27 土器 (第6群)



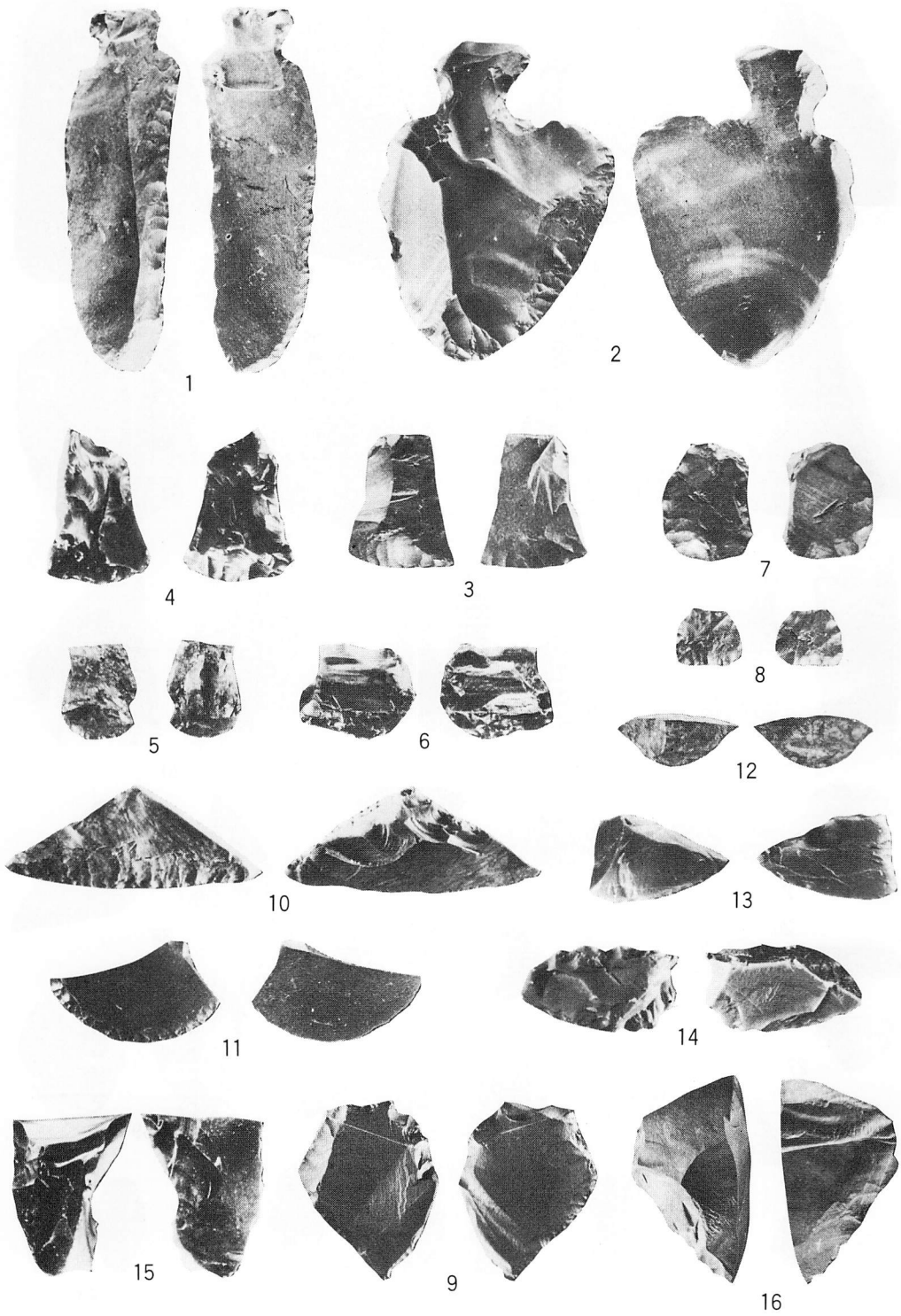
图版28 石鏃 (1)



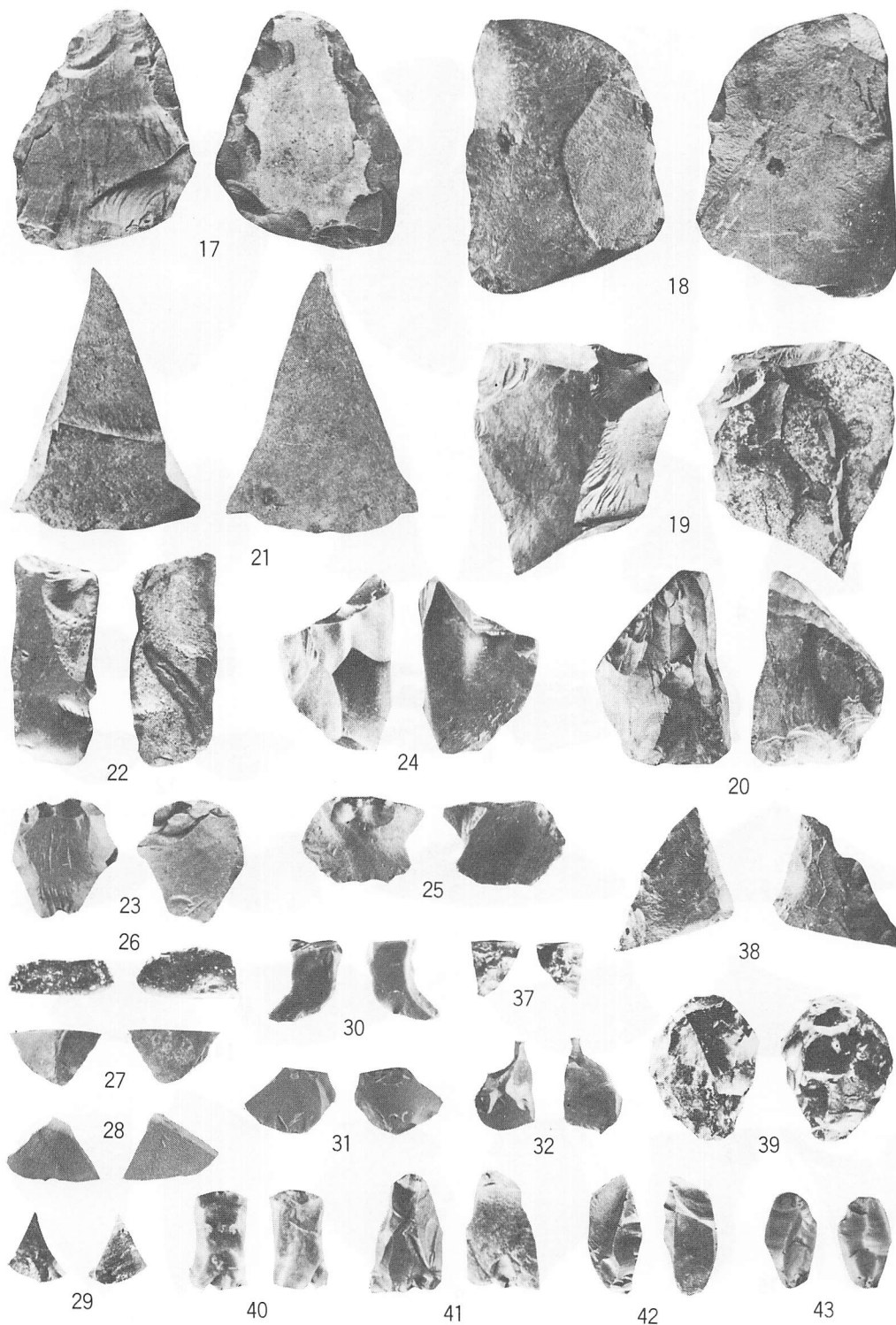
图版29 石鏃 (2)



図版30 石鏃(3) 石錐



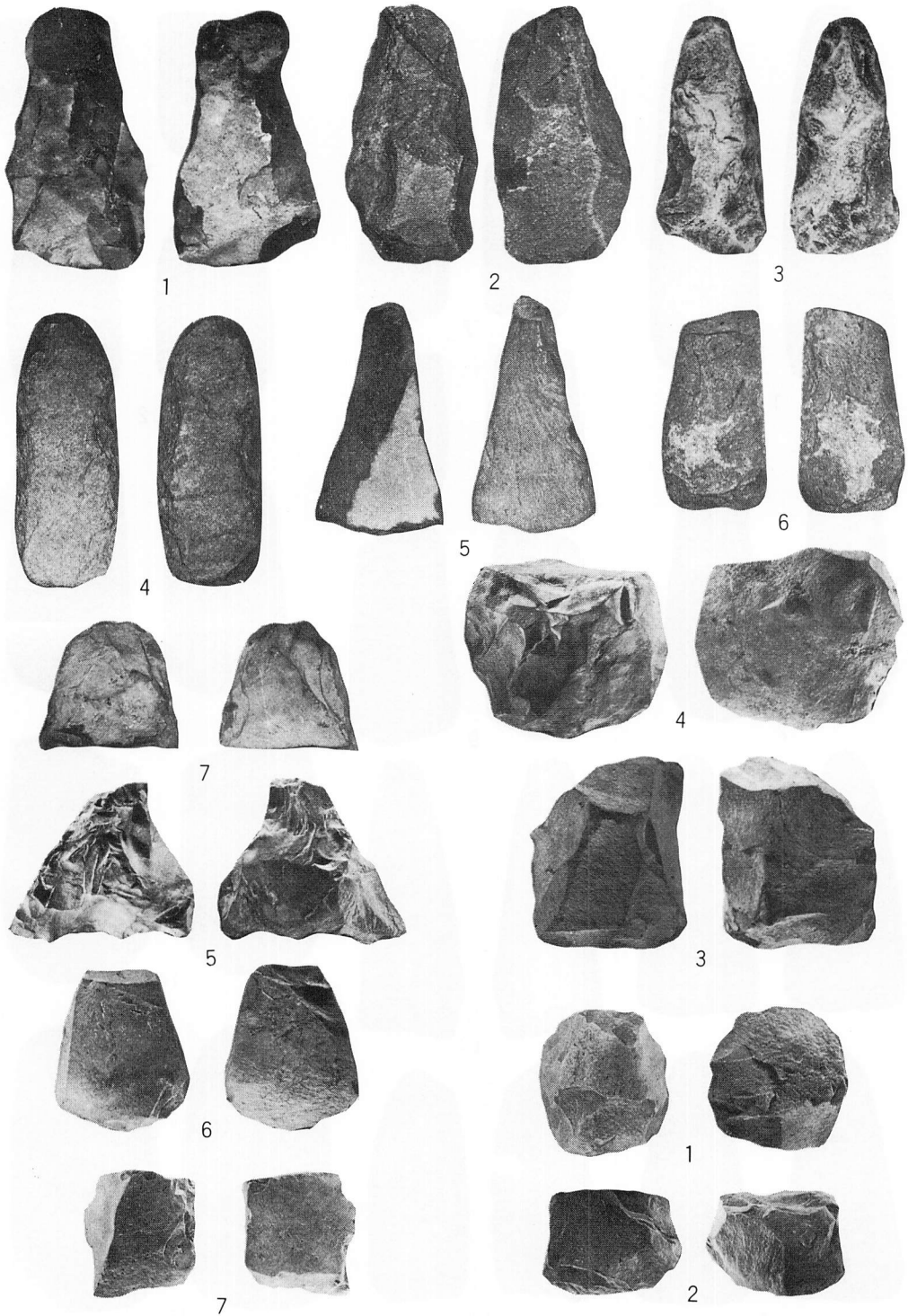
图版31 搔器類 (1)



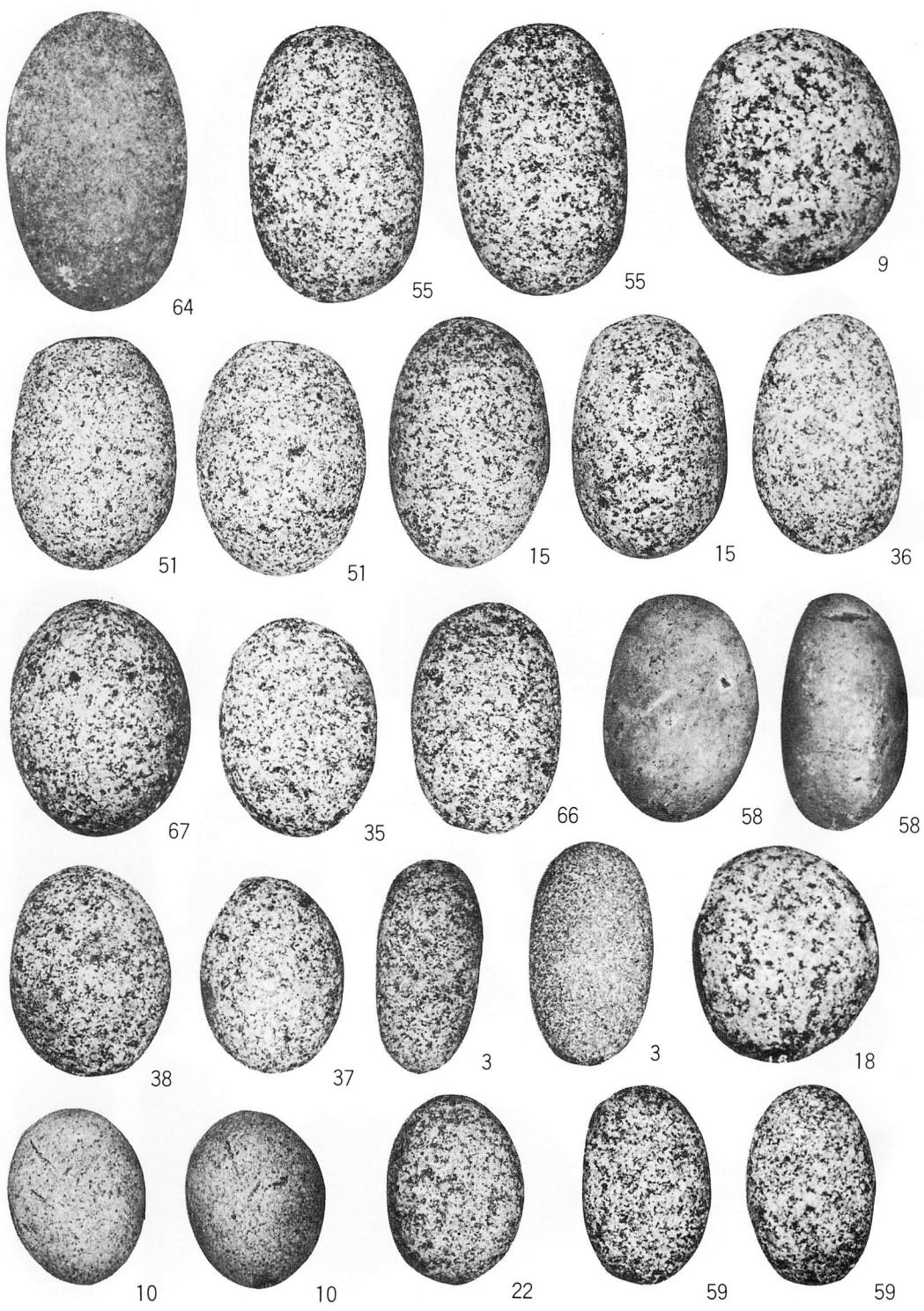
图版32 搔器類 (2)



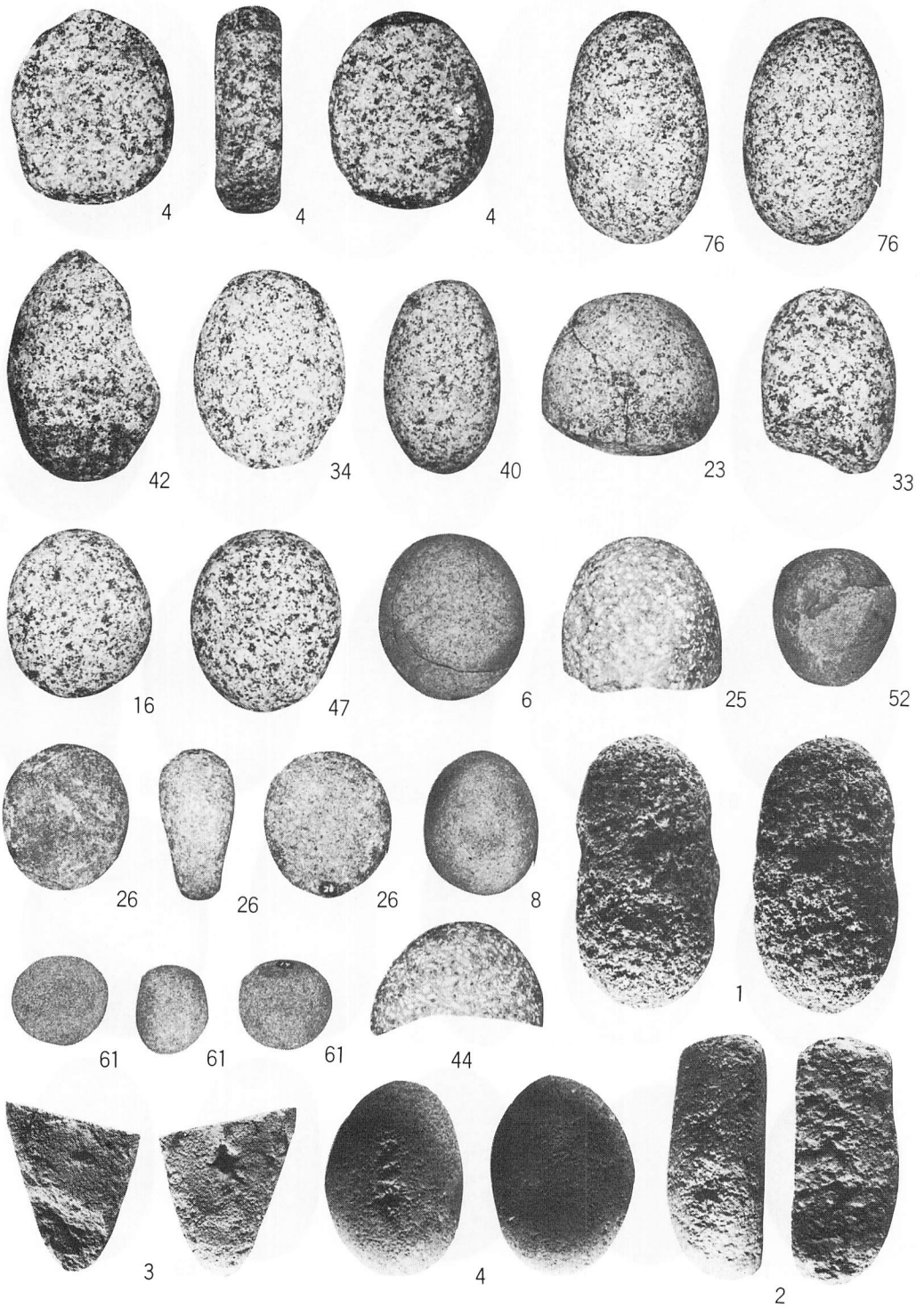
图版33 磨製石斧



图版34 打製石斧 片刃·兩刃石器



图版35 磨石 (1)



图版36 磨石（2）·凹石



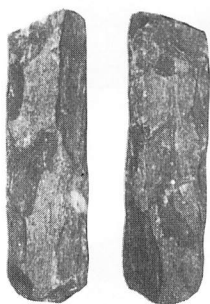
1



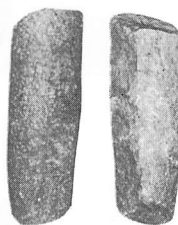
2



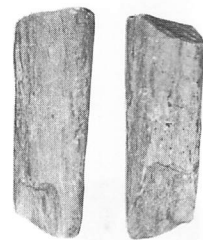
3



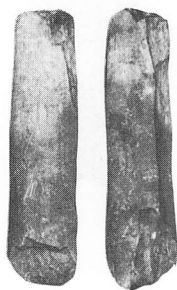
4



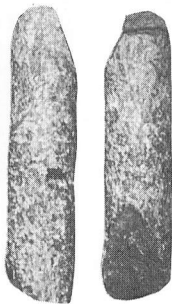
5



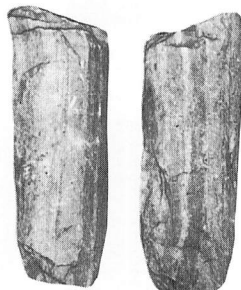
6



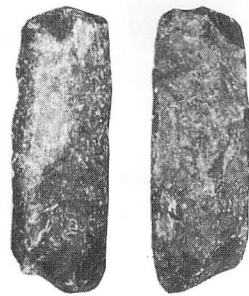
7



8



9

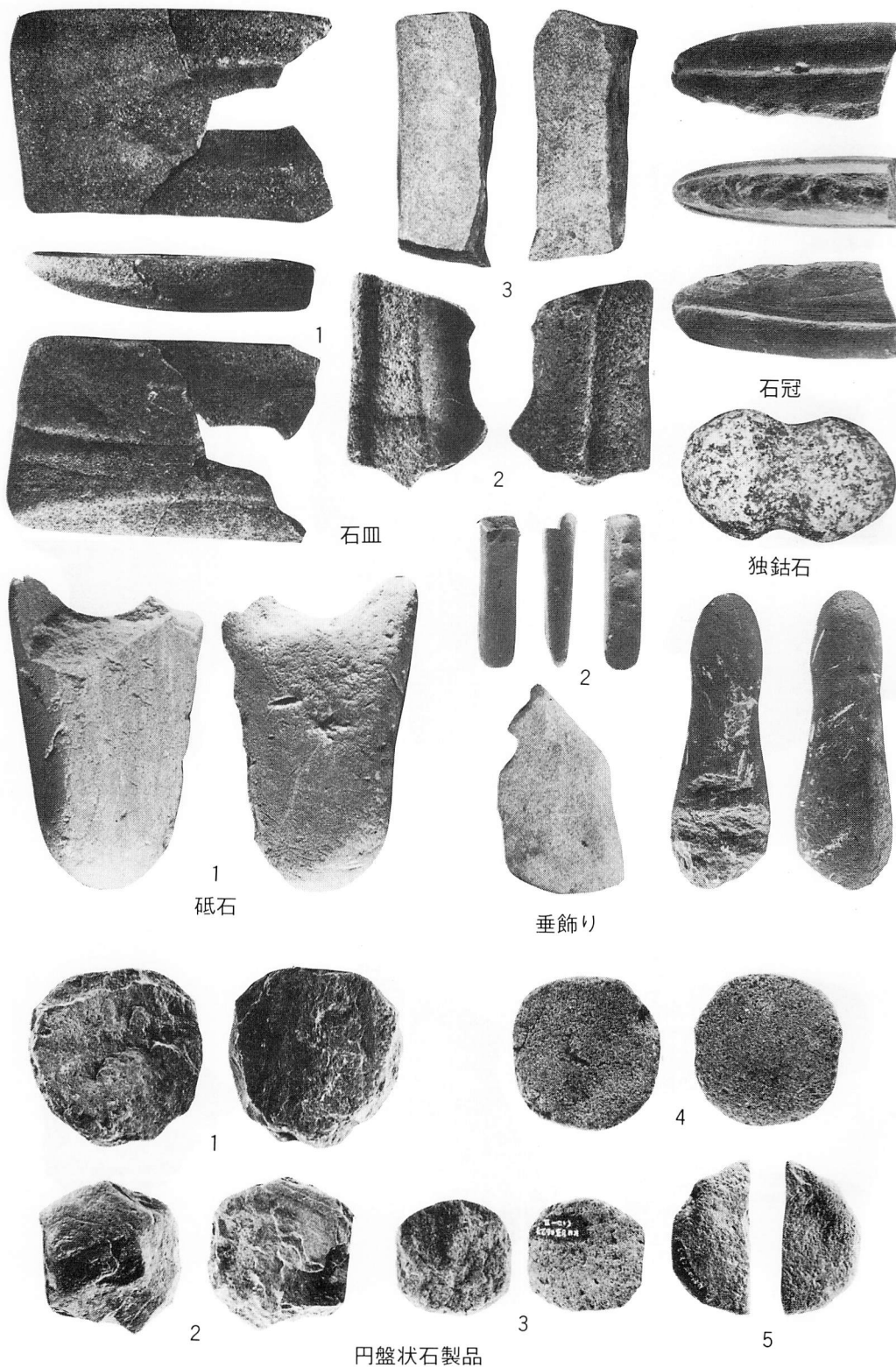


10

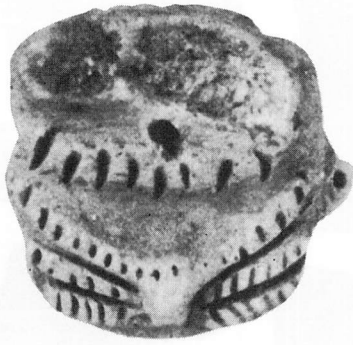
图版37 石 棒



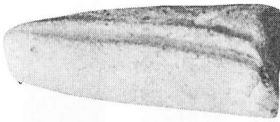
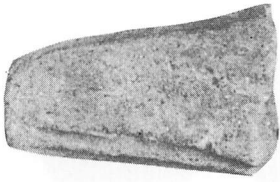
图版38 石 劍



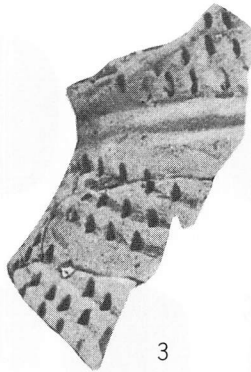
図版39 その他の石器、石製品



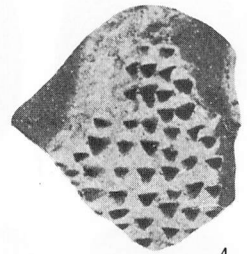
1



2

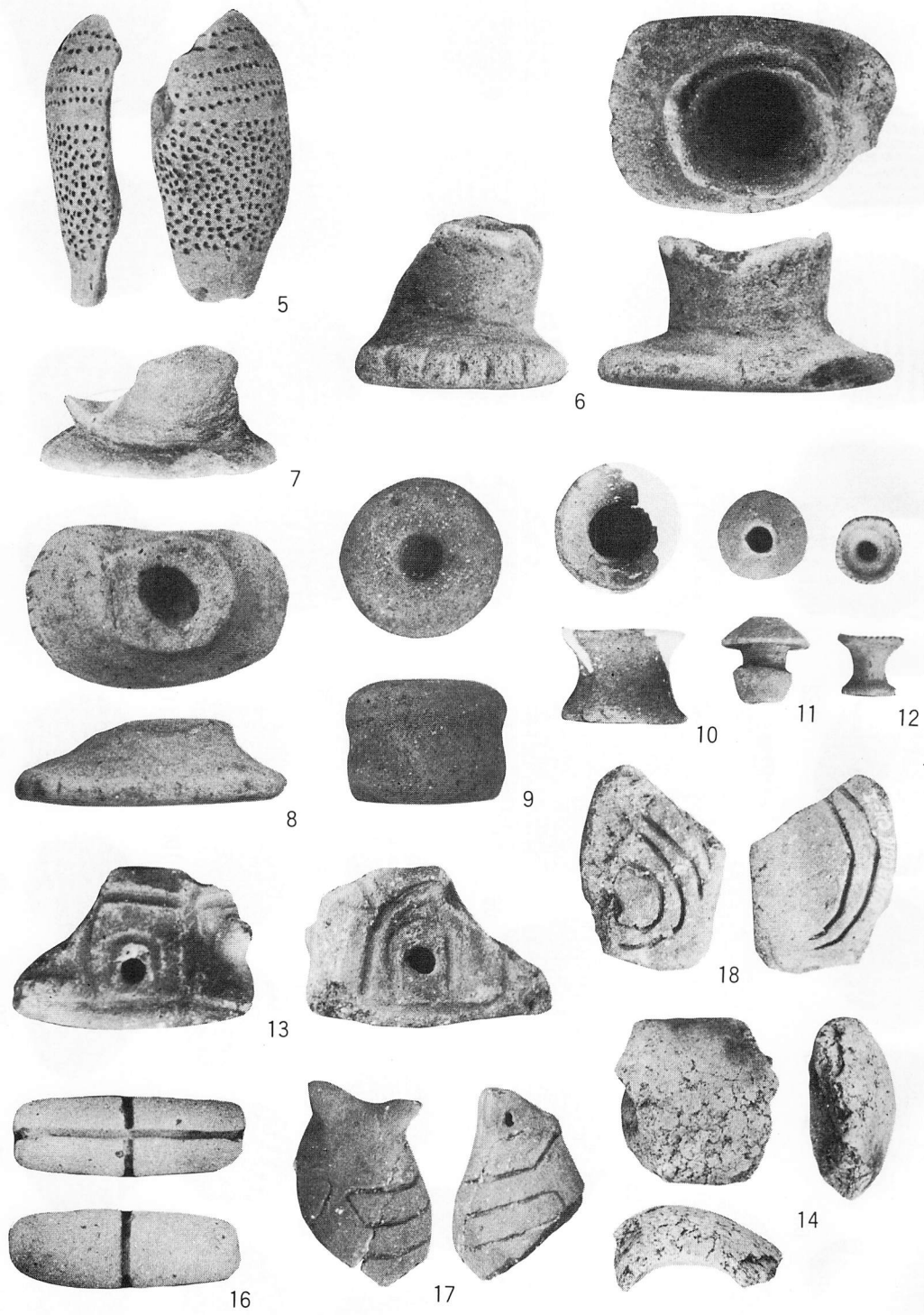


3

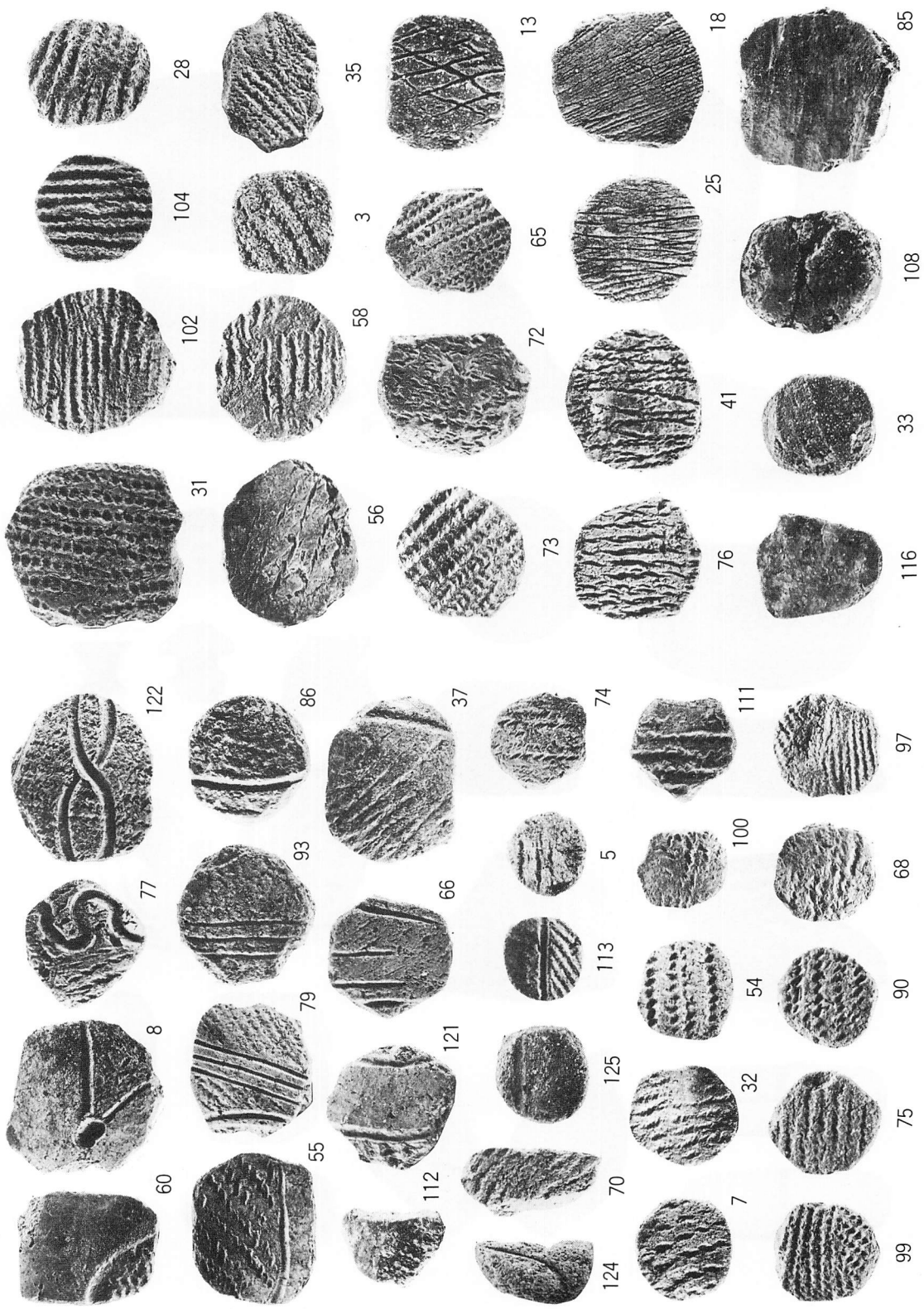


4

图版40 土偶 (1)

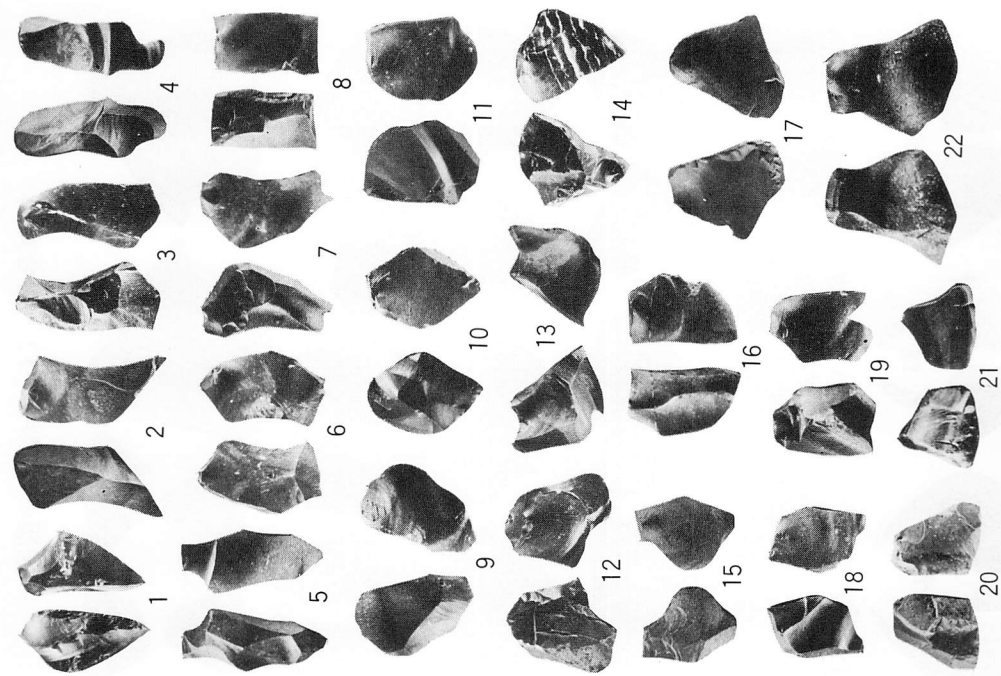


图版41 土偶 (2) · 土製品

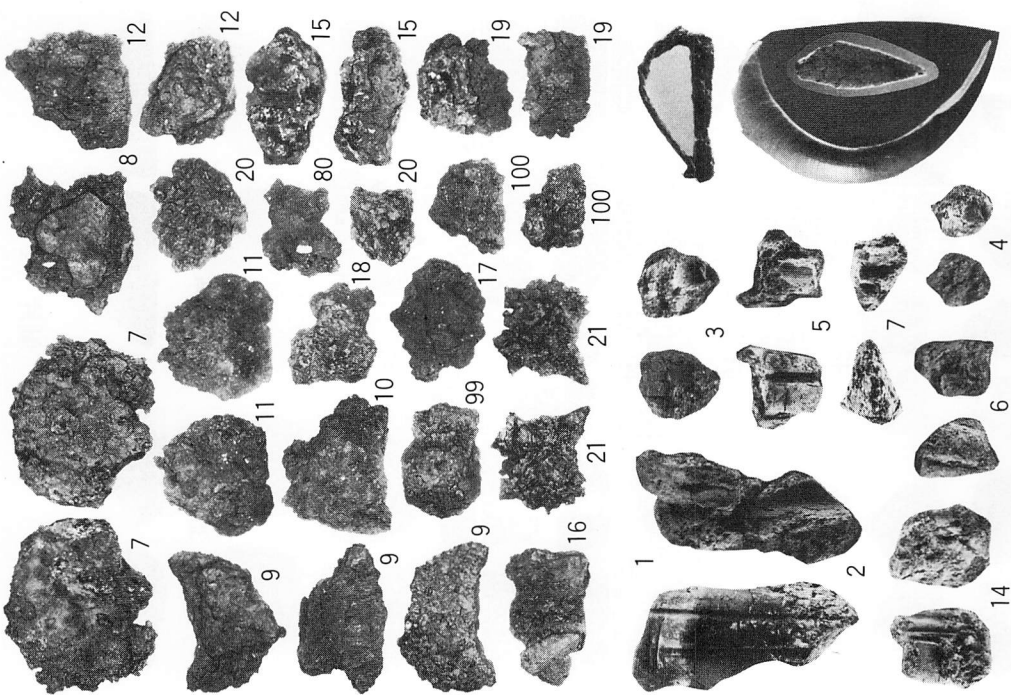


図版42 円盤状土製品(1)

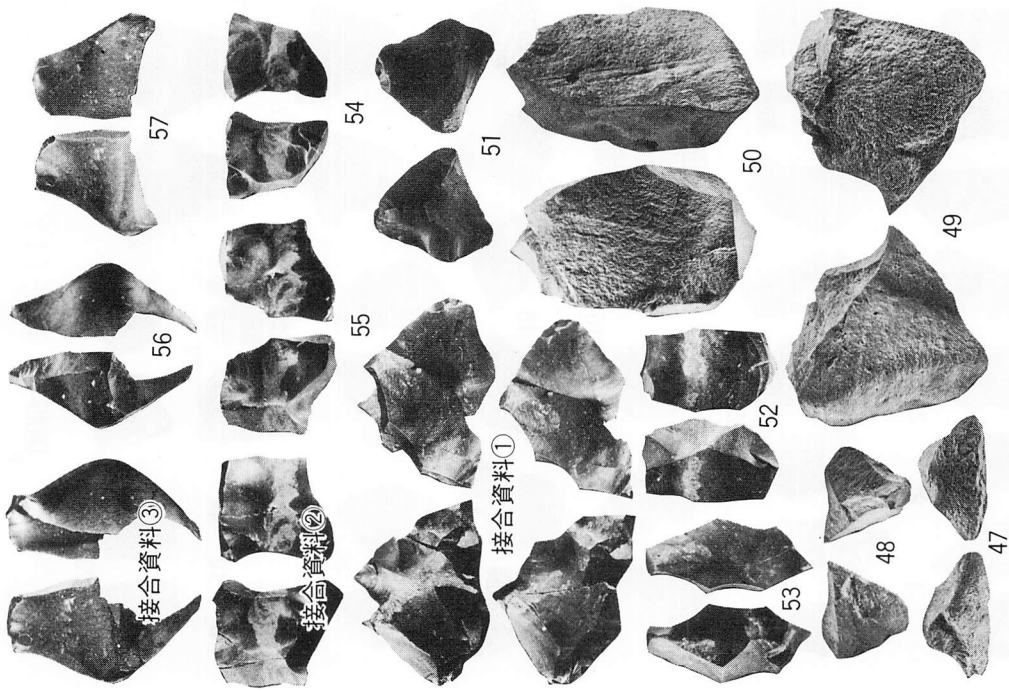
図版43 円盤状土製品(2)



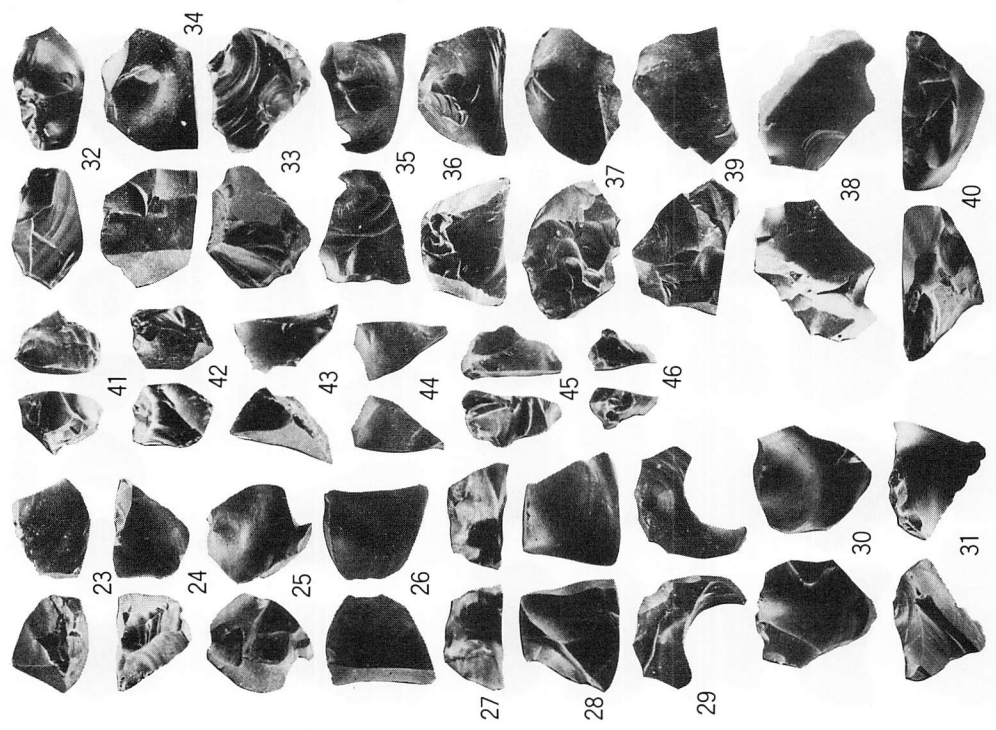
図版45 剥片 (1)



図版44 その他の遺物



図版47 剥片 (3)・接合資料



図版46 剥片 (2)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第82集

川内遺跡発掘調査報告書

気仙川地区かんがい排水事業関連遺跡調査

昭和59年10月25日 印刷

昭和59年10月31日 発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡
第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23-27

TEL (0196) 25-2323
